明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

December 20th 1907.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 187.

大日本蠶絲會報

第百八拾七號

本號要目

●桑樹の新三大病害　理學士 農學士 堀　正太郎

●汽罐給水用としての水質竝に其改良法に就て　農學士 中村雅次郎

●軟化病に就て　岩手縣立農學校教諭 池田榮太郎

●埼玉支會品評會出品審査に就て　農學士 林　驛作

●新發見の野生絹絲蟲に就て　農學士 須田金之助

●女子蠶業教育と女子農學校　農學博士 澤村　眞

●北海道と蠶絲業　農學士 加賀山辰四郎

●割　烹　大日本割烹學會員 石井泰次郎

●桑樹害蟲驅除法　農學士 明石　弘

●秋蠶の話　蠶業講習所技師 土屋　泰

●韓國の養蠶　勸業模範場技手 長岡哲三

●對清蠶業案　在上海東京同文書院 渡邊繁三

TOKYO.
The Association;
No. 2 Mitoshirocho, Sanchome, Kanda, Japan.

特許中原式生繭乾燥器

各博覽會共進會受賞

○明治三十六年第五回內國勸業博覽會に於て褒狀
○明治三十九年關東一府九縣聯合共進會に於て二等賞
○明治四十年東京勸業博覽會に於て三等賞
○明治四十年關西二府二十縣聯合共進會へ參考品として出品し主催縣知事より感謝狀を受く

賞狀抄載

郡是製絲株式會社
貴乾燥器は當會社に於て去る卅七年初めて六臺試用致し候處從來設置せし乾燥器に比し成蹟良好に付爾來年々増設して目下四十臺を設置するに至り當會社の乾燥作業上利益を占め得たること實に尠なからず(中略)別紙目錄の通り金牌壹個を送る(下略)

合資會社三龍社
當社は乾燥器の撰擇に就き多年苦慮致し居候處去る卅八年貴所製作の乾燥器を据付試用致し候處幾多の缺點を補ふことを得たり爾來毎年増設し現に參拾武臺を設備して乾繭に貯藏に多大なる便益を得たり抑も乾繭の作業工程は斯業多年の宿題にして貴所の發明は本問題を解決したるものと云ふを憚らざるなり(中略)別紙目錄の通り金牌壹個を呈し(下略)

關西製絲株式會社
貴下御製作の特許生繭乾燥器を設備し實地に使用する二年乾燥器時間大ひに短縮し然かも繭固有の色澤と解舒を毫も損傷せず其の成蹟の良好にして經濟的なる他に其比を見ず依りて銀盃を呈し(下略)

茂木製絲所
貴所發明の乾燥器は完全無缺なるものにして繭の光澤解舒絲量等他の乾燥器幾多あるも決して一歩を讓らず製絲界に利益を與ふること最も此の器を以て多とする處に御座候殊に時間の短縮なるに拘らず完全無缺なるは尤も他の器に優る所なし

合資會社信勝社
貴所製作の生繭乾燥器を据付け實使せしに繭籠の差替を要するなく操作簡易にして乾了均一なるを得貯繭安全にして繰解頗る佳良なり故に作業上多大の利益を得たり(中略)銀杯一個を贈り(下略)

說明書圖面は御請求次第送呈す

東京市本所區御右衛門町三十四番地
特許中原式乾燥器製作販賣所
長電話浪花二貳二六番電略(ナカ)

歳末の辭

烏兎匆々歳華將に盡るに垂んとし僅に旬日を餘せるの今日退て一歳の過去を顧みれば轉た悲慨なきを得ず本年の我蠶絲業界が不榮の青史に留めたる痕や則ち如何

春來順潮に乘じ來りし蠶業界は不幸にして未曾有の水害と米國財界の恐慌とに遭ひて將に殷賑擊壤の春を謳はんとせる好夢を破り秋風落魄の歎に堪へざらしめたり吾人當業者たるもの豈今昔の感なきを得んや然りと雖も屈は伸の基にして物極れば則ち開く庶幾くは當業者諸君徒に狼狽して投賣等の愚を演ぜず愼重の態度を採り徐ろに事を處せんことを果して然らば現下の悲境は一陽來復の曉に於て大なる光明を認むるの因を爲すは敢て疑を要せざるなり

畏くも　大元帥陛下には今秋武を常毛の野に閱し賜ふに當り同地方の實業家若干名に謁を賜ひ又特に米田侍從を其各工場に差遣せさせ賜へり　陛下の實業に御優渥を傾けさせ賜ふこと此の如く深く殊に養蠶製絲に一層御軫念あらせ賜ふ蠶絲業に從事する者感激何ぞ堪へん本會々頭松平男爵には感泣の餘り直に車を宮內省に馳せ謹て答禮の意を表せられたり若夫れ當業者にして發憤努力難境に臨んで敢て動かず至誠其道を竭し以て聖慮に報ひ奉るの覺悟あらば禍を轉じて福と爲し一家の繁榮と邦家の隆昌とを期する何の難きことか之れあらん乃ち茲に來春の佳象を卜して歳末の辭となすと爾云

明治四十年十二月

大日本蠶絲會

第百八十七號　大日本蠶絲會報

目次

論説

○桑樹の新三大病害　農學士　堀　正太郎
○汽鎚給水用としての水質並に其改良法　農學士　中村雅次郎
○軟化病に就て　蠶學士兼農學校教授　池田榮太郎

抬芳

○埼玉支會品評會出品審査に就て　農學士　林　原作
○新發見の野生絹絲蟲に就て　農學士　須田金之助

叩門

○女子蠶業教育と女子農學校　農學博士　澤村眞
○北海道と蠶絲業　農學士　加賀山辰四郎

家庭

○割烹　大日本婦人學會會員　石井泰次郎

講筵

○桑樹害蟲驅除法　農學士　明石弘
○秋蠶の路　蠶業講習所技師　土屋泰

心影

○蠶業界の偉人八田逸郎君
○高山社と其社長　石田孫太郎

徒響

○韓國の養蠶　蠶業標準繭技手　長岡哲三
○對清蠶業策　在上海東京同文書院　渡邊繁三

問答

○桑樹の肥料に就ての質問並答○桑樹の肥料に就ての質問並答○桑樹栽培に就ての質問並答○陸軍の馬糞に就ての質問並答○混糞を痩の材料と爲すに就ての質問並答○秋蠶並に春蠶の貯藏並に孵卵の構造に就ての質問並答○蠶蛆に就ての質問並答

資料

○千九百六年度世界重要産絲國産絲額統計○日本製絲場統計（佛文）

説林

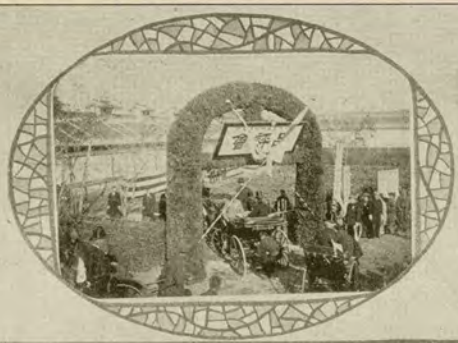
○桑の成長に關する研究（田村愛藏）○桑園と煙草との關係（梅原好松）

絲況

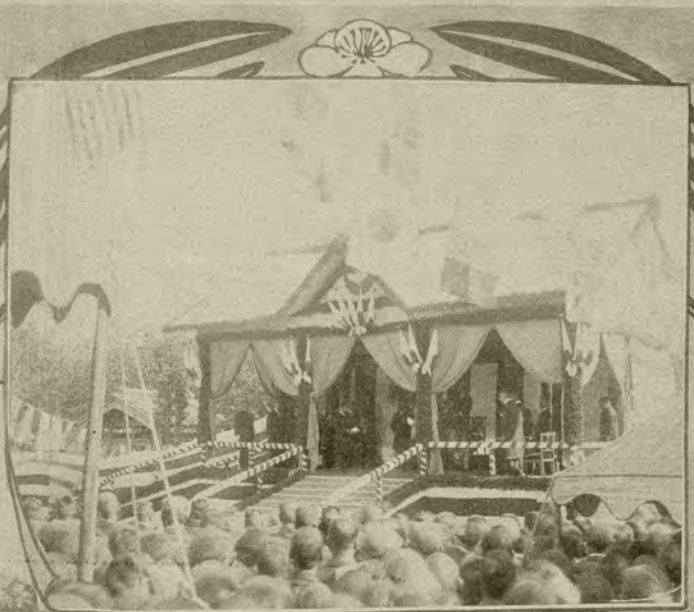
○横濱市場○里昂市場○紐育市場○上海市場○廣東市場

時報

○會務錄抄＝文會職員の變註＝地方農員然臨員の變註＝會員北陸出張の狀況＝區品支會第五回總品會＝下野支會第八回品評會＝埼玉支會第一區品評會受賞者氏名＝製糸工場の調査＝野支會第八回品評會＝埼玉支會第一區品評會●蠶品會報＝真綿蠶業改良＝蠶業改良の文付＝北海道蠶絲會大會＝聯合共進會の蠶絲業＝工女養成會＝評會＝蠶業改良＝蠶絲會大會＝聯合●樹園＝蠶病消滅＝新刊紹介＝勞働者日人要覽＝文藝雜錄

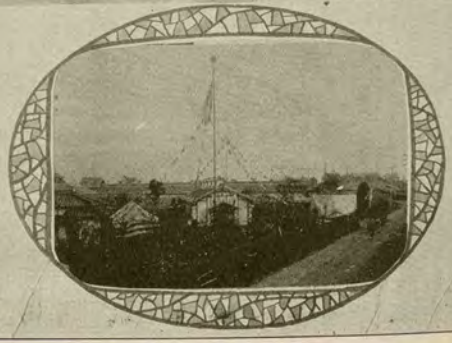


總裁伏見宮殿下同品評會場へ御臨場の光景
Arrivée de L. A. I. le Prince Fushimi.



本社埼玉支部同品評會第一回農業競技大會場の光景
Salle de la cérémonie de la distribution des prix au premier concours agricole de notre Succursale de Saitama.

同品評會賞授與式場參列員
Messieurs les assistants à la cérémonie.



同品評會場の全景
Salle d'exposition.

故高山社長高山長五郎君
Monsieur C. Takayama, feu directeur de la Takayamasha.

現高山社長町田菊次郎君
Monsieur K. Machida, directeur actuel de la Takayamasha.

大日本蠶絲會報　第百八拾七號

論叢

桑樹の新三大病害

編者一日堀學士を西ヶ原農事試驗場に訪ひ桑樹の新三大病害に就き左の談話を聞き得たるを以て親りて學士に願ひ請ひ本欄に收錄すること、答したり但該病菌に關する寫眞は日梅として次號に掲載すべし

學士會員
農事試驗場技師　理學士農學士　堀　正太郎

近時養蠶の物興と共に桑園問題も大分に喧しくなつて來たから何處の當業者も大に肥培耕耘に務めて銳意收業量の増加を期して居るやうである、併し其割合に收穫が殖えない計りでなく却て益荒廢に傾く桑園も少くない、之は一體ドウした譯であらうか、盛に夏秋蚕を飼育すると共に摘葉の回數が多くなつて酷く桑樹の生理を害すると云ふことが一の有力なる原因であらうが、病蟲害の繁殖も亦大きい關係を持て居るに相違ないと思ふのである、然るに當業者は此病蟲害に對しては比較的に冷淡である、注意警戒が足らぬやうである、之は寔に遺憾の至りであるが當業者が注意警戒を怠る間に病蟲害は遂慮なく蔓延して慘害を流すのであるから、決して等閑に附すべからざる大問題として大に調査攻究を爲し、之が驅除豫防の方法を講せねばならぬ、トコロで近來桑樹に最も恐るべき三大病害が流行して居るのであるから、之に就て述ぶるとせう。

さて三大病害とは何んであるかと云ふに、其一つは又枯病である、此病氣は去明治三十五年六月長野縣南佐久郡に發生したと云ふので、同郡の農業教師森斉三郎氏から其標本を送て來た、其時予は初めて此病害を見たのである、本病は「コリネウム」屬の一新種の菌類の寄生に依て起るものであるといふことを確めたから、其病原菌に「コリネウム、モリコールム」(Corynaeum Morioolum, S. Hori sp. nov.) と云ふ學名を附けて置いた、尚ほ實地に就て調査した處が此病氣は殆ど南佐久郡内に限られてあつて發病區域は至て狹いのである、乍併同郡内の立桑又は高刈桑には非常に深山發生して甚しき慘害を極めつゝあるのを見た、發病の局部は必ず枝の又の部分である、換言すれば枝の附根が冒さるゝから枝全部が枯れるのである、發病部の皮は細く龜裂を生じて剝け皮下より黑色の粉末狀のものが顯はれる、發病の時期は信州の寒い地方であるからでもあらうけれども、五月下旬から六月中旬の間であるやうである、此病氣は窒素質肥料の過ぎた處に殊に多い、

ツーして立派な立木の桑園が此病氣の爲に其枝が曾枯れて居るのを見受けた、併し宗に他の地方には未だ此病氣が見當らない、唯信州の一小部分に限られてあるのは誠に仕合せであるけれども、他の地方だと何時發生せぬとも斷言は出來ない、此病氣は是迄で根刈申刈になくて立木にのみ發生するから、立桑地方にありては大に警戒を要するのである。

豫防法は第一肥料の配合に注意するとが最も必要である、從來此立桑地方に慣用される肥料は殆んど窒素質肥料のみであるから、病害を誘發し易いのは當前である、故に一反歩の桑園に對し、在來の肥料以外に木灰十貫目位過燐酸石灰三四貫目位を除分に與へるやうにせねばならぬ、第二發害の枝は速に刈り取り病園の散逸を防ぐことが必要である、尚ほ刈り取りたる病枝は藷にするが宜しい、第三發病の局部が大抵極つて居て三四年目の枝の叉の部分が多く害せらるゝから、秋季落葉後に於て三斗式「ボルドー」液を其部分に一回撒布して置くが良ろいし。

伊太利國に於ける玉蜀黍被害地の景

次は胴枯病である本病も亦去三十六年に信州上諏訪郡の魯桑に初めて發見したのである、爾來年一年と各地方に此病氣のあるとが判つて來て、本年の如き西は鳥取縣、京都府、東海道では岐阜、愛知、關東では茨城、栃木に蔓延し、信越地方より福島以北青森に至る迄の間は到處に其發生を見るのである此病氣は「スフェーロネーマ」屬の一新種の菌類の寄生に依て起るのであるといふことが分つたから、其病原菌に「スフェロネーマ、モリイ」(Sphaeronema Mori Hori)といふ學名を用ひて置いた、此病氣は幹の地際に多く發生するけれども時には地上二尺位の高さの處にも發生し双地中に少しく埋もれて居る幹の部分にも發生することがある、發病の初期には皮層の一部分が丁度油でも滲みたかの樣に少し濕つて來て褐色となる、此病斑部が段々廣がると遂には其部分が凹陷して仕舞ふ、此時に至ると皮層の色が赤味を帶びて茶褐色に變じ又其表面に細粒狀の突起が無數に顯はれるのである、此突起の生ずる理由は皮層の下に病菌が發育して、小さき蓋即ち子殼を生じ、其子殼の中に短き紡錘形の胞子が無數に出來る、之が熟すると子殼の口が皮層を突き破つて、外に顯はれ、胞子を外に溢出する、其爲に皮層に微細なる突起が出來るのである。(未完)

伊國某製糸結果内部製造装置の景

汽鑵給水用としての水質並に其改良法に就て(承前)

學藝委員
鑛業調査所技師 農學士 中村雅次郎

●汽鑵を腐蝕する水　天然水は如何に良好なるものにても絶體的に鐵類を腐蝕しないものは全くない、さりながら此現象は水其物の作用によりて起るものではなくして、專ら其内に溶解せる或物質の作用に因るのであるから、從て水質の如何により、此腐蝕性に著しき相違あることは申す迄もないことである、然らば如何なる物質が右の作用をなすかと云ふに、深井水中に於て屢々見出さるゝ硫酸の如き游離酸は申すに及ばず、鹽類中にありても苦土、アルカリ、アンモニヤ等の鹽化物、鐵、及び礬土等の硫酸化合物、曹達並石灰等の硫化物、及び硝酸曹達、硝酸「アンモニヤ」等は、何れも鐵類を腐蝕する性質を有するのである、其他炭酸瓦斯及び酸素等の瓦斯類にも此性質を有し、又海岸附近の水中に生存する微生物中にも右の作用をなすものがある、扨て以上各の物が汽鑵中にありて、鐵板と如何なる作用をなすかにつき、以下順を追て記載することにしやう。

第一　游離酸類の作用

(甲)　鹽酸　此酸は鹽化物を多く溶解せる水中に屢々見出さるゝのである、此の如く游離鹽酸を含有せる水を汽鑵に給水するときは、該酸の作用により鐵板は甚しく腐蝕するのである、今此作用の概要を記載せんに、右の鹽酸は先づ鐵板に作用して溶解性の鹽化第一鐵 $FeCl^{II}$ を生じ、之を汽鑵水中に溶解す、此鹽化第一鐵は直ちに酸化して、鹽化第二鐵 Fe_2Cl^{VI} と酸化鐵 Fe_2O_3 とになる、此内酸化鐵は沈澱して銹となり、鹽化第二鐵は汽鑵水中に溶解する高温度のために、更に第二の變化を起し酸化鐵(銹)と鹽酸とに分解するのである、此くして新に生じたる鹽酸は、又以上の作用を反復するのである、汽鑵水中に少量の游離鹽酸存在するも、右の如き循環作用により鐵板は漸次に減耗すると同時に銹は漸次增加するときは、汽鑵は遂に使用に耐へぬ樣になることは勿論使用上甚だ危險であることは申す迄もない。

(乙)　硫酸　此酸は硫黄又は硫化礦の出づる地方の水若くは深井水中に屢々游離して存在するのであるが、此酸を溶解せる水を汽鑵に給水するときは、鹽酸の場合と同樣にして、之が爲めに鐵板は著しく腐蝕するのである、今該作用の要領を記載せんに、右の硫酸は鐵板に作用して最初硫酸第一鐵を生じ之れを解溶す、次に硫酸第一鐵は酸化して酸化鐵(銹)と可溶解性の硫酸第二鐵とになる、而して硫酸第二鐵は汽鑵中の高温度に遭遇して更に硫酸と鹽基性の硫酸鐵とに分解するのである、右の變化により新に生じたる硫酸は以上の作用を反復するのである、右理由により游離硫酸を含有する水を汽鑵に給水することは汽鑵保存の上に甚しき損失あるのみならず使用上甚だ危險であると云はなければならぬ。

要するに水を検定したる結果酸性と認めたるものは、何れも甚しく汽鑵を腐蝕するが故に、之を給水することは否定しなければならぬのである。

第二　鹽化物の作用

（甲）鹽化苦土　鹽化苦土は極めて水に溶解しやすきものなるが故に、天然水中には多少此物質を溶解するのである、特に海水中には鹽化苦土を多く含有するが故に、從て海岸附近の水には屢々此物質を多量に含有することがある、扨て此物質は極めて分解しやすき性質であって、其水溶液を攝氏の一〇六度に熱すれば忽ちに分解して鹽酸と苦土とになるのである、而して右分解によりて生じたる鹽酸は鐵板と既記の循環作用をなし、其だしく汽鑵を腐蝕するが故に鹽化苦土を多量に含有する水は汽鑵の給水用として其だ不適當である。

（乙）鹽化曹達（食鹽の主成分）鹽化曹達は吾人が日常使用しつゝある食鹽の主成分であって、其だ水に溶解しやすき物質である、天然水中之を其だ多く溶解せるものは勿論海水であるが、淡水中にも必ず多少之を含有するのである、扨て此物質が水中に硫酸苦土又は炭酸苦土若くは硅酸（何れも天然水中に存在する普通成分）と共存するときは之を汽鑵に給水するときは次に列記せる變化をなし、游離鹽酸を生ずるが故に汽鑵は腐蝕するのである。

$$2NaCl + MgSO_4 + H_2O = MgO + Na_2SO_4 + 2HCl$$

$$2NaCl + MgCO_3 = MgCl_2 + Na_2CO_3$$

$$MgCl_2 + H_2O = MgO + 2HCl$$

$$2NaCl + SiO_2 + H_2O = Na_2SiO_3 + 2HCl$$

（丙）鹽化アンモニヤ　天然水中鹽化「アンモニヤ」を溶解する場合は決して稀てはない、特に有機物質を多く溶解せる水には多量の鹽化「アンモニヤ」を含有するのが普通である、斯る水を汽鑵に給水するときは、高熱の爲めに其内に存在する鹽化「アンモニヤ」は分解して鐵類を腐蝕する鹽酸を生ずるが故に汽鑵は少から寸損傷を被むるのである、扨て此物質を多く含有する水は汽鑵給水用として甚だ危險なりと云はねばならぬのである。

要之するに分析の結果鹽素の多き水又は有機物質の多量なる水は汽鑵を腐蝕するが故に、之が給水用に供することは甚だ危險である。

第三　硫酸鹽類の作用

（甲）硫酸鐵　此物質も亦屢々天然水中に含有するのであるが、特に深井水中に多いのである、故に深き鑽井水より出づる水を其儘汽鑵に給水するときは、既記硫酸の場合と同じく右の硫酸鐵が汽鑵中にありて二三の變化をなしたる後游離硫酸を生じ、之が爲め汽鑵は甚しく腐蝕するのである、されば斯る水質のものを汽鑵に用ゆることは甚だ宜しくない次第である。

（乙）硫酸礬土　硫酸礬土を多く含有せる水は、深井水と共に粘土質に於ける水とである、此物質を多く溶解せる水を汽鑵に用ゆるときは、右の硫酸礬土が高温の爲めに分解して膠狀の「アルミナ」を沈澱すると同時に、有害なる硫酸を生ずる

のである、斯の如き作用あるが故に、此物質を多く溶解せる水は汽鑵を腐蝕するのである。

（丙）硫酸石灰　硫酸石灰は天然水の成分中最も普通のものであるが、特に之を多量に溶解せる水は深井水である、而して右硫酸石灰は恐るべき汽鑵破裂の原因たる「スケール」を作る外に、有機物質と共に水中に存するときは、汽鑵中に於て其一部分は硫化石灰に變化し、此の硫化石灰は次の硫化物の項に記載せる作用をなして汽鑵を腐蝕するのである、即ち硫酸石灰并に有機物を多く含有せる水を汽鑵に給水するときは「スケール」を作るのみならず、汽鑵の腐蝕作用をも併せ行ふのである。

要之するに分析の結果硫酸分多量なりと認定したる水は、汽鑵給水用として甚だ不適當と云はなければならぬのである

宮山縣綠蔭内景（德地縣岡山縣技師寄贈）

第四　硫化物の作用

（甲）硫化曹達若くは硫化石灰　硫化曹達若くは硫化石灰を多く含有せる水を汽鑵に使用したならば、直ちに之等の硫化物と殆かも卵の腐敗したるが如き臭氣を有する硫化水素とに分解するのである、斯くの如く分解作用によりて生じたる硫化水素は汽鑵にありて高温度の下に酸化して鐵類の腐蝕を逞くする硫酸に變化すると同時に、其一部分は直接に鐵板に作用して硫化鐵（FeS）となるのである、而して此硫化鐵は當然の爲めに更に變化して一酸化鐵（FeO）と硫化水素とに分解するのであるから、結局二段の循環作用をなしつゝ鐵板を腐蝕するのである。

（乙）硫化鐵　此物質は硫鐵鑛の出づる地方の水に屢々混在するのであるが、之を多く混在する水を汽鑵に給水するときは、甲に於て記載したる變化をなしつゝ鐵板を腐蝕するのである。

要之するに水を検定したる結果、硫化水素の反應を認むるものは汽鑵を腐蝕するが故に使用せぬ樣にせねばならぬのである。

第五　亞硫酸鹽類の作用

此鹽類も往々天然水中に見出さるゝのである、此鹽類は汽鑵中に於て直ちに酸化して硫酸鹽に變化したる後、既記硫酸鹽類と同樣の作用により汽鑵を腐蝕するのである。

第六　硝酸鹽類の作用

天然水中に硝酸鹽類の存在する場合は決して稀てなきのみならず、時としては游離の硝酸を認ることすらあるのである、

扨て之等硝酸鹽類が重硫酸曹達の如きものと共に水中に存する中は、汽鑵中に於て硫酸曹達と硝酸に變化し、次に此硝酸は鐵板に作用して硝酸鐵を生じ之を溶解するのである、此くして生じたる硝酸鐵は高熱の下に分解して、再び硝酸を遊離するのである、此の如く硝酸の循環作用により、鐵板は漸次減耗すると共に腐蝕の度を次第に増加するのであるから、水質を檢定したる結果硝酸の反應著しき水は汽鑵に給水せぬ樣にしなければならぬ。

第七　炭酸瓦斯の作用

天然水は如何なるものも此瓦斯を溶解しないものはない、獨り天然水のみならず蒸餾水すらも剪く之を室内に放置するときは、忽ち此瓦斯を溶解するに至るのである、元來此瓦斯は普通空氣中に存在する諸瓦斯中では比較的多く水に溶解性であるから、場處よりては可なり多量の炭酸瓦斯を溶解する水を認むるのである、而して一般から云へば井水幷に深井水には川水に比して此瓦斯を溶解することが多いのである、之が實例の二三を擧ぐれば左の如し。

但し左表に揭げたる數量は水一〇〇立方「インチ」中に於けるものなり。

	炭酸石灰量	遊離炭酸量
水の種類		
深井水	五、五二〇	
テームズ川水	四、〇二二	
ロホカトリン川水	〇、二一五	
カンバランド山水	〇、二八一	
雨水	〇、二二八	

扨て右の炭酸瓦斯は水の力を籍りて鐵を腐蝕するのである彼の及物類の如き鐵製のものを空氣中に放置するとき銹の生する主原因は炭酸瓦斯と濕氣とである、即ち炭酸瓦斯は鐵に作用して初め炭酸鐵を作り、次に炭酸鐵は炭酸瓦斯を溶解せる濕氣の爲めに重炭酸鐵に變化し、此くして生じたる重炭酸鐵が空氣と水との作用により磁鐵となり、最後に酸化鐵即ち銹となるのである、右の如き作用あるが故に此瓦斯を多く溶解せる水を汽鑵に給水するときは知らず識らずの間に鐵板を腐蝕するが故に分析の結果此瓦斯を多量に含有せることを認めたる水は可成汽鑵に使用せぬ樣注意しなければならぬ、

第八　微生物の作用

水中には必ず多少の微生物が生存するものであるが、或種の微生物中には鐵を腐蝕するものがある、斯かる有害なる微生物は特に海中に多く生存するが故に、海岸附近の淡水中には從て其他のものより此種の微生物が生存する場合多きことであろう、今左に「ブラコー」氏の此種に關する實驗成績を揭げんに。

水の種類	濾過せる窒素化合物	溶解せる酸化鐵	全鐵量
濾過水	一、九〇〇	〇、〇〇	一、九〇〇
同殺菌水	一、一〇〇	〇、〇	一、一〇〇
海水	一、六、五	一、九、五	三、六〇〇
同沸煮水	三、五	〇、〇	三、五

但し水の試驗は各一八グラムの重量を有する鐵板の屑をよく摩きて之を石炭に揭げたる各水中に各八日間浸し試驗したものである

右の如き成績あるが故に鐵檢の結果鐵の腐蝕作用をなす微生物多數なりと認定したる水は、可成避ける樣にしたいのである。

汽鑵を腐蝕する水の改良法

汽鑵の腐蝕を防ぐ爲めに種々の物質を汽鑵水中に加ふることがある、據て左に之等の二三を御紹介することに致したい。

(甲)　亞　鉛

汽鑵の腐蝕を防ぐ目的にて往々亞鉛を汽鑵水中に加ふることがある、此操作を施せば多少の効力はあるが、完全に右の目的を達し得られないのみならず、有効期間比較的短かく欠點を有するのである元來亞鉛が右の目的に對して多少効力ある理由は、亞鉛と鐵とが觸接すれば此間に電流を生じ、之が爲め水の一部分は分解して水素と酸素となる、而して此酸素は亞鉛面に集まりて之を酸化し、水素は鐵の面に集まりて之れが酸化を防ぐのである、要するに物理的作用によりて鐵板の腐蝕を防禦するのであるが、屢々亞鉛面を掃除しなければ電流が起らなくなり、爲に効力を失するが故に此點に注意を要するのである。

富山縣井波彫刻師工藝品製造所の光景（他六枚）

乙　炭酸曹達

炭酸曹達は汽鑵を腐蝕する水に對しても、又「スケール」を作る水に對しても、之を改良する目的には經濟的にして、且つ最も有效である、即ち汽鑵を腐蝕する鹽化苦土は之が爲に然らざる苦土質に變じ、又硫酸鐵及び硫酸礬土は炭酸曹達の作用によりて全く無害なる水酸化鐵に變ずるのである、但し使用上注意を要する點は汽鑵中の湯が未だ温かならざるとき加へぬ樣に注意するとである。何となれば若し冷水中に之を加ふるときは、假令所要以上に炭酸曹達を使用するも其作用全からざるのみならず、却て「スケール」を形成する重炭酸苦土が出來る樣なことがあるに反して、湯が温きときに之を使用すれば其效力を全からしむることが出來るからである、要之するに炭酸曹達は其價廉なるが上に比較的少量にて汽鑵を腐蝕する成分のみならず、「スケール」を作る物質までも全く無害のものに變ずる作用あるが故に腐蝕性の水改良劑としては先づ一位に屬す

るものであろう。

（丙）苛性曹達及加里

此の何れも共に鹽化苦土及び硫酸鐵等の腐蝕性成分を、否らざる性質に變ずることに對しては極めて有效なるも硫酸礬土及硫酸石灰に對しては餘り效をしないのである、而かのみならず其價炭酸曹達に比し高價なるが故に不經濟である、要するに曹達、加里共に或る特種の腐蝕成分に對しては有效なるも其效力炭酸曹達の如く普ねからざるが故に水質改良劑としては先づ第二位若くは第三位に位するものであろう。

（丁）水酸化「バリユム」苛性重土

此物質も亦汽鑵を腐蝕する水並に「スケール」を作る、水に對して有效である、特に汽鑵を腐蝕する水に對しては其作用顯著である、即ち鹽化苦土は之が爲めに無害なる水酸化苦土に變じ、硫酸鐵及び硫酸礬土も亦之等の水酸化物に變ずるのである、故に其效力は苛性加里及び曹達以上である。

（戊）炭酸「バリユム」

炭酸「バリユム」も亦汽鑵を腐蝕する水の改良に對して效力を有するのである、特に此物質は前々に記載したる諸物質と異り、冷水中にありても鐵及び礬土の硫酸鹽を無害なる水酸化物に變ずるの作用をなすのである、然しながら鹽化苦土に對しては其效力を認めないのが缺點であろう。

（己）硼砂及び硅酸加里

硼砂は冷水中にても鐵及び礬土の硫酸鹽を無害なる沈澱物となし、鹽化苦土を温湯中にて同樣になすの效力あるも價高きが故に不經濟なることが其缺點である、又硅酸加里は同樣に又腐蝕性の水を改良することが出來るが余り經濟的でないのは缺點と云はねばならぬ。

（庚）石灰

石灰は汽鑵を腐蝕する水を改良するために屢々使用さるゝのであるが、使用方法を誤りて分量を過ごすときは、却て「スケール」を作る物質を之がために生ずるのであるから、使用量に注意を要するのである、要するに此物質を屢々水改良の目的に使用する原因は、容易に且つ廉價に得らるゝからであろう、兎も角も改良すべき水を分析して、其内に含有せる有害成分の量に相當する丈使用する樣に注意すれば、多少の效力は認むることが出來るであろう。

結論

先々月以來題記の論題につき引き續き貴重なる本誌面を汚がしたことは實におこがましき次第であるが、要は水質の如何は煮繭繰糸揚返し等の普通製絲の上のみならず、製絲家として一日も缺くべからざる汽鑵に對し、多大なる影響を及ぼすものなるが故に斯業を營まるゝ諸君の益々水質の點に注意を拂はんことを希望の餘り、佛國の機械化學者たる「ブラコ

ウ」氏の記載中より其要點を摘錄し、併せて愚見をも少しく加へた次第である。（完）

軟化病に就て

第四　硬化性黑死病菌

諸君は養蠶中往々黑色に硬化せる蠶兒の死體を見ることあるべし、即ち斃死したる蠶體中の水分を蒸發し盡したるに似たるならん、又上蔟後薄皮繭を造りて黑色に硬化し、或は繭を造り終りて所謂死籠となり、之を振動すれば内部に豆若しくは小石の入りたるが如き音あるを聞かん、之を切り開きて檢せば黑色に硬化せる蠶兒の死體を見るべし、是れ即ち本園の寄生を受けたるものなり、予は右の徵候あるものを屢々飼育中若しくは上蔟中に分離し屢々同一の細菌を得、昨年之を蠶兒に試み、右の病原菌たるを知り、或は便宜上黑硬菌なる名稱を附し、或は菌菌と假名し、研究生に試驗せしめ又生徒に實驗せしめて、全く腐敗菌にあらざる右一種の桿狀細菌の寄生に基くものなるを確め、此菌を硬化性黑死病と名命し、病菌と硬化性黑死病菌と下命せり、左に前例に依り病徵及び病菌の性質形態一班を論ず度せん。

農學士　池田榮太郎
磐手縣立農學校教諭

因に病名に就て一言し置かん、予は第一圖に發表せるもの丸透鏡病菌と稱し、第二圖のもの丸ち喰餌菌と稱し、第三圖のものは黑色病菌と稱し、第四圖のものは今回のものなる硬化性黑死病菌と名命せり、就中前者は之を以て寄かを在むとなし、若しくは異樣の悪分泌ものあらん、然れども蠶兒に欲て研究せられざりし病菌なるを以て、病徵の上とり便宜上所に名命せるものなり、然るに病徵なるものは既上述べ如く甲乙両區別し難きものあり、故に吐返し下痢し一般黑斑の如きは多數の病蠶同一なるものなり、故に病徵の或一特徵を捉へて、前の種類異るに徒りて斯く名命せるものなり、若し然らざれば何號と稱へ或は甲乙丙と以て呼ばるべくから寸、是れ當業者の參考上參觀研究上甚だ不便なる知るなり。

予が發表せる病菌は終始予の研究室に存置し研究な試みんとするのであるべ何時にても之を送呈せん、斯學の造詣予の望ろ希望するところなり、但し研究方を認めざるものには謝絶せん、是病菌移植の危險あればなり。

一　病徵

本病菌の寄生を受けたるものは他の軟化病と同しく、始め蠶體衰弱して軟化して斃死し、軟化せるさゝ漸次黑色となり華氏七十五度内外の温度にありては、凡そ一晝夜にして硬化も硬化病蠶の如し、故に之を其値硬化病蠶の如く試驗管に標敗性桿狀菌の如く激烈なるものにあらざるが如し、思ふに腐潰せざるを以て桑葉蠶座及び四憐の蠶兒傳染すること少きものなるべし、然れども飼育中如何なる年にも多少此斃蠶を見ざるなきを以て、普通なる軟化病と認めて研究し置くの必要あるなり。

所の知き病蠶は病菌上軟化病と稱するは甚だ不穩當なるも、何世の間に小本邦にては軟化病は軟化するを軟化するとに拘らず、凡て創開學生より來るものが軟化病と稱し、絲狀菌の寄生より來るもの丸硬化病と稱する慣例となれるを以て、予も此例に慣ひ本病を軟化病中に編入するものなり。

二　病菌の形態

本菌も亦小なる棒狀菌にして黑症病菌（前號參照）より尚小に大さ一定し長徑〇、〇〇一一「ミリメートル」を有す、兩端圓く黑悲病菌に比し、一層鋭圓なり、通常二個連續し又一個單獨なるものも少なからず。

藥化性黑死病菌（一千倍）

三　病菌の性質

ゲラチン穿刺培養の狀

（一）運動　培養の時日を經たるものは殆んど運動力を有せず。

（二）染色　凡ての「アニリン」色素にて能く着色す。

（三）脫色　グラム氏液に脫色せず。

（四）芽胞　未詳。

（五）「インドール」反應　微かに之を呈す。

（六）牛乳　を凝固せず、酸を生せず。

（七）瓦斯　發生せず。

（八）色素　如何なる培養基にも淡黑を帶ぶ。

（九）扁平培養　圓き灰暗色の「コロニー」を造る。

（一〇）塞天斜面培養　帶黃白色にして斷面弓形を爲し、周緣波狀を呈す日を經て稍黑味を帶ぶ、而して表面常に濕潤なり。

（一一）「ゲラチン」穿刺培養　純然たる好氣性細菌にして「ゲラチン」を溶解したることなく所謂釘狀に蕃殖す。

（一二）肉汁培養　菌膜を作り始終溷濁し菌膜は沈澱す液は少しく黃色を帶ぶ。

（一三）ペプトン水　少しく黑味を帶び半透明なり薄き菌膜を作りて沈澱す。

（一四）馬鈴薯培養　高く隆起して蕃殖し始め灰色に少く赤味を帶び、遂に全面に擴りて黑みを帶びたる黃灰色に變ず、而して表面稍濕潤す。

四　靈體試驗

本菌分離以來反覆二十有餘回の實驗を經たり、本病蠶中より、細菌を分離して五種の異る細菌を得たるも他の四種は病原となるものなく、何れの場合も本菌のみ激しき病原を發せしめたり、但し蛹中にあるも調査中なるを以て後日に讓るべく、即ち前例に倣ひ實驗成績中の二三を摘記して、一斑を覗ふの資となすべし。

本菌も亦喉腺菌及黑悲等と同しく經食によりては健蠶を斃

すこと少く、血液侵入に依りて激しき病勢を惹起するものなり。

（一）皮下接種

（1）六月九日三齡起蠶二十頭供試（午前十一時半接種）

			斃死頭數	經過時間
六月十日	午後一時二十分		四	二十五時間と五十分
同	午後一時三十五分		八	二十六時間と五分
同	午後二時三十分		二	二十七時間
同	午後五時二十分		四	二十九時間と五十分

二頭無事

（2）八月二十四日午前十一時接種供試蠶五齡熟蠶二十頭

二十五日	午前八時	五	二十一時間
二十五日	午後三時	六	二十八時間
二十六日	午前八時	二	二十八時間
同	午後四時	四	四十五時間
同	午後八時	一	五十三時間
二十七日	午前八時		六十九時間

二頭ヤ鏡中黑色硬化して死す

（二）肛門接種

八月十六日午後三時接種供試蠶（熟蠶五齡）二十頭

八月十七日	午後三時	四	二十四時間
同	六時	四	二十七時間
同	十八日　午前八時	五	四十一時間

二十一日午前九時七頭上蔟蛹中三頭黑死變化

以上四種の細菌は予の蚕化病原菌として、新に研究を確定せるものなり、次號に於て最も普通なる細菌にして蚕病原と認むべき細菌一種を紹介し續て結論となさんと欲す。

埼玉支會品評會出品審査に就て

學藝委員
蠶業試驗所技師農學士　林　驛　作

共進會品評會等に於ける出品審査の任に當る者は固より之れが優劣を査察し、優良なるものを評拔して等級に從ひ擬賞すべきは勿論、尙其缺點を指摘して將來改良の資に供すべき責任を有す、然るに從來多くの地方に在りては擬賞に就ては滿足なるも、出品物に對する調査研究の點に至りては未だ盡さざるものあり、是れ蓋し審査員に充分なる日子を與へざるに由るものにして、誠に遺憾とする所、若し其れ少しく審査日數を延長し調査研究をして完全ならしむることを得ば品評會の効果は層一層莫大なるものあり可きなり。

予輩は今回大日本蠶絲會埼玉支會第一回品評會出品審査の

任に當らしに例によりて審査日數は甚不十分なりしが、審査員諸君の非常なる勉勵に依り滯りなく擬賞を終ると同時に、多少調査の成績を得たり、是れ固より未だ充分なりとは稱すべきに俱らずしかれども、將來改良の資を擧げられんことを希望すると同時に、一は以て當業者の參考となる成績を擧げられんことを望むの微意に外ならざるなり。

今回審査を行ひたる出品物は繭繭種、生絲、桑苗及繭其の五種にして繭は千三百餘點、生絲は二百餘點、桑苗は五百餘點、繭種は五百餘點、繭其は少數にして且つ重要なるもの少なからず故將く之を掛き前四者に就き之を述べんとす。

八點中四十四種の異名あり、夏秋繭は後來注意を要す、而して最も多數を占めしたるは春繭繭にありては白玉にして、又昔白龍大又青玉之れに次き其他繭種は極めて僅少なりとす、即ち大體上白玉又昔（春）白龍（秋）は出品繭の大部分を占め、稍や齊一なるが如くなれども、一を欠き、殊に夏秋繭は未だ繭種見ずありて未だ審査に至らず、繭の名は、著しく赭色を帶び、又は白龍、青熟之れに次き其他は、何となれば色澤は「青」を欠き、殊に夏秋繭は、著しく赭色を帶び、絹力脆弱にして解舒不良なるが如し、思ふに之れが主たる原因は上蔟時期に當り霖雨蒸熱に際會せず、又蔟室に於ける通風不良なりしに依るならん、形狀は大小不齊に、或は大に失し、或は小に過ぐるものあり、今其極端なるものを示せば左の如し。

		長	徑	樞
春繭繭	過大	一、八四	一、二〇	五、六
	過小	三、四四	〇、九二	四、八
	過大	一、八六	一、二六	五、四
	過小	三、四三	〇、九六	四、五
夏秋繭繭	過大	其他長形又は短形に過ぐるもの、繰目し深浅其宜しきを得ざるもの等あり、乾燥及貯藏に不良なる點少なく、運歩の跡を認めしもの、化蛾期に達しても殺蛹の時期其宜しきを得ず、化蛾期に追ひて行はれたるものあり、或は高熱又は乾燥過に失して繭層を焦損し、又は微熱の害を蒙りたるものあり、例一層改良を圖るの必要あるを認めたり、繭層の厚薄及纖度に就ては著しき欠點なき繭は平均六百回以上のもの僅に二點にして、概して纖度は最も細きものは一、九二デニール、最も太きものは三、七デニールなりて、其成績概ね不良なりし、今出品中重なる繭類に就き調査せる器械審査の成績を表示すれば次の如し。			
	過小			

春繭繭之部

種別	目標	調査繭數	平均繭長	對二百回平均繭數	對繭一粒平均節數
白玉		一二〇	四、二四	〇、四六	〇、七〇
又昔		七四	四八、一〇	二、八二四	〇、七四
青熟		一三	四九七、三	二、六三五	〇、五四
白龍		二〇	四七、一五	二、七八七	〇、五四

夏秋繭繭之部

種別	目標	調査繭數	平均繭長	對二百回平均繭數	對繭一粒平均節數
白龍		六三	四五、四二	二、四六六	〇、七〇
大和錦		八四	四七、〇〇	二、六六〇	〇、五四
丁民錦		一二	四五、三六	二、六〇二	〇、五四

備考　繭長及纖度は蔟切の二百回に對するものとす

繭層は繭一粒に就き蔟切の二百回に對するものとす

蔟切は繭一粒に對するものとす

之を要するに種和名稱の比較的統一されたるは賞すべき事なれども、繭質にありては尚改善の餘地少なからざるを見る殊に繭の節切膨の多きは最も留意改良を要する點となりとす、宜しく適當なる形狀を撰擇し、飼育の方法に就き中蔟法に注意し、之れが乾燥貯藏を完全にし、以て繭質の改良と一定と必要ある可し、御他府縣出品繭の概して良好なりしが、如きは本縣當業者の最も猛省すべき所なりとす。

繭種は春繭種にありては、まら玉最も多く、又昔、白玉、青熟之れに次き、秋繭種にありては多摩錦最も多く白龍、川錦、青熟等之れに次き、其他は極め て少數にして其名稱の「其」雖なりとは謂ふ可らざるが如しと雖も春繭種三百八十四點中四十五種、秋繭種百十七點中に三十二種の異名あり、而して繭種は佳良なるもの多かりしも、不良なるもの少なからず、例せば色澤の不齊なるもの、粒の形狀不齊なるが如し但し產地によりて、色澤の不齊なるもの、割合に種面の明なるものあり、氣候風土の關係に止まらず種繭の撰擇不充分なると、繭層の厚薄並に飼料の不良なるとに基因することなきにあらざるべけれども、此等の點に就きては、將來充分に改良を要す、微粒子、稚蚕の成績は可良なりと雖、尚多毒點數二百三十三點に對し、三十七點の有毒あり、一點に付き三錢面有毒を認めしは三點にして、其他は僅少なりとす、然れども未だ以て安んずべきにあらざるなり、繭種の調製は繭層の厚薄、繭層の中の注意を缺き、種紙に多く蛾屎或は鱗毛を附着せしめ不潔なる惡なからず、厚く附着せしめ不潔なるものあり、原種にありては板の位置正しからず、隙區と相接するあり、殊に產卵數の過多なるは一蛾一區に八百五十二粒を算したる法小形に失するあり、產卵色に反して其色に依るも二母蛾の產卵なること明かなるものあり、之に反して一母蛾の產卵は一蛾の產卵として僅かに熟さざる所にして、其產卵數は大小不齊に、或は大に失し、或は小に過ぐるものあり、今其極端なるものを示せば左の如し。

種別	目標	調査繭數	平均繭長	對二百回平均繭數	對繭一粒平均節數
白玉		一二〇	四、二四	二、七七五	〇、四六
又昔		七四	四八、一〇	二、八二四	〇、七四
青熟		一三	四九七、三	二、六三五	〇、五四
白龍		二〇	四七、一五	二、七八七	〇、五四

大日本蠶絲會場玉蟲會場評品會場一部の光景

て過少なるものは母蛾の不良なるか、若くは採種法の拙劣なるに基くものなるべし、又蠶紙の如きも厚薄並に體裁に區々異なるものあり、即ち其紙質に精粗あり、厚薄に大差あり、産卵月日の記入を缺けるあり、名稱及製造者氏名の不鮮明なるものあり、或は蛾區内記入の番號數字大に失するあり、印肉に藍色を用ゐたるあり、斯の如き事項は強て一定するの必要なきが如しと雖、取扱上並に蠶種檢査上不便なるものにして、且つ商品として體裁の一様なるを可とすべければ宜しく改良一定するを要す、右の外死卵を除去し、或は巧に切張を爲し、繼印を捺せざるが如き簡手段を試みしものあるを認めたり、斯の如きは遂に同等の効果を奏することなく、却て信用を害するに過ぎざれば各自戒飭すべきなり。

生絲は色澤概して佳良なりしも、往々白色ならんことを勉め、繰湯変換を頻繁ならしめ、又は甚しく若煮に失したるものあり、或は原繭又は水質の影響を被り、黴味を帶びたるものあり、其束裝は最も區々にして齊一を缺き善良なるもの甚少なし、即ち綛量著しく不同にして一重揚のものあり、二重揚のものあり、又は重ね揚けのものあり、一綛の重量にありても、多きは二十三匁に達し、少なきは十五匁に滿たす殊に繋留力絲の如き繰返工程の難易に最も關係を有する事項にして便利を旨とし、齊一に整理せざるべからざるに、其方法の區々にして宜しきを得ざるもの大部分を占め力絲太きに過ぎ、絹絲又は着色絲を用ひたるものありたり、絡交及枠角にありても良好なるもの少なく、絲條の交叉齊一を缺き枠角の固着概して却て少なきに過ぎ、繰返に困難を覺へたり、絲質は一般に佳良なりしが、煮繭及繰絲の方法不良なるため抱合手繝を害ひ又は綛の取扱不良なりしが爲め縮絲となりしものの少なからず、纖度は稍均齊なるが如しと雖、尚其差大なるものあり、出品中目的纖度を明記せるものは、僅々數點に過ぎず斯の如きは商品として不備なりと謂はざるべからず、檢査を行ひたるものゝ内纖度の最も太きは二十二「デニール」、最も細きは九「デニール」にして、十三乃至十六「デニール」のもの最も多數なり、類節は輪節は概して少なかりしが、附ケ類、「モギ」類を多く認めたり、強力伸度の檢査の成績佳良なり繰返は生絲の整理不完全なるため、絡交紊亂して綛絲を索め難く、加ふるに切斷多かりし、之を要する絲質は概ね善良なりしと雖、之れが整理の方法宜しきを得ず、爲めに其品質を毀損せること大なり、此を以て將來原料を撰擇し繰絲の方法に注意し實質の改善を圖ると共に揚返束裝並に絡交等に就き一層改良齊整するの急務たるを認む。

桑苗は審査點數五百五點にして内代出し百九十二點曲木百二十點、接木、百點、實生九十三點あり、種類名稱を異にせるものは五十四種に達せりと雖、就中魯桑最も多くして百二十點あり、十文字多胡早生市平至桑等相次て多きを占め其他は僅少なりし、尚之を早中晩に區別すれば調査點數四百三十四點中早生百四十三點中生百七十八點、晩生百十一點なり、而して其品質は概して佳良なれども未だ缺點の指摘すべきもの尠なからず、例せば桑樹種類の特性に反する採苗法によるものあり、即ち發根惡しき種類を以て曲木と爲すが如き或は葉形の小にして且薄き種類を以て實生に供するが如き是なり斯の如きは徒に費す所多くして得る所尠なきものなれば採る可きの方法にあらざるべし、又病蟲害殊に介殻蟲の寄生多かりしは最も遺憾とするところなり、之か豫防驅除は他の病害に比し寧ろ行ひ易きにも拘らず、未だ實行の効果を收め得ざるは誠に憂慮に堪へざるなり、今審査點數接木、五十三點代出し八十四點曲木四十五點實生三十八點に對する病蟲害の割合を百分比例にて示せば左の如し。

種別＼目標	接木	代出し	曲木	實生
介殻蟲	一五、一	一五、五	四〇、〇	二、六
天牛	三、八	三、六	六、七	〇
萎縮病	一、九	一、二	〇	〇

桑苗の幹の細太は固より種類によりて著しき差ありと雖、之に依て施肥の多少及土質の適否等の一端を察知し得べければ、出品物中最太最細と認むるものに就き調査したるに左の如し、但し實生苗を除く測定の部位は根際より五寸上方なりとす。

區數＼目標	種名	幹の直徑
最太	魯桑	一寸七五
最細	赤木	〇、三〇

尚肥培の不充分なるもの、或は夏秋蠶期に收穫の目的を以て摘葉せるものゝ如きは、何れも苗木の品質を劣惡ならしむることと勿論なれば當業者たる者宜しく留意改良せざる可らざるなり。

余は終りに臨み今回の審査員たる蠶業講習所技手霜新八郎君同加藤小市君同鮫島茂君、埼玉縣農事試驗場技手水野辰五郎君、埼玉縣農會技手小林總一郎君並に埼玉縣技手藤崎卓爾君の熱心に盡力せられたることを附記し、茲に感謝の意を表す。

新發見の野生絹絲に就て

學藝委員 東北帝科大學助教授 農學士 須田金之助

本稿は去月中に寄稿せられたるものなれども〆切後なりしを以て本號に掲載することゝ爲したり。

紐育總領事の報告に由れば、獨逸人が亞弗利加東部地方に於て、野生絹絲を發見せりと云ふ、該絹絲は今回始めて發見せるものにあらず、既に拙著野生絹絲蟲論にも記載する所あり。

同地方に存する野生絹絲蟲は「ボムビックス、ラダーマ」Bondya rudama, Coequerel「ボムビックス、ディエゴ」B. diego, Cogn.「ボロセラ、カジヤニ」Borocera Cajani Guer-men 等にして、「コックレル」博士の研究せられたるものなり、而して今回發見せられたる野生絹絲は「ボムビックス、ラダーマ」蟲の結繭なりとす、今本種の特徴を示せば左の如し、

雄蛾の大さは長さ十八乃至二十「ミリメートル」翅の開張

五十八乃至「六十ミリメートル」にして、雌蛾は二十六乃至二十八「ミリメートル」なり、體軀黄褐色を呈し鱗粉は黄色なり、其翅は黄色にして體軀の表面には黄褐色の背線を有す、第一環節には二三の黑色の隆起あり、次の環節に至る後の環節に於て黑色の隆起より小なれども同色の二個乃至三個の隆起を有し、而して各粗毛を生ず、其食料は豆科植物にして「インドシアー、マダガスカレンシス」Indigamudiscoronata等を食す、幼蟲は群居的性質を有し常に列をなして、生活す、其營造する所の繭は其同じく三「デシメートル」より、長きは一「メートル」に達する長大なる一の共同囊狀繭を造り、其内に入りて各個々に自繭を造り化蛹するものなり、内部に包圍せらるる繭は共同囊狀繭より、一層白色にして其絹絲も亦繊細なりと云ふ。

其他「ポロセラ、カジヤニー」蟲の如きは淡灰色の繭を結び、其色合美麗にして土人は之より絹絲を製造すと云ふ、「ラムバ、ランデイー」と稱する美麗なる織物を製造すと云ふ、傳委綿は拙著「野生絹絲蟲論」に就て見られたし。

叩門

女子蠶業教育と女子農學校

學士會員
農科大學教授農學博士　澤村眞氏談

編者一日澤村博士を文部省に訪ひ談偶〻女子蠶業教育に及びたるが之に關する博士の意見は左の如し

女子と養蠶傳習

蠶絲の業は男子よりも女子に適當の仕事であるから、之が改良を圖るには女子に蠶業教育を施さねばならぬ、之は今更改めて謂ふ迄もないことであるが、併し從來我邦の蠶業教育なるものは、男子のみに重きを置いて、女子は殆んど指て問はずと云ふ狀であつたのです、尤も西ケ原の蠶業講習所でも兩三年來製絲部を置いて女子に製絲の傳習を遂つて居るけれども、マダ養蠶傳習の事は問かれてない、是は平素遺憾に思つて居る事柄の一つてありますが、將來蠶を飼ひ絲を繰ると云ふことは女子の手一つて立派に出來るやうに教育致したいものです。

女子使用の道

元來女子の思想は綿密に注意も周到であるから、自宅て蠶を飼ひ絲を繰る計りでなく、雅蠶共同飼育の主任や母蛾の檢査などを遣らせても至極良からうと思はれますから、蠶信省が女子を採用した如くに蠶業上に於ても女子を使用するの道を開かれたいのです。

自然學の趣味と養蠶

女子蠶業教育の一端は女學校に蠶業科の加設ですか、高等女學校か師範學校ならば寄宿舍もありますから、別に蠶室の設備も入らぬで少し飼はする位の事は容易であるが、此等の學校では教育の目的が目的であるから先づ自然學の趣味を持たすると云ふ目的で百頭か二百頭飼はする位の事ですが、是て某女學校の教師から生徒に自然學の趣味を持たしるに何か良いものがあるまいかと云ふ質問を受けたことがあつたから其時早速養蜂か養蠶が一番良かろうと應へて置きました、當時其學校でも養蜂の事は少し遣らせて置つたさうですが養蠶の事は其後其教師に居なくなり、旁〻マダ遣らせぬやうてあります、併し實際に於て蠶を飼ひ育てしむれば幼蟲から繭となり更に蛾となる所謂見蟲の變態が能く判つて其上各自身に觸ふ絹物も斯う云ふ處から出來るものであると云ふ關係が判るから、實際的の教育としては養蠶ほど面白いものはなかろうと思ひます。

大分縣耶馬溪繭飛の桑（其一）

田舍と女子農學校

乍併現在の女學校生徒に蠶を部山に飼育せしめて職業的飼育の方法を教ゆるなど〻云ふことは到底出來ないことであるが、其代り田舍に女子農學校を設立してソコテ教ゆることにしたならば宜しからうと思ふ、其故に都會には女子の職業學校が有つて種々の技藝を授けて居るけれども、田舍には〻マダ此種の學校が乏しいのです、イヤー乏しいどころか農藝に關する學校に至て全く無いのであるから、園藝、養蠶、家事、裁縫等を教ゆる女子農學校の設立は今日の急務であるのです。

女子農學校設立の機運ですか、夫れは先づ第一に東京府立の機運ですが、此は二ヶ月位の期日で講習會を開いて女子に園藝と養蠶の學理を教ひて居りますが、其成績はナカ〻良いさうです、宮城縣でも今はソロ〻〻何いて來て居るやうです、福島縣でも養蠶の事は一日も早く設立の運に向つて居るやうです。

中止して居るやうだが、以前此種の講習會を開いたことがある、今後は各府縣とも是等の點に注意するやうになり、追て女子農學校の設立を見るやうになるでありませう。

養蠶實習期中の取締

話は轉じますが、茲に一つ大に注意すべき問題があります夫れは農蠶學校等に於て養蠶實習期に於ける生徒の取締を如何にして宜しきかと云ふ問題である、此問題に就ては何處の學校でも腦漿を絞つて居るので、種々の質問を受くるのであります、折角學期中に養成した良習慣を實習期に於て破壞せられて仕舞のは寔に厄介の事柄で、之には何か良い方法もありさうなものだと考へて居りますが、兎に角蠶絲會あたりて懸賞を遣つて廣く人の意見を集られてはドーであるかと考へて居ります、

北海道と蠶絲業

學藝委員 農商務省蠶絲課長 農學士 加賀山辰四郎氏談

北海道蠶絲業の有望なるは江湖諸賢の既に知らるゝ處なるが北海道蠶絲會大會に臨席すべく彼地へ出張せられたる加賀山蠶絲課長には編者に對し左の視察談を試みられたり頗る裨益あるを以て左に之か收錄することゝなしぬ

全道の地積六千餘方里

北海道蠶絲會の大會が札幌に開かれたのでチヨツと彼地へ行つて來た、今回が初めてゞあるから少し緩くりして觀察をして、來たいと思つたけれども、最早雪が降つて來て觀察に都合の悪いのと他にも差支が有つたので見たいと思ふ處もツイ見ずに歸つて來たのである、故に或は皮想の觀察かも知らぬが、兎に角吾々は北海道の蠶絲業を大に有望であると認めたのである、先づ第一に面積の上から見ても全道の地積約六千餘方里と云ふのであるから、非常に廣いものである、吾々が此處で想像して居たよりも餘程開けて居たが、併し全道の人口僅に百二十萬人を算するに過ぎずして廣漠たる原野は空しく狸狐の棲處となつて居る有様であるから上武甲信地方の經驗ある蠶絲業家などは、往て此新天地に入り荊棘を芟除して蠶絲業の經營を遣てはどうであるかと思ふのである。

天與の蠶業地帝國の大寶庫

併し斯う云ふても北海道の氣候が果して蠶絲業に適するや否やの疑問を起すであらうが、養蠶期中の雨量は至つて尠く能く乾燥するさうである、ソーして温度の如きも春蠶及夏蠶の飼育に適するといふのであるから飼育の容易であると云ふことは何人も直に首肯し得らるゝのであらう又野桑が豐富で現在飼育に供する桑葉の九割餘は野桑であつて晩霜などの患は少ない蛆害の如きも絶無も同様であるから、養蠶に好適地たるは勿論の事蠶種製造には屈强の地である、而かも蠶病及桑樹の病蟲害は少く蠶卵は强壯であると云つて居るから吾々は斯ふ思ふのだ、北海道は之れ天與の蠶業地にして又帝國の大寶庫であると、乍併此天與の蠶業地此帝國の大寶庫は未

だ充分に開かれずして遺利の多大なるものあるは寔に遺憾に堪へないのである。

教育機關補助規程

と云つて北海道廳は蠶絲業の奬勵を等閑に附して置くかと云へば敢てソーではない、今の河島長官は就任日猶淺しであるから、蠶絲業に對して如何なる方針を取らるゝか判らぬが前の園田長官の如きは隨分奬勵せられたものである、今の河島長官も必ず前長官の方針を取らるゝか、或は一層進んだ方針を取らるゝであらう、兎に角現在教育機關としては蠶業專門の農事講習所があつて、ソコで種々の試驗を行ひ傳習生を養成し、又桑苗を作りて無代配布をやつて居り、又簡易養蠶傳習所を設けて飼育法を傳習し、奬勵の方法としては種々の補助規程が設けられ、蠶絲業の團體には補助金を交付し、斯業の發達を促して居らるゝから、之を他の府縣に比するも奬勵と云ふ點に於ては敢て遜色はないと思ふのだ。

蠶絲業の發達せざし原因

併し之丈けの奬勵が有ても其効果如何を顧みれば前述の如く割合に發達して居らない、最も明治の初年開拓使設置以來の經過を見れば無論長足の進歩を爲したるに相違なきも、之を全國蠶絲業の總産額の上から見、且つ府縣の割合から比較すると、マダ其發達は遲緩たるを免れない、即ち全道の養蠶戸數は僅に一萬戸に過ぎずして、其蠶種の掃立枚數一萬二千枚其收繭高七千石、生絲の產額二千貫に過ぎないのである、收繭高の七千石は全國中數府縣しかないのであるから、北海道の大を以てして如此きは決して充分の發達とは云はれぬのである、果して然らば蠶絲業の好適地たるにも拘らず、何故に其發達が充分でないか、其原因はいろ〱あるであらうが、運輸交通機關の不備なること、新開地の常として金利の高きこと、勞銀の不廉なること、蠶絲業に經驗を有する者の尠きこと等は其主なる原因にして、移住の當初は兎角結合力乏しく何事も共同してやる事が六ヶ敷いといふ事も、蠶業發達の遲れたる有力なる原因であらう、併し運輸交通機關の如き鋭意之が完成に努めて居るから追々發達するに相違ない、既に鐵道の如き箱館から重なる蠶業地を貫通して釧路に全通し又岩見澤から室蘭に、旭川から名寄に分岐し其他に枝線もあつて、線路の長さ七百哩の長きに達し、而して各線は着々其延長工事を急ぎつゝあるとの事だから、今年の内に運輸交通の便は著しく進歩し、蠶絲業上に受くる便利も多大となり、又金利の如きも漸次府縣と平準を保つことになるであらう、現に安全有望の事業に對し、拓殖銀行等の貸付利率は決して高くないとの事である、勞銀亦然りで年々人口の増殖するもの五萬と稱し、府縣より移住する者も多いから、次第に勞力を得るに於て困難を感せぬ樣になり、隨て賃銀も幾分低廉となるであらう、ソーなると第一勞力を得るに於て從來困難を感じつゝあつた製絲業の如き大に經營し易いことになる……只今北海道に於ける製絲場の數……夫れは札幌に二つ瀧川に一つ都合三工場あるに過ぎずして、其他足踏及座繰製絲に多少遣る者もあるけれども、洵に幼稚なものである。

北海道の栽桑業

兎に角北海道に於ける蠶絲業は寔に有望である、併し此有望なる蠶絲業を如何にして開發するかは大に講究すべき問題であるが、第一に桑園を拵へると云ふことが急務であらう、北海道の養蠶家は殆んど野桑のみで飼育して居る有樣で其野桑は豐富であるから十分之を利用すべきは勿論であるが、其野桑が段々無くなるのである、故に北海道では昨日の養蠶地は今日の養蠶地でなく、今日の養蠶地はまた明日の養蠶地でないと云ふ有樣で、今では一に野桑に依りて北海道の養蠶業は其生命を維持して居るのであるから、野桑の無くなるときは、即ち北海道の蠶業が滅亡する時であると、其前途に對して非常に憂慮して居る者が尠くない、成程野桑は段々減ずる斗りで札幌の製種家などは五六里も隔つた所から、野桑を取り寄せて飼育するやうな有樣で、一貫目の桑代が十錢にも相當すると云ふてゴボして居た、去れば道廳が桑苗の無代配布を行ひ、或は試驗場や農事講習所で桑樹栽培の試驗を爲さしめ、切に桑園增殖の奬勵を遣つて居るのは寔に時宜に適した處置であると云はねばならぬ、而して桑樹種類試驗は一層重きを置いて遣て居らるゝやうだが、折角桑園を拵へさしても片端から枯れて仕舞ふやうでは當業者の損害は云ふ迄もなく、却て斯業の發達を害するやうの事になるから、之を豫防するには如何なる種類が適し、如何なる種類が適せぬかと云ふことを豫じめ當業者に示して置かねばならぬことであるから、吾々は此種類を最も良いとゝ思ふたのである、聞けば北海道では當地で良種として賞贊せらるゝものが、ドーも良く發育せないと云ふことである、最も札幌附近は山中高助や赤木などを根刈にして比較的其發育が宜しく岩見澤旭川邊では鼠返し大葉などが良いと云ふことであつたが、併し是迄の試驗に依ると野桑中の良種類を撰擇して栽培した方が工合が良いやうであるから將來は其方針で遣る積りであると云ふことであつた、併し夏蠶用としてならば春季發芽前刈り取るので……先端が枯れても差支がないから、內地產の良種を栽培する方が發育が良いとの事である。

又仕立方に就ては根刈の方が良いといつて居る人もあるが其根刈も冬季に於て梢條が雪の上に出て居ては矢張枯れるから、岩見澤の三木氏などは雪の中に伏せ置くやうに結束するが良いと唱へ、之を三木式などゝ云つて一部分の當業者に行はせて居るけれども

大分縣耶馬溪五龍の瀧（其二）

又之に反して根刈よりも喬木仕立の方が宜しいとの說もあり、仕立法に就ては目下研究中といつてもよかろう、併し土地に依り根刈の出來る處と喬木仕立の方がよい處とあるやうである。

北海道の蠶種業

次に吾々の最も希望に堪へぬは當地の方から經驗のある者が彼地へ渡つて蠶種製造を遣つたらドーかと云ふことである前にも云ふた如く、北海道の蠶絲業中最も有望なのは蠶種製造業である、只今北海道には蠶種製造家が約二百戸其製造高は春蠶種が二萬二三千枚夏蠶種が二萬枚都合四萬二三千枚である、其內彼地で飼育するものが約一萬枚で其他は悉く府縣の方へ輸出して居る、而して近來は春蠶よりも夏蠶の方が劇增し將來益々此傾向があらうと思はれるが、玆に最も攻究を要すべきは短時期に送り屆けねばならぬ生種の輸送を如何にして安全にするかと云ふとである、聞けば將來汽車汽船中の輸送方法の不完全であるが爲に蠶種を傷める場合が多いさうであるから、輸送を完全にするの方法を研究するのが急務であると共に、一面には風穴種を製造すると云ふとが必要である、尤も道廳の當局者及當業者も此點に注意し風穴の調査をなし既に一個所見出したと云ふとである、若しも風穴の設備が完全に出來て之を利用するやうになれば、北海道の蠶種業は今一層の發達を爲すであらう、而して尙ほ吾々の望む處は春蠶に限らず、夏蠶に限らず蠶種の名稱は餘り多くせぬとにしたい、尤も現在に於て種類の主なるものは春蠶種にありては、小石丸靑熟又昔の三種、夏蠶種に在りては白龍飛白國一以形等の數種であるが、兎角イツコの當業者も名稱を多くするの傾きがあるから、宜しく之等の點にも注意せられたいのである、夫れから製絲家は現在でも少々宛府縣の繭を買つて居るとの事であるが、生繭の儘ではせないと云ふことにしてほしい、彼地には蠁蛆が居ないと何人も云つて居るけれども、併し當地のものよりも稍小さいものが居ると云ふことである、兎に角注意して蠁蛆の輸入をせぬ樣にして貰ひたい、又桑苗に就ても病虫害のなき健全のものを輸入する事が肝要である。

大分縣耶馬溪古羅漢の景（其三）

北海道蠶絲業の發達策

次に北海道蠶絲業の發達を圖るの策はイロ〳〵あるであらうが、各種の經濟組合を組織するのが第一策である、尤も北海道の人は自ら共同心がなくて困ると云つて居る、一應

左もありそうに思ふけれども、又一面から考へて見れば、隣りから隣りを覗ず知らずの他人のみて親類知己の更に居ない處へ譯み込んで行くのだから、心細く感ずる處から頼る心が一層切てなければならぬ、それが事業に對して共同心の乏しいと云ふのは、畢竟御互の素性が能く知られぬからである、併し互に顔を合はするとが度重なされば、其内には互に心の内も解け合つて、共同する心も起きて來るのであるから充分保護奬勵して組合を組織せしむる事が必要であらう、蠶種の共同購入とか、雑蠶の共同飼育とかと云ふやうな處から、小同事業を始めたら經濟上の利益は云ふまもなく、隣保救助の精神を涵養する上にも非常の効力があらはれ、特に北海道に向ける蠶業組合は、無限責任でなければならぬ事になつて居るから、一旦組織した上は結合力は强からうと思ふ、ソーして北海道に產業組合を作る場合には信用組合を兼ねるが最も良策であらうと思ふ、新開地は更角奢侈に傾き易い、貯蓄機關の欠乏の點から見ても、又金融の不十分の點から見ても、信用組合を作る事は必要である。

飼移住は團體移住が最も望ましき事である、團體にて移住すれば知り合同志であるから、組合の如き共同事業は行はれ易きは云ふまもない。

北海道に於ける柞蠶業

最後に希望するのは北海道に柞蠶飼育を試みては如何と云ふことである、渡島、十勝の方には隨分廣漠たる原野が有て柳や楡が深山繁茂して居るそうだ、ソコで柞蠶を飼育したならば、隨分面白からう、居る人民が柞蠶飼育を試みた者も有るさうだが、蛾の爲めに害されて中途で止めたと云ふことである、併し蛾の除防法は何とか良い方法もありさうなものだ、敢て有志者の計畫を望むのである。

東北と絹織物業

松岡喜相は東北實業大會に於て調査數萬言の大演說を試みられたるが其演說中に所ろ云ふことを云はれた、全は神奈川縣蚕糸川供に於て說きたることあり、曰く傳國黑蚕は養蠶地にあらず製絲地にも非ず、而り其織物は世界に冠たり、黑蚕の繁殖に一ヶ絹織物及種々の加工品の致す所也と、今東北六縣の如き米穀作物類は西南地方に劣ること遠せず、故に若し進て西南地方に劣じて發達せず、故に若し進て染織工業を進んなりしむるは東北の繁榮を企圖するに最も必要なる事業と謂ふ可し、養し特來絹織物の需用益々多きを加へ供給を我に仰ぐ愈々急なるべきは故て起る事れず、歐米は結び密印度一方面に並て云ふも、我北國の精好を敵し、品質を精良にして輸出を試むるあらば、販路の前路頗る有望なるものあらん云々。

割烹（春の料理）

大日本衛生學會長
大日本禮節學會長
石井泰次郎

口取

竹輪かまぼこ
松雪玉子
あちやら松竹

◎竹輪かまぼこの拵方

かしわ（魚にてもよし）を、ろしてよくたゝき、摺鉢に入れてよくつき、摺木二本にて雨方より、たかひちがひにつき（くる〳〵とするべからず）其中へ、味淋酒の煮切、鹽、等を加へて、御よくするべからず、板の上にあげて、庖刀にて押して煉り、平たくならし、横五寸に竪三寸、厚さ四五分位にのばす）右左の匿端を一分くらゐのうすさにし置き、篠竹五六寸長さの節のなきもの一を右の手にて持て、左の手にて持て、右の手にさしみ庖丁刀を持て庖丁刀にて肉を竹につけながら左へ左へとまくらし、太く肉をつけるなり。

次に其修竹へつけたる肉を、炭火にかざして、焼き、篠竹の穴へ又串をさして長くし、其所を持てまわしながら焼くべし（鐵橋の上へ、幾つも並べてのせ、一方焼けしならば、めぐらして又一方を焼き、かわる〳〵めぐらして焼くべし）。

こげめつくほど焼きておろし、照を刷毛にてぬるべし。

照とは、醤油と味淋を同量に合せて、とろ火にて煮つめたるものなり。

てりをぬりたらば、篠竹をぬき取り、三ツ位に切り置くべし、即ち一寸位の長さに切るなり。

◎松雪玉子のこしらへかた

鶏卵をゆでて、水に取り、殼をむき去り、黄味と白味とを別々になし、白味を一箇につき一匁五分づゝの割の砂糖及び三分づゝの割の鹽とを加へて、馬尾篩にてうらごしになし、（黄味は用ひず）二つに分ち、一方へ挽茶を加へて青く染め一方は白のまゝになし置き、さて抑枠の底へ美濃紙を敷き、其中へ挽茶にて染めたる方のたまごを入れ、其上に白き方を入れ、よくおして、蒸籠に入れ、十分蒸ばかり蒸して取り出し、わくを除き、紙を去りて、程よく切り分なすなり。

◎あちやら松茸のこしらへかた

松茸の、鑵詰になしてあるものを、鑵より取り出し、笠のふちより庖丁刀を入れて皮を取り、根のかたき所をも去りて一分位のあつさにたてに切り、それを又一分角くらゐの繊に切て、湯煮し、水氣をさり、砂糖と味淋とを煮かへし、酸を

も茎かへして合せたるに入れ、唐からしを輪切りにし、たねをぬきたるを共に入れて、漬け置く事一昼夜ほどしほとにて用ふべし。盛り方は、玉子を向ふに、かまぼこと松茸を手前の左右に盛るべし。

椀盛　松笠ほうほう　伊勢海老　小まつたけ柚子

◎松笠ほうほう

ほうほうを洗ひて、うろこをふき、頭を去り腸を出し、三枚におろし、片身を三切位（大凡角取位）に切り、皮の方を左より右へかけて斜に後へ（二分位つゝ間をおいて、切目を入れ、同じ右より左へ斜に切目を入れ（松笠に見ゆるやうに）薄塩をふり、蒸籠に入れ、むして用ふ。

伊勢海老は、湯でゝ、皮を去り、筒切にして用ゆ。

松茸はかんづめなるを取出し、さつとゆでゝ細出しをなし、小口切になす。

椀の汁は、かつをだし四合に対し、味淋一勺（二撮、醤油一勺八撮、塩一匁位の割合にて多くも少なくも作るべし。

但し醤油は、品によりかはりさしあまきもあれば、始めに分量よく少なく入れ、あげん金試みて、あまき時はあとより足し入るべし。

さて椀にほうほう、海老、松茸等を入れ置き、上より汁をつぎ入れ、柚子も入れ、蓋をして出すべし。

——————

桑樹害蟲驅除法（承前）

農學士　明石弘
農業講習所技師

（ロ）食蟲昆蟲類の保護

昆蟲類に食害性のものと同族を飼育するものも亦少くない、此等食害性昆蟲で害蟲類を食害して間接吾人に益を與ふるものは瓢蟲、歩行蟲、蜻蛉、蜘蛛、螳蟷、ヨロウカイボン、アリモドキ、孤蟲、鬼虻、肉食蜂、蟻、草蜻蛉、蜻蛉、蟷螂、蟬蛾、椿象等の類が主なるものである、此等の食蟲昆蟲は他の昆蟲から恐怖せられて敢て之れを襲ふものがないから、其性質能く家樓で人が之れに近くも逃げも隠れもせんのである、從て農民の目にも鬩れ易く且其形態の寧ろ猛である爲めに害蟲と誤認せらるるものが多い様へば、蟬蛾は、蟬に似て、鮮に徐歩する歩行蟲が農民の鍬の一撃に赤られ、蜻蛉が蟻に混じて之れを食として居る弧蟲の幼蟲が蚜蟲の殺と稱せられて

摘殺せらるゝが如きは往々目に觸るゝ事實である、但し食蟲昆蟲の中にも有用動物を食害して吾人に損害を與ふるものあり、又害蟲類を食とするものも、或時期に於て、有用動物を食として吾人に害を與ふるものがある、例へば夏期蔭蟬類は翅を張して蚊多の小昆虫を食とし、弄人に益を與ふるものがあるが、此等は幼期に生じて魚類の餌となり、即ち水蠆の時代には往々養魚池に損害を與ふることがある、斯かる種類に就ては其利害得失を比較考究した上驅除若しくは保護の適法を講ぜねばならぬ。

（ハ）寄生蟲の保護

彼の昆蟲學者「スミス」氏は昆蟲の幼蟲で寄生蟲の爲めに其生を奪はるゝものは數に於て七割五分に及ぶと云ふ、是れを以て如何に寄生蟲か害蟲の間接驅除に貢献しつゝあるを覗ふことが出來る、寄生昆蟲の主なるものは膜翅類、双翅類、鞘翅に屬する蜂及蛾である、此等は卵、幼蟲、蛹、成虫の何れかに寄生して寄生の體内に侵入した後は其組織を食として成長し充分に發育を遂げたならば寄主の

長野県小諸市伊那郡小野小田切村田島穴の金堂

りな室蔵貯は根屋の葺藁砂面金でしに口入は形根屋るゆ見に方下左

體を脱出して化蛹羽化するものと寄主の體内で化蛹し羽化して脱出するものとがある、又其寄主の卵の時代にするもの幼蟲の時代に寄生するもの蛹の時代に寄生するもの等に鄭しく桑樹害蟲に寄生するものにても數十種を超て居る、斯の如き寄生蟲は充分に之を保護し其繁殖を計らねばならぬのである。

即ち害蟲を捕殺する際誤死せるものを認めたる時は、濫に之れを焼棄若くは桑被に投ずることなく、之れを其儘放置し若し寄生蟲の爲め死し、滅せし場合には其寄生蟲を共に殺滅することを避け、逸散に任ずべきである、又毛虫類の多数の白色小粒を認むることがあるが、之れは寄生蜂の繭であるから、之れ等は保護して蜂の脱出を計らねばならぬ。

（ニ）鳥獣昆蟲以外の食蟲動物の保護

夏期蟬類は捕殺する蜘蛛類の如き「ケラ」に數多の小蟲を捕下する土鼠、其他石龍子等は害蟲を食とするものであるから、此等は其形態の醜くく故を以て滅することなく、十分に保護しなければならぬ。

（ホ）寄生菌の保護

　近來菌類に關する學術の著しく進步した結果として醫術上酒造上其他各方面に亘つて種々其利用法が講究せられて居る我蠶業界に於ても蠶病の原因をなす、即ち蠶の病原菌に就ての研究は益々進步して軟化病菌硬化病菌等の性質を明かにする事が出來從つて其豫防法も行はるゝ樣になつた、蠶に寄生菌のあると同樣に害蟲類にも亦往々菌類の寄生の爲めに斃死するものがある、螟蟲松蛄蟖等の寄生菌の如きは漸く其應用の途普及せんとして居る、叉桑樹の害蟲の內でも寄生菌の爲めに斃さるゝものも決して少くはない、「カサハラハムシ」の白殭殭菌の爲に斃されて居るものは屢々目撃する所である、此等寄生菌の繁殖を計るのは害蟲撲滅策として効果ある方法であつて西洋諸國でも隨分行はるゝそうであるが、此等の寄生菌の內には赤晃蟲の一である所の蠶兒にも寄生するものがある、例を擧げて云へば前に述べた「カサハラハムシ」の白殭菌の如き叉浮塵子松蛄蟖の寄生菌の如きも蠶兒に寄生して之れを斃すものである、故に此等の寄生菌を保護して其繁殖を計り叉は此菌を培養して桑園に撒布し之れを以て害蟲の撲殺を企つるが如きは蠶兒に對して甚だ危險であるから、從つて此寄生菌を利用して桑樹害蟲を驅除すると云ふ事は今の所では望みがないと云ふてよろしい、併し此後蠶兒を犯す事なく桑樹害蟲にのみ寄生する菌類の發見せられたならば、叉有望の驅除法とならぬとも限らぬ。

　以上數項に亘つて桑樹害蟲の驅除に關する大體の記載即ち總論を終つたから次號から各論に移つて直接桑樹害蟲類に就いて其驅除法を講究して見やう　（未完）

秋蠶の話（承前）

學務委員
蠶業講習所技師　土屋泰

　以上述べたる處を以て、夏秋蠶飼育に適當する土地の形勢と蠶室の構造とは、略ぼ了知せられたる事と信じます、畢竟飼育術の要訣も、右の理由を根帶として、保護の上に過失遺算のない樣にするの外はないのです、以下項を逐ふて述ぶることと致します。

掃立に關する注意

●蟻蠶の發生　蠶卵の全部が同日に於て孵化するを最上とするは勿論なれ共、催靑中の氣候が不順であると、白種でも黒種でも、二日に跨りて孵化することは珍しからぬ、斯樣の場合に於ては二日に跨りて孵化したものも別に心配するには及ばぬが、中には病的原因例せば微粒子病毒の寄生が多い爲に蠶の發生が不一齊になるものがある、斯の如きものは到底望みはない、故に蟻蠶の發生が二日に跨る場合は、早速其原因が溫濕度の不適當なりし爲か、將た病的原因に由るかを確かにするを要する、而して病的原因に由ると認めたならば、直に之を放棄して更に善良なる蠶種を採用すべきである。

●蟻蠶の體色　春季に於ける蟻蠶の體色は、概ね灰黒色で、

夏秋季に於ける蟻蠶の體色は少しく茶褐色を帶ぶるのを常とする、是は主として催靑中の溫度の高低に由りて來る差である、夏秋季でも七拾度前後の溫度で催靑して發生せしむれば、灰黒色を呈する、叉春季に於ても平均八拾度位の高溫で催靑して發生せしむれば、茶褐色を帶るのである、但し品種の性質で、催靑溫度に係らず特に紅褐色を呈するものもある、彼の靑熟種中に點々現はれる、紅褐色の蟻蠶の如きは其適例である。

●掃立の時刻　室內平均の溫度が七拾七八度であれば、蟻蠶は午前四時頃より發生し、同六時頃迄には當日の發生を了るものである、故に午前八時頃にもなれば、蟻蠶は頻りに食を求めて運動をする、斯の如き場合は午前九時乃至十時頃迄の間に掃立て桑を與ふるが得策であります、高溫の際永く其儘で置たならば、只飢餓の爲に蟻蠶を疲勞せしむるのみで、他に何等の効力もない、勿論七十四五度位の氣溫ならば、午後一時迄置ても差支へない若し七十度前後ならば、所謂二夜包みを行ふても大なる障害は認めないのであります。

給桑に關する注意

●桑葉の硬軟　夏秋蠶は發育が急速であるから、食桑の適否が發育の上に及ぼす影響は實に甚しいのである、例せば一二齡中に於て二三回も粗硬に過ぎる桑を與へたならば、發育は著しく不齊になります、此際蠶兒の素性が虛弱であると爲に病氣を惹起して遂に恢復すべからざる慘狀を呈するに至ります、故に摘桑の際は充分注意して、蠶齡に和當したる葉質のもののみを選みて摘み採ることが肝要である、殊に春季と異なりて、稚蠶に適する軟葉は一本の梢に就て僅々一二葉の外得られぬからして、少量の葉を摘むにも、割合に廣い桑園を驅け回らねばならぬのです。

　今大體に就て各齡の蠶兒に相當と認むる桑葉を指摘せんに一齡中に在ては、伸長の盛なる梢頭の第三葉目位のもの一葉づゝを摘採するが宜しい、梢頭から葉數の數へ方を述ぶれば最上部の生長點に在て、未だ葉柄を伸出せざるものは取り除けて、明かに葉柄を見得るものを第一葉として是より下部へ二三葉と數へるのである、故に第一葉は倘ほ開葉した斗りて其葉の大さは恰も二錢銅位で、色は黄色で光りを帶たものである、第二葉は第一葉に比すれば、稍開展して大きくなつては居るけれ共、葉の色は倘ほ黄色で幾分の光りを有して居る以上第一第二の二葉を摘採してはならぬ、何となれば桑葉經濟上損失の多い斗りでなく、蠶の食餌として不適當であるのです、即ち未だ養分が完全に具はらぬのです、柔軟なる嫩葉は滋養分が多いかの樣に思はるゝが、柔軟にも自ら程度がある、茲に述べた第一第二の葉の如き程度では、水分のみ多量で蠶の滋養分として貴重なる蛋白質は倘ほ少量であります、第三葉は葉形が略ぼ尋常に出來て、葉面に縮皺もなく、叉葉の色は黄色が薄らぎて稍綠色を帶びて居る、然れ共之を充分發育を遂げた第五六葉に比すれば、倘ほ綠色が淡いのである、後者を濃綠色と云ふならば、前者は淡綠色である、此葉が一齡蠶に適當である、故に一齡蠶に適する葉は一本の梢より僅かに一葉づゝを採り得るに過ぎない。

第二齢蠶に適する桑は、前述の順序にて云へば第四葉目の一葉であるが第三葉があるならば第三第四の二葉を摘採すれば宜しい、第五葉は少しく粗硬に過ぐる嫌があるから、ひ成るべく摘み尽くさない、第三齢に至りては第四葉以下第七葉目位迄を摘採し、第四齢に至りては、第五葉以下五六枚の葉を摘み、又第二流の梢條に就き、葉肉の薄き全部の葉を摘採して繭の能率化せぬものを選び、繭の品質に至れば、給食の際一二回の給桑には四齢の用桑位のものを與へ、爾後は綠色でさへあれば、何れの部分より摘採するも、硬きに過ぐる虞はない、但し除々枝際に在る葉のみを與ふれば、養分の少い結果、繭の品質が劣悪になることは免れぬ。

蠶の齢と桑葉の生長程度との釣合は、上述べたる如くである、然るに若し蠶に對し粗硬に過ぐる葉を與えれば、忽ち發育が不常となりて繭品も悪劣になる甚しければ蠶病を誘起し或は死亡する柔軟なる葉のみを與ふれば、蠶の品質も良くないのである。俗に「ヤワ蠶」或は「ヤワ繭」などゝ稱する、緊縮不良なる繭を結ぶものが多くなる、之に反して蠶齢が常なる柔軟なる葉を與ふれば、蠶の成長は、病蠶を生ずる虞は少なく、繭の品質も良く、繭の乾燥も容易なるが、此問題も、多くの場合に於て、一回に與ふれば、空氣の乾燥も良いとされど、又湿氣の多いときは枯凋はせぬ、桑葉が蠶の排泄物の爲めに汚されたる葉を食するから、種々の弊害を被むるのである、現に微粒子病の蔓延などは著しく多いのである、故に非常に情の許す限り、一回の給桑量を蠶と同量位に止め、給桑回數を増加するが宜しい、私共は氣温が時候相當に暑いとされば、秋蠶には一齢中十二回、三齢は中十回、四齢は九回、五齢は八回位に與へます、少しく高温の日には一回位増給するのであります。

當業者諸君の普通に行ふ處を見るに、一日中最終の給桑は概ね午後十一時乃至十二時頃に行ふて、翌朝は四時より五時の間に給桑するを常とするが如くである、故に北海道の如き冷涼地方が、翌朝の給桑は長いのである、然るに往々蠶に非常に疲れた時などは、豫定の時間よりも早く切上げて、蠶は晝間九十度以上にも昇る様な割合には暑さの爲に大に疲勞する事もなく、繭の過熟の速かなる傾向を合することが出來ぬから、元氣を恢復し感に食桑するものである、然るに夜間は飼育者も疲れて眠らねばならぬから、其都合が宜しくない、然れ共蠶をして充分に發育を遂げさせ、發育等の

桑畑の清潔用肥料の撒布

る、故に此種の蠶は製絲用としても賞すべきではないが、特に原種用としては大に忌むべき蠶である、是を以て蠶體に緊縮して成育を遂げしめんには、常に桑の葉質と云ふ地方は、別種の桑を選んで栽培すべきである。

一旦蠶用としては善桑なれば適當であると思ふ、然し此等の種類が其土地に適せず他種に比して繁茂が悪しく、收穫が少い

一般には云へぬが、雅蠶用としては小收穫蠶用としては善桑なれば適當であると思ふ、然し此等の種類が其土地に適せず他種に比して繁茂が悪しく、收穫が少い

と云ふ地方は、別種の桑を選んで栽培すべきである。

給桑回數及び桑量、夏秋蠶は稍過の速かなる丈、一日中に於ける給桑回數も、春蠶は比べ多くすべきは當然である、而して此場合に於て、一回に與ふる桑量を増

して、齢合に回數を減ずるが良いか、將た回數を加して一回の桑量を春蠶と同量位に止むるが良いか、蠶の生長と桑葉と人夫の經濟上より見て、何れを利益とするか、此問題も時と場合とに依りて常に一樣ではなかろうが、多くの場合に於て一回に多量に與ふれば、空氣の乾燥も良いとされど、又湿氣の多いときは枯凋はせぬ、桑葉が蠶の排泄物の爲めに汚されたる葉を食するから、種々の弊害を被むるのである、現に微粒子病の蔓延などは著しく多いのである、故に非常に情の許す限り、一回の給桑量を蠶と同量位に止め、給桑回數を増加するが宜しい、私共は氣温が時候相當に暑いとされば、秋蠶には一齢中十二回、三齢は中十回、四齢は九回、五齢は八回位に與へます、少しく高温の日には一回位増給するのであります。

當業者諸君の普通に行ふ處を見るに、一日中最終の給桑は概ね午後十一時乃至十二時頃に行ふて、翌朝は四時より五時の間に給桑するを常とするが如くである、故に北海道の如き冷涼地方が、翌朝の給桑は長いのである、然るに往々蠶に非常に疲れた時などは、豫定の時間よりも早く切上げて、蠶は晝間九十度以上にも昇る様な割合には暑さの爲に大に疲勞する事もなく、繭の過熟の速かなる傾向を合することが出來ぬから、元氣を恢復し感に食桑するものである、然るに夜間は飼育者も疲れて眠らねばならぬから、其都合が宜しくない、然れ共蠶をして充分に發育を遂げさせ、發育等の

蔭を得んとするには、夜間の食桑に不足なき樣に保護しなければならぬ、是は飼育者の緊要なる務である、是が終の給桑を多量にすれば見る樣に考へらるゝが、是が抑も誤りである、何となれば雅蠶期に在ては、給桑後三時間も經過すれば枯干して用を爲さぬ、假令枯干せずとも一旦踏み付けた桑は再び食ひ難いものである、故に翌朝給桑前に見ると、蠶は澤山の桑を踏み付けながら、全身が透明となりて飢えて居なす、五齢期に於て多量に與へると、空氣の疎通を害することが甚しい、殊に給桑後は蠶を寢て、周圍の雨戸を閉鎖して寢かすから、一層通氣を妨げて、蠶に急性の病などを惹起せしめて、翌朝迄生存することが往々ある、斯樣な次第であるから、晝間九十度内外に昇る場合は、午前三時頃に一回與へることとして、午後十一時頃の給桑も、普通の

（未完）

——————————

ケアンダイク

汝の過失と欠点を思はず汝の敵刃と友なる思へ

蠶業界の偉人 **八田達也君**（承前）

鞋痕天下に洽し

坐して兵を談じ袖手策を畫らすは五風十雨に狎れたる太平者流の囈語のみ、滿身之れ熱血、常に一身を拋つて甲州蠶界の住績を購はんと誓ひたる君にして何ぞ又此の轍を踏むの愚を擧ぶべき、殊に彼の御代覽の栄譽を忝うしてより、丹心以つて其の道を貫かんと銘せるをや。宜なるかな、君が遠く山河を踏破して、華を東境に崇り、翠を西邊に適ること前後二十有餘年、遂に七寸の草鞋をして痕を天下に洽からしめしことや、冀くは讀者諸君少しく君が活動の一斑を叙せしめよ。

明治十四年以降、蠶絲の業を研めんとして群馬、長野、福島の各縣に歴遊すること前後數回、常に採長補短の效を故國に移して其の發展に資せしもの頗る多々、甲州の蠶業幾何もなくして隔世の觀を呈せしむるに至れり、かくて二十三年彼の蠶種檢査法の帝國議會に提出せられんとするや、此の事忽ち全國蠶種家間の一大問題となり、斷行、非斷行の聲漸く喧しく、兩派各々選兵を放つて衝口萬丈の氣焔を甲村乙地に傳ふれば、衆意萬口皆歸するところを知らずして喧囂大獄の壞るるが如く二派の團體互に三面六臂の秘術を竭くして盛に鎬を削れり。時に君推されて斷行派の委員長たり、乃ち本部にありて專ら指揮の衝に當り、奇計を幕中に出して敵を擾ますこと數次、時に霜の如き曉風を噉んで自から神出鬼沒或は東に走り西に馳せて大に敵を破れることあり、更に又明治二十五年には曾揖の星野長太郎氏等と倶に全國蠶絲奬會設立運動の爲め四國、九州、山陰、山陽の各地を遊說し、明治二十九年四月には奈良縣の聘に應じて大和全國を巡り且春寮樂の故影を賞しつゝ得意の講話を試み、大に同國蠶絲業の鼓舞に力めたり、かくて賞を收めて歸るや又愛知縣より聘せられて九月三河全國の要所に講話を試みぬ、越えて三十二年又山口縣より聘せられて防長二州を巡回し、大に秋蠶飼育の獎勵に力めて遂に今日の盛況を致さしめ、三十八年には滋賀縣より迎へられて同縣下の各郡を巡回し、嘗てさゝなみやと歌ひて大宮人の閑過なすなきを嘲笑せし滋賀の地をして、蠶業の改良斷行の實を擧げしめたり、其の他全國農事大會、蠶絲業大會、大日本農會等の會合には凡そ時と場所とを論ぜずして參列せざるなく、從つて之等會合席にありて君は最も重要視せられ、常に各實業團體を補益するところ頗る多かりき、彼の所謂實業視察の如きは君が常套の一些事に過ぎずといふも不可なき迄、常に東奔西馳遂に君が向上的勢力は至る處に扶殖せらるゝに至りぬ。吁、本邦蠶絲業の發展は君が努力に待つもの多かりしといふも可ならずや。

肝膽を碎いて秋蠶の奬勵を論ず

人は知る、我國の秋蠶が明治二十年の頃に至る迄は、只徒らに桑園を興廢に歸せしむるのみにして收利極めて尠かりしより、千百の批難白晝の雷とばかり湊じかりしを。是れ蓋し秋蠶の飼育は當時猶ほ研究の時代に屬せしに由るものにして彼の不完全なる二化性生種を採りたるが如きも、亦其一因たるを失はず。此の時に當り甲州に於いては早くより既に發見せられて之れが利用の方法を究め他縣に先じて之れが恩澤を忝うし、稍養蠶の安固を期し得るに至れり。然れども一の發見、一の利用は其の由つて來たる所以なくんばあるべからず、甲州に於ける風穴の發見利用又實に君に待つところ頗る多きものあり、君の道に說くや必ず之れを諦び筆を紙に執るや必ず先づ之れを云爲し、行住坐臥常に其の利を說いて止まず、異說は之れを駁し、批難は之れを顧みず專心秋蠶の奬勵に意を致せり、秋蠶飼育の聲一度斯界の閑夢を破りて今日に至れるもの玆に在りて存するを知らば、又誰れか本邦蠶界の恩人として君を頌せざらんや。

而かも君之れを以つて未だ足れりとせず、現に八達館を經營して風穴蠶種の改良と貯藏法の改良とに日夜腐心して止まずといふに至りては、君の精力や真に驚くべく、本邦の當業者をして愈々奮勵叱咤せしむるの好痛棒にあらずや。

甲州流の養蠶法

君が一代を蠶界の犧牲に供して東奔西走、遠近の蠶業地を往返して修め得たる養蠶法、之れ決して短日月の間に形式的一片に修めたる者とは自ら其の流を異にす、世に所謂甲州流の養蠶法が他に一頭地を拔けるもののある決して故なきに非るなり、君の技を奥越に漁りて歸へるや先づ家人を勵まして自ら之れを實際に行ひ、多年の宿望たりし養蠶法は更にもいはず、蠶室、蠶具及其の他大凡そ養蠶に關するもの、總べてを改善し遂に今日稱用せらるゝ甲州一流の養蠶法を創設したるなり。

彼の自ら資を投じて或は養蠶傳習所を設立し、或は巡回教師を派して其の法を傳ふるなど、蠶業の爲めに力を竭くす殆ど至らざるなく、今日甲州の蠶業が赫々たる名盛を博せるもの、又其の大半を君に負はずんばあらざるなり。

八達館の盛況

小豎、傒婦も猶よく其の名を知れる甲州の八達館は之れ君の創設するところにして又現に經營するところなり、而かも其の稱呼が君の姓と名との二字によりて造らるゝに至りては又君が此の館に幾何の注意を傾注し、其の責任の歸着するところを明ならしめんが爲めに幾何の注意を拂へるかを知るに足る。八達館が其の創設以來斯界の信用を博して今日の地位を得たる亦決して偶然にあらざるなり。而して君明治十八年に此の八達館の名を用ひてより後ち明治三十三年其の組織を

變更するに及びて彌々天賦の熱誠を之に注ぎぬ、即ち或は自ら飼育場を回ぐりて養蠶製種の上に遺憾なからんことを期し、或は時に傳習所を設けて子弟の敎養に力るなど、殆ど寢食を廢しての心勞いふも猶足らざるものあり、從って一般公衆の之れによつて均霑したる利益は頗る大にして、其餘惠の潤るところ且暮東西を選ばざりき、然れども之れ實に只公衆が利益を享受したるのみ、八達館夫れ自身は之によりて一物も獲ざりしなり、否時に或は窮して不測の悲境に陷らんとせしことさへ屢々ありしなり、あゝ八達館が其利益を犧牲として公益を進め、窮極時に蹉跌あるも忍耐遂に其の爲すところを失はざりしは誠に敬服すべき美擧ならずや。

見よ君が燒くが如き誠意は百難來れば利刄之れを落鐵に放ち、千障至れば抵身之れに當つて破り、以て遂に第五回內國勸業博覽會に於て、名譽銀牌受領の光榮を擔ふに至れるを三十八年社運漸く隆盛に趣きて擴張するの止むを得ざるに至るや、乃ち之れを株式組織に改めて富士風穴をも併せたり、現在の製種高製絲用種二萬餘枚原種三十萬蛾、數に於いては必ずしも誇るべからずと雖も、其需用區域北海道を除ける全國に亘れるに至りては眞に驚くに足るべく其の精良の評一世に浩蕩たるは、又以て君が力の偉大なるを證して餘りありといふべし、而して其の風穴の構造設備の全然模範的にして間然せざるなきは夙に世人の知悉せるところにして又茲に贅するの要なしと雖も、一度一染の靈峰を脚下に踏みて實地に之れを觀ば天下千萬の紙、往古無數の文字も猶其の壯觀を敍するに餘りに貧なるを嘆ぜんと、蓋し吾輩一家の管見にはあらざらんか。

君の性行

氏や頗る磊落にして不羈、小事眼中にあるなく、細縷行住を動かすことなく、爲めに往々にして驕慢見を以つて目せらるゝこと屢々なりと雖も、而かも意の熱誠と、氣の淡白とは直ちに誤解を談笑の間に言きて執を後に遺すことなし。君の天眞爛漫が世の好情を買ひ、君の懸河の辯が一世を擧げて啞然たらしむるは又君が性情の一班を豹知するに足るべし。親しく君と面晤して細心事務に鞅掌し、精勵人力以外に奔騁するを視、談を壯者と構へて戒飭一鞭拂搶の中に頂門の一針を與ふるを知らばいよ／＼以つて君が人と爲り溫健長者の風あるを見るべし。君又常に左右に謂つて曰く「巨萬の富積んで山をなすも世を益せずして何の功かあらん」と、言短なりと雖も君が意氣を見るべく、抱負や敬すべし　君が甲州蠶界の父と呼ばれ、本邦蠶絲界の偉人を以つて許さるゝもの與に一に此の一短言に胚胎すといふべきなり。君又蠶事輯說、養蠶茶話、製絲道しるべ、蠶絲要說、新撰農蠶書、秋蠶と風穴等の著あり、何れも理を以つて實を說き論ずること少くして行ふに易からしめんとせるは又君が斯界の著述家として吾人の甚に敬意を拂はんとする所以なり、希くは本邦蠶界の偉人八田君達也、年愈々壯うして衰草枯落するの候、幸に松柏の榮を全うせられんことを。（完）

高山社と其社長

石田孫太郎

一　高山社の過去現在

明治四十年十一月十七日を以て、牧野文相、蠶絲會々頭松平男爵、本多蠶業講習所長等の臨場によりて甲種蠶業學校の開校式を擧げ、農商務大臣代理久米次官によりて、其社繭、蠶種桑苗等の共進會褒賞授與式を擧げた處の養蠶改良高山社は、人も知る如く故高山長五郎重禮氏の創建に係り、現代社長町田菊次郎氏の計營せらるゝ處で、養蠶上の團體としては最大のものである、開校竝びに褒賞授與式の當日、社長町田氏が朗讀したる答辭にもある如く、社は明治三年の創立で、生徒僅に一名組員は二三戸に過ぎなかつたが、星霜十三年を經て明治十六年には組員百九十八戸授賞戸數二十三戸生徒七名となつた、翌十七年に養蠶改良高山社と改稱して、社を上州藤岡町にトして以來、漸く社礎定まらんとする時、不幸長五郎氏は遠逝せられ、遺囑によりて町田菊次郎氏其後を襲ひ、高山武十郞及び高橋茂太郎の兩氏は其副長となつた、爾後の社運は旭日の東天に昇るにも似て居る、四十年度の統計を見れば、社員の總數は三萬九千八百餘人、入りて業を經へたる者三千餘人、入場就學の生徒は本別科合して一千四百餘名、授業員として諸國諸州に派遣したるもの七百四十餘人、之れ則ち高山社の過去及び現在の狀況である。

二　高山社員とは何ぞ

高山社は養蠶の改良を目的とせる一團體で、殖利を業とする株式又は合資會社ではない、故に其社員と稱する者は其社組織の總計又は分子に非ずして其社の蠶兒飼育法を遵守する者を意味するのである、再說すれば高山社員とは入りて業を受け若くは授業員を聘して傳授を受けた者が、其社に加盟したものの謂である、左れば其社員には上は社長より下は一婦人に至る迄、悉く高山社が遵奉する處の淸溫育法を理解して居るので、世の所謂會員や社員と稱する者と、全く撰を異にして居ることは言ふ迄もない。

三　岩の如き其社の基礎

蠶兒飼育術を以て唯一の財源として居る高山社の基礎が、強固であるか果た薄弱であるかを定めるには、其授業員の派遣地や生徒の原籍地を見るのも一方法である、今四十年度一覽表を採りて、詳細に調査すれば、彼の七百四十人の授業員が派遣されたる地方は、岩手縣が最も多くして貳百三十五ヶ所、次で其所在地たる群馬縣が百六十四ヶ所である、宮城縣の九十三ヶ所を第三位とし、山形縣の四十七ヶ所は第四位に居る、其他は數ふるに遑がない、又入學生徒の一千四百人中には六百〇四人に達して居るのである、即ち派遣授業員の約三分の一は社の所在地に聘せられ、生徒の約二分の一は社の周圍より集まる次第である、閒說豫言者も其處に於ては貴ばれ

ずと、然るに高山社の現況は之を否定して、其處に於て貴ばれつゝあるを證して居る、成効は過分に誇り、人の失敗を倍にも喜ぶ養蠶業に、斯る狀況を見るのは、畢竟するに社內幹部の人々が養蠶上の諸技術に熟達して、此年豐作を示すが故に外ならぬ、廣告や何かで噓八百を並べ立てゝ知らぬ他人を騙り集めたのならば、千人が萬人あつても驚くとはない、彼等は甲種蠶業學校に或數の生徒を募集するの外、廣告と云ふものはせぬのである、則ち高山社は廣告の上に立つ者ではない、養蠶術の改良を以て唯一の生命として居る高山社が、其里間より六百有餘の生徒を容れ、二百に垂んとする授業員を聘せらるゝ此の事實は一に、拔群の養蠶術を有する證據で、又其の社礎の岩の如くに強固なるを語るものであると思ふ。

去十一月十七日上州藤岡町に於て擧行せられたる高山社蠶業學校開校式設第二回品評會褒賞授與式場の光景

四　授業員派遣法の奇觀

授業員とは舊傳習所又は學校の卒業生中、授業員志望の者を各地に派遣するもの、謂ひであるが、其給料は先づ春蠶一期七八十圓より百五六十圓位なもの、中には二百圓三百圓と云ふのもあれど、是等は實に僅少なものである、而して其給料は固より、招聘者に於て支拂ふもので、高山社は唯其申込によりて、其人を派出するのみである、此授業員派遣に就ては、實に趣味ある方法を採るので、初めより彼は何十圓是は何百圓と給料が定まつて居るのではない、甲なる者が百五十圓で招聘されて、結果面白からぬことあれば、次年は半額にも墜す、乙なる者が五十圓にて行つて大なる豐作を得て皈へれば、

次年は百圓に陞す、實に彼等授業員に取りては、不名譽と給料減額との貳つを負はされることであるから、其勉勵は一方てない、八百の授業員輩は吾れこそはと競爭するので、宛然たる豐作競爭の姿を爲すのである、思ふに斯の如きは授業員を活かす所以て、延いて高山社が今日の如く活躍する、大なる原因を爲すのであらう。

五　創立者の大遺訓

高山社の今日あるは、其組織に於て、其幹部の人選に於て、又其清溫育に於て、何れも優秀なるに由るは無論であるが、茲に創立者高山長五郎氏の大遺訓が、社の內外を照らして居るのを忘れてはならぬ、社を藤岡に移して之れからと云ふ處て逝去された長五郎氏は、臨終の際に重なる社員を集めて後事を托し、且曰く『入るに從つて出すを計れ、一厘の餘金をも社に置く可からず、苟くも餘金あれば禍其中に生ずべし年々一金をも剩さずして皆社業の爲に費せ』と、營利會社ならざる高山社に餘金のある可き筈はなけれども、位置の奪ひ合ひの如き其爲に起り、遂に社を破壞せしむるに至らんとの注意は、實に千古龜鑑として服膺すべき名言である、金に目を注がずして人物に目を着けられた、高山長五郎氏は偉人と言はねばならぬ、渡邊博士抔も町村治蹟の根本は金でなくして人である、金は却て禍ひを爲すと言ふて居られるさうだが、實に至言と思ふのである。

六　清溫育とは何ぞ

由來養蠶に三種の育法がある、一は天然育と稱し、二は溫暖育と稱するもの、三は折衷育と稱するもので、高山社が奉ずる處のものは所謂折衷育の一派で、殊に眠と食とに大なる注意を拂ふ者である（町田氏著高山社養蠶法摘著者養蠶農作法）眠や食や共に蠶業上の緊要なる點てあつて、皆豐凶の岐るゝ處てある、濕を去り濕を加へ、乾を取り乾を去り、溫を增し溫を減じ、氣を通じ氣を閉づるの術は合せて悉く蠶の眠食に關係する、即ち此術を名けて清溫育と云ふのである、同社の報告によれば、又昔蟻量五匁を飼育するに、桑量二百三十五貫を要し、生繭十六貫九百七十匁を得たとある、又最近の報告には、蟻量五匁に對して、生繭十八貫三百十匁、石高とすれば、一石七斗八斛五合てある、之ならば大豐作てある、即ち清溫育は此法を指すのである。

七　余を誹る學理は虛妄也

現社長町田菊次郎氏は無學なれども文盲ではない、誤りは直に訂正するが朝令暮改の人ではない、自信の厚きこと岩の如く、量度大なること海の如しと云ふたら、慥かに其半面を言ひ現はしたものてあらう、氏曰く『余は蠶を飼ふて必ず己が目的に一致せしむ、世間若し學理を云々して、余の清溫育法を誹る者あらば、其唱ふる處の學理は學理に非ずして誤謬の空論也』と、余の知る處に見るも養蠶家に有勝な壯語ではない、町田氏は凶作知らずの養蠶家である、其邊の清涼育者流

の如くに、多量の蠟量を揮い、豫定の綱を收めるのではない實に蠟量相當の綱を收るのである、町田氏は富者ではないので、綱を造ら又蠟に桑を與へて捨ることは出來ないのである。

八　町田氏の献身的性格

高山社の今日あるは、高山長五郎氏の遺訓にもより、清温育の卓越せるにもより町田氏が進歩的人物なるにもより、又度量洋の如くなるにも由る、左ながら町田氏の献身的性格に由ることを忘れてはならぬ、氏は少しも其地位を私用せず、例令ば蠟種を製造し販賣するにも、自ら其數を限定して地位を以て貴るを爲さず、製造數に比して三四倍の申込あるにも拘はらず、惡く之を謝絶して社員の種を紹介して居る、此一事以て氏の性格を示すに十分である、而して町田氏は天又清温育は斯の如きを忘み蠟ム一滴の養蠟法である。

其の社長として、副社長監査役評議員の人選をして、心より悅服せしめて居るが、斯の如く無私心を同ふして働くのも、一に氏の性格の献身的なるに由るのであらう、蓋し之れ高山社が隆々として今日を致せる大原因の一である。

九　町田氏配下の快人物

高山社には副社長以外に逸す可からざる、二人の怪人物が居る、一は三俣愛策と云ひ二は三木徳太郎と云へる男である、此二人の者は社に於て重役を務て居るが、三木氏の演言は以て彈正官と秘書官とを兼ねる者である、殊に三俣氏には女策がある者である。

社員皆白すれに定るのである、町田氏が内外共に敬せらるゝ者、三俣氏の功決して惜なくないと思ふ、聞く事に三俣氏なる者、町田氏の爭臣となれば國亡ぶとかや、幸に三俣氏なる者、町田氏の爭臣となる稀世役となりて、千歳の一失を補翼せよ、敢て至囑する次第である。

一〇　高山社と其社長

以上陳ぶる處によりて、高山社と其社長とは略ぼ明かになつたと思ふが、尚問に接して富士の文部大臣祝辭と社長答辭とを錄して、過去を顧み將來を慮るの鏡として置くであらう。

（編者曰く文部大臣の祝辭と社長の答辭とは別項蠶業雜觀に掲載せるを以て之を省けり讀者宜しく參照せらるべし）

桑樹枝皮製紙原料應用

在里昭田間鎮長より外務省への報告に依れば桑樹の枝皮は製紙業原料に適應するものなりとの說は新案に精通せる伊太利人工ヒャガ氏の發明なるもの、此に依りて從來唱道せられる所にて氏の說に依れば伊國に於ては從來桑樹の枝は燃料として官基の價伊貨（一リール）半に過ぎざるも一噸製紙業原料として應用せられんには官基一〇万至二〇万リールの價格を得るに堪るも知るべしからず固より此應用のため蠶の蠶兒飼料たる本分を害すること如きことなきは勿論其枝皮は其葉ノ共に農家に勸おちる所得なふるの利あり又其枝皮は別力を爲せずして敷の剪殺し得べきものなれば此蠶少女兒蠶に任すこと為得る加あり云々とあるから以て非常蠶者參考のため茲に之を掲出すること、なせり云々

韓國の養蠶（承前）

勸業模範場技手　長岡哲三

十六　結論

上來記述せる如く韓國に於ける養蠶業は現況は未だ原始時代を脫せざるが如く、進歩せる日本人の眼よりしたるときは一として眼るべく則るべきなし、是れ數百年の久しき間弊政の結果人民の財囊貧なるものは必ず蠶を加へられ蠶を殺れんと欲せば亦貧に甘ずるの已むを得ざる可憐の狀況にありしを以て殖産興業を顧みるの暇なく遂に安を是れ事としたる國由したるものなるべし、而して現今の農業は組織にありては養蠶の勝れたる國は彼等家計の消長に影響すること大ならず、加ふるに養蠶業は年によりて豊凶常なく一種の投機的業務なりと認識し居るが故に改良發達の今慮に之しく其會々日本式に倣ふて改良の方策を施せるものなきにあらざれども、是等も亦其に改良の價値を知らざる一時的好奇心の發作に過ぎざるが故に其名くは始めて終なきものゝ如し。

然るに韓國の蠶兒飼料は桑葉を以て蠶の肥大せざる處なく、蠶室蠶具の不完全は假令蠶種要素中大なる缺陷なりとするも少からざる未精地と死せる勢力と巧みに活用し、之が改良發達を計るときは現今に倍せる蠶を產するに至ること蓋し疑きにあらざるべし、是を以て翔も農業經濟の圓滿を計らんとせば必ずや桑蠶の業を奬ひを必要と信ずるなり。

然らば蠶業は如何にして改良發達せしむべきか、思ふに政治上の改良は根本的問題にして依然として秘政行はれ詠求を廢せずんば百年河清を待つに如かるべきも、今や此の根本問題は漸く解決の機運に達し人民の生命財產を確實に安全を保證するに至るべし、子孫養育を用ひずして可なり、則ち穀桑、育蠶、製絲、萬般の改良を金して斯の確實にして有利なるを知らしめ以て一般の農家の桑蠶の奬勵を奬むるの實際に鑑み而して韓國農民の生活の現狀に徴し、農業親營の模範たるものにあるときは桑蠶のこと之を本業とする事は策の得たるものにあらざると勿論にして、未だ微かに日式に模倣せしむることを許さざるの多し、何となれば日本家屋の如き蠶室を建設し改良蠶具を新調することは現今の狀態にあり難しなれば、即ち現在の蠶室蠶具を用ひ、自家の勞力を以てなし得る程度に改良をなさしむるを肝要なりとす、左に改良を要すべき主なる事項を擧ぐれば左の如し。

一、適其なる桑葉を養ふ蠶兒を飼育して可成各農家に之を栽植せしめ同時に肥培法

を示し良好なる桑葉の潤澤に供給する途を講ずること。

二、蠶室の構造に一部改良を加へ蠶具も各地方に應じ能ふべき範圍內に於て改良すること。

三、適良なる蠶種を頒布して蠶種類の改良をなすこと。

四、殺蛹乾繭、製絲の改良をなすこと。

五、生產品を處分するに適當なる途を講ずること。

更に詳說を試むれば(一)、氣候の乾燥宜しき韓國にありては桑葉は比較的葉肉の厚き種類を可とすべく、而して寒に耐ふる力の强きものならざるべからず、予は鼠返、市平、多胡早生、魯桑、赤木、山中高助等適當なるべく農民生活の現狀に徵するに魯桑實生苗は時宜に適せるものなるべしと思ふ何となれば接木取木等の價高き苗木は容易に求め得べからざるを以てなり、而して秋冷を催すこと早急に冬季の寒威は頗る嚴烈なる韓國にありては施肥に最も注意を要するものなるべし、又高刈若くは喬木仕立(秋田仕立の如き方法にて)を適當なりと思考す(二)、在來溫突式の室は其上側に氣拔を設け蠶架を立つるを宜しとす、室極めて狹少天井と床との高さ低きが故に四、五段の蠶架を設けて少しく厚飼するより外仕方なかるべし、蠶具は莚又は杞柳等其地方に產するときは種々のものを作り得べし(三)、韓國の蠶は前章既に記述せるが如く極めて劣等の種類にして繭一升の絲量五六匁に過ぎず、日本種靑熟小石丸又昔等を普及するを要す、彼等は日本種は飼育容易ならずと思惟し居るも、本年飼養せしめたるに何れも豐作し繭質の優良なるを見て爾後養蠶するには必ず日本種にあらざれば不利なりとの念を起したるものあり、凡てのもの皆一度び日本種を飼養せば同樣の感を起すべし、又夏秋蠶を必ず飼育せしむべし、韓國には雨季ありと稱するも日本の梅雨の如く霖雨陰鬱なることなく、從て濕氣少く夏秋蠶の時期に於て摘桑の晴れ間なく桑葉の缺乏を來す如きことは殆んど之なきもの、如し、即ち一反步の魯桑實生を密植して番枝を整理するも尚能く溫突一室の養蠶を行ふに十分なり、只秋蠶は完全なる風穴の發見せられざる限り蠶種の供給に困難なり、日本より仰ぐには風穴秋蠶が二化性牛種に比し安全なり、何となれば京城以北の地にては往々生種は途中悉く發生することあるが故なり、(四)一回一斗乃至二斗位を入れて殺蛹し得る厚紙張りの單簡なる殺蛹器を十戸に對し一個位の割合に製作せしめば可ならん、本年の如きは春蠶收繭後只殺蛹せしのみの繭を蠶座に露出して蠶架に挿入し置きたりしも、常に能く乾燥して繭質を損傷する等のこと全くなかりし、製絲は先づ座繰器械を用ひしめ產額の少き今日にありては二三戸に付き、一臺座繰器械あれば足り、繭の產額を增すに從て漸次各戸に用意せしむ(五)生產ありて消費ありて分配起るは理の常然なることなれども、韓國の現狀は自然に放任せずして、或程度まで干涉を加ふるを要すべく思料す、即ち各戸に於て生產せる生絲は、之を一村一ケ所位に集めて共同揚返しをなし、愼造して確實に販賣する機關を設け、官憲は誠實に善意の干涉を與ふる如くせば可ならん。

如上の方法を普及するには其方策多々あるべしと雖も、各地に技術者を置きて巡回指導し、一方には模範的に桑蠶製絲の業を營み善く韓人をして觀覽せしめ、改良の念を喚起し模倣せしむる方法を採るは最も急務なりと信ず。(完)

對清蠶業案(承前)

在上海東亞同文書院 渡邊繁三

內地は勞銀物價及地價共に廉なるのみならず、坐繰工場に在りては、原動力機を備ふる必要なければ、之を上海に同規模の機械工場を設立するに比すれば其資を要する遙に少かるべし、恐らくは五萬五千兩に上らざらん、又機械工場に在りては一釜につき每日約八十匁の生絲を製出するものなれば、三百釜につき二十四貫の生絲を得べく、一年三百日間作業するものとせば、每年七千二百貫を得べし、乾繭四百五十斤より生絲一百斤を得れば、生絲七千二百貫の原料たるべき乾繭は二千零二十五擔にして、乾繭一百斤は生繭三百斤より成れば繭行は其原料として六千零七十五擔の生繭を買收せざるべからず、坐繰工場にては一釜につき每日四十匁の生絲を製出するものなれば、三百釜にて每年四千零廿貫の生絲を得べく、生絲一百斤は五百斤の乾繭より成れば四千零廿貫の原料たるべき乾繭は、一千二百六十五擔半なれば、繭行は其原料として三千七百九十六擔半の生繭を買收せざるべからず、本邦の乾繭の輸入額每年一百萬斤に達す、其四分の一を支那より輸入せんと欲せば、繭行は乾繭二千五百擔即ち生繭七千五百擔を買收せざるべからず、通じて繭行の買收すべき生繭は一萬七千三百四十二擔にして、五千七百九十一擔の乾繭を得ざるべからず、繭行に備ふる烘灶は每房一日十擔の乾繭を得べく買收期間半個月に一百五十擔を得べし、從て四十房の烘灶を設くれば能く此目的を達せん、然れども或は破損するものあり、或は一時に鉅額を乾燥せざる可らざる場合あり、或は農家の依賴により乾燥せざるべからざるものあり、優に房室を備へざれば不可なり、八十房を備ふるは可ならんか、一房の大さ間口七尺奥行二間之を築造するの費約六十五兩八十房を備ふる三百坪の地と五千二百兩の築造費を要すべし、生乾繭貯藏買入事務所及買入出張所等を設立するの費鉅額に達すべきも坐繰工場を準用すれば二萬兩に達せずし設立するを得べし、從て繭行、坐繰工場及養蠶製種工場を設立するの費十萬兩に上らざるべきか。

挿圖「セッペリー」農學校蠶業部の蠶種孵化器

繭の買入高一萬七千三百四十擔に達し一擔の市價四五十弗なれば買入期間に七十萬弗乃至八十萬弗の大金を支拂はざる

べからず、養蠶製絲機械工場に於て銀細の貸銀を支拂はざるべからざれば、其流動資本は之を他の工業に比し多かるべきは自ら明なり、恐らくは固定資本の二分の一即ち十萬兩以上を要するならん、從て以上の諸設計を完備せしめには三十萬兩の諸機械工場を觀るに精良なる幾多の機械を備ひ內地に安大なる鋼行を有し敢安價はず、年々金業者を代ふるもの少からず、若し之を買收せんには新に工場と鋼行を設立する比し遙に利なるべし、彼等は普物價と勞働の優なるとき設立するものにして、之を設立當初の實價に勝ふも二三割低かるべし況んや銅立後數年を經過し維持に窮廢する今日に於て買收するあや、又鋼の買收及貸銀其他の支拂に現金を用ふれば流動資本を要すること多かるべきも東京地內に於ては精良なる貸ときは甚だ少ふして足るべし、支那內地に於ては貸銀は換勞を發行し繼工場にして、竹又行を坐して取引顧客を誘引し困難なるを以て銀行は莫大の利を收むるを例とす、若し鋼は美且堅なる紙に小は一文より大は一千文に至るまで取引に利なる金額を印し、之を貸銀鋼の買入れ其他の支拂ひに用ゆれば鋼行及工場の信用厚くして此民之を信とし大に行はるゝに至るべし、是に至らば鋼行及工場は益々富資本を節約するの利あるのみならず、手形の發行により少からざる利を收むべし、長沙府に和興公司と名くる鋼行製造所あり、流動資本常に缺乏を免げしが一策を按じ貸銀は凡て竹票（竹籤形に金額命ぜるもの其他の如きもの）を以て支拂ひ引換を要するものには直ちに現金を支給せしに始めは唯職工間のみに通ぜしか、後には長沙府に流通し、今や竹票發行の利益は猶寸製造の不利を償ひ餘りあるに至れり、故に手形の發行宜しきを得巧みに機械工場と鋼行と諸設備を完成を買收すれば、僅に二十萬兩を除ゆるのみにして諸設備を完成す

以上の資本を投じ以上の方法に據り幾何の利益を得べきや否やに關し、精細に算出すること甚だ困難なるも大略を打算することは亦頗る困難なりと謂ふべからず、請ふ試みに之を示さん。

（未完）

（一）○抑豐伝文　（二）亟和豐弐文

廣東省の養蠶狀況

廣東駐在上野領事より去月二十六日發外務省への電報に依れば廣東省中主要なる養蠶地たる順德佛山及其附近各地共水年は轉有の豊作にして人氣好く絲七糸作養蠶と奈良新宮なりと云ふ

桑樹の肥料に就ての質問

兵庫縣 農學士 西村彌一

桑樹の肥料として人糞尿に木灰を混合して施用しても宜ろしいでせうか、私は學校で木灰と下肥の混用は不可であると聞いて居ました、處が池田榮太郎氏の桑樹栽培全書には木灰と下肥を混用するとあります、化學變化は如何でありますか、農學博士澤村眞氏の解答を願ひたし。

答

學士 農學博士 澤村眞

普通の下肥即ち腐熟したる者に普通の木灰即ち「アルカリ」性の強きものを混ずれば「アンモニヤ」の揮發を促し肥料の價値を減ずるは能く人の知事實であるは御承知の通りです。

陸軍の馬糞に就ての質問

岐阜縣 農學士 井川茂兵衛

桑樹の肥料としては馬糞の如き漸效肥料を良しとするとの說なるが、陸軍の馬糞（尿の混ぜざるもの）百貫目中何程の主要元素を含み、且つ一反歩に幾何使用するを適當とするか。

答

學士 農學士 川島勝次郎

全く尿を混ぜざる馬糞百貫目中に含まるゝ主要成分は窒素四百五十匁燐酸三百二十匁加里三百五十匁である、其使用の割合は土地の肥瘦仕方の何に由て定めないが、併し普通の土地に於て根刈仕立の場合には收穫量百貫目毎に約百五十貫の割合にて計算し、二年に一回位に分ち施與すれば宜しい

桑樹肥料成分に就ての質問

福島縣 農學士 田邊武男

普通根刈桑園一反歩に對する施肥に就て窒素燐酸加里の標準割合を左に區別し御教示ありたし。

養蠶專用に供する桑樹。

夏秋蠶兼用に供する桑樹。

答

學藝委員 農學士 川島勝次郎

桑樹の成分は春夏秋の時期に於て異なるのみならず、種類栽培の適否等に由て一樣である、一般に春蠶期に於ては夏秋蠶期に於けるよりも養分に富むを常とすれども標準としては之を示し難い但根刈桑の平均成分は左の如くである。

窒素	〇、六四%
燐酸	〇、一〇%
加里	〇、四一%

桑樹栽培に就ての質問

東京府 通常會員 小川運太郎

(一)桑葉を最も多量に得んとするには、一反當何本を植付くべきや。

(二)最多の桑葉を得んとせば中等の畑地にして栽培の宜しきを得て、反當幾何の肥料を要するや。

(三)同上より得る桑葉の數量何なるや(但葉幹共)

(四)桑の實生苗を以て蒲成桑園を仕立つる方法但反當何本を植付幾何の肥料を要するや。

(五)極實なる桑實生苗百二三の住所姓名を示されたし。

答

學藝委員 農學士 川島勝次郎

(一)土地の肥瘦と仕立法の異なるに從ひ一樣でないけれども中等の畑地に根刈仕立をなす場合には一反歩に對し、春蠶專用ならば九百本乃至一千二百本位

(二)桑葉の收穫量は仕立法の異なるに從ひ一樣でないけれども中等の畑地に根刈仕立をなす場合には一反歩に對し、春秋蠶兼用ならば二千四百本以上

(三)收穫量は根刈桑に於ては春蠶期のみにて、一千貫以上に達するものあり、又同密植ものに於ては春秋二期に於て正葉量五百貫乃至七百貫に及ぶものがある。

(四)桑實生苗を以て蒲成桑園を仕立つるには次の如くするのである。

實生苗の同一苗圃に於ては最大なる者に拘て變種多き故中等大にして成べく屈折多く幾分青味を帶びたるものを撰び十分に整地したる桑園に植付べし、植付は成べく淺きを宜しとし、一反歩に二千四百本以上とす肥料は一定せざれども約年七八間翌年より二十間位を要すべし。

山形縣、高知縣、愛媛縣等には實生苗商あるを以て、同地縣農會又は郡農會等につき照合せらるべし。

泥藁を簇の材料と爲すに就ての質問

京都府 通常會員 本田信藏

大洪水の爲に泥の着うたる納藁は來春の養蠶に使用する簇の材料として何等の害も有りますまいか。

答

學藝委員 土屋泰

洪水の爲め泥土の附着せる藁を簇に用ゐるときは、幾分か繭の光澤を損する虞れがある、故に充分乾燥せしめ、可成泥土を落して使用せねばならぬ。

蠶種の色澤に就ての質問

鹿兒島縣 通常會員 前田覺左衛門

(一)實物一號の色澤を帶べる蠶種は普通に發生はする樣でありますが、其極色澤は春蠶種よりも秋蠶種に多く、又此色澤は春の發育に就ては別に異なる點はありませぬ

(二)實物二號の色澤に就ても前同樣の質問を有するが、蠶種の種類に依るのですか、或は卵後蠶種取扱の結果、卵内胚子の受くる溫度に關係するのでせうか、委しく御教示を願ひます。

(三)實物三號の蠶種の色澤に就ても前同樣の質問を有するが、上に今一つの疑問は實物一二號共母蛾檢査を行ひ、若し無毒なるに於ては無毒とすべきものですか、又缺蛾として除去して宜しいでせうか、御明教を願ひます。

答

學藝委員 土屋泰

(一)實物一號の色澤を帶べる蠶種は(異樣のものを生ずる原因に就ては未だ明からずと雖も產卵後の保護の如何に因りて生ずるものにあらざることは確實である、而して實物一號は春秋蠶を通じて生じ易き色澤なれども、殊に春蠶の青熟期に多く認ひ第二號は稀に春蠶種中に見るのである、此等の蠶卵は蠶兒の强弱と何等の關係なきを以て、製絲用蠶兒なれば特に除去するの要はあるまい、但し原種用蠶兒なれば翌年の卵色を齊一ならしむる爲めに除去するを良しとするのである。

秋蠶種の貯藏井に漏斗の構造に就き質問

兵庫縣 通常會員 谷口普

(一)鋼鎖を採場したる古穴に一化性秋蠶種の貯藏を試みやうと思ふが、穴中は湿氣頗る多量なれども溫度四十度以下に在る間は蠶種が湿氣に觸れざる裝置さへ施すば、卵の生理上障害がないでせうか、若し障害なしとせば、其貯藏の裝置は如何にせば最も適當でせうか。

(二)蠶絲會報第百八十四號問答欄佐々木博士の御答中に「雄蛾の多く產出したる時は一兩日間は之れを紙袋にて製したる漏斗にて伏せ置き」云々とありますが、該漏斗の構造及使用方法御教示ありたい。

答

學藝委員 理學博士 佐々木忠次郎

(一)鋼鎖を採掘したる古穴にて湿氣多き場所は溫度低ければ、其湿分を避くるの裝置あれば、右の古穴に蠶種を貯藏するも別に蠶種に患害を加ふることはあるまい、此古穴の中に貯藏せる蠶種に湿氣を受させぬやうにするには大小二個の箱を製し、

大箱の底に撥心を敷き蠶種を容れたる小箱を容れ、次で大箱と小箱との間を、同じく撥心にて充たし、然る後小箱に蠶をなし、又此蠶の上に撥心を敷き、大箱に蠶をなして、古穴に貯藏するならば、濕分は多くは吞撥心に吸取られ、蠶種は濕分を受ることを惧ないのである。

(二)蛾を伏せ置くことに用ゆる亞鉛板製の漏斗は桐製用の種紙に畫ける區畫の大小に應じて、其大さを異にせねばならない、假令ば一寸五分角の區畫なる時は、漏斗の大なる口の徑を一寸五分となし、其小なる口は徑三分位となし、高さは一寸五六分となすのである。

小なる口

大なる口

蠶蛆に就ての質問

群馬縣
通常會員
關　孫四郎

蠶蛆に二性化のものゝないと云ふことゝ、蛆卵は產付後一ケ月も經過すれば生活力を失ふと云ふことは、骨て聞くことろであります、然るに本年九月二日秋蠶廟より蛆の發生しつゝあるを實見しました、故に現品を添付し、二化性の蛆なるや、或は春蠶期產付の蛆卵死滅し居らずして、寄生せるものにや若しくは「タキナ」とか云ふ蠅卵の蛆蟲にや、御明敎を願ひます。

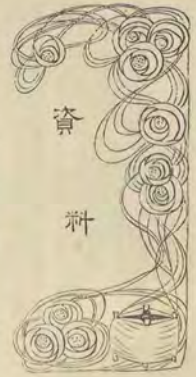
右は群馬縣碓氷郡川柳村大字川鵜沼長村字本郷と云ふ、山中孤立部落に て敢て飼育したるものゝ蠶より發生したるもので、同地に巻蛾類を吸巻蛾蛹に巻蛾六月一日より五日迄の間であります、此出蛾せる秋蠶廟も九月日位でありませうから、推するところ春立に八月一二日の頃で御座います。

答

學士會員
農學士　明石弘

送附の標本は蠶蛆にて「タキナ」蠅の蛹とは全く違つて居る、而して蠶蛆卵の塵下せらるゝ蠶兒の三齡以後であるから、八月十日頃に生活して居る蠶蛆卵がなければならぬ事となる、此蠶蛆蠅の羽化する時期は東京附近では四月上旬かから下旬で最も多く羽化するのは二十日以後であるから、即ち蠶兒の掃立時期より少し早いのであるから、湯原村地方では五月二十日以後に最も多く羽化すると見て大差がないであらう、蠶蛆蠅は羽化後十日前後より產卵を初むるので其生活期間は天候が不穩なる時は一ケ月以上に亘るものである、蠶蛆卵も亦一ケ月以上生活力を保つ者であるから、以上の日割を以て考へて見ると八月十日頃生活力を有する蠶蛆卵の存在することは、有り得べき事實と考へられる、又實際九月二日に該階標本の如きものがあるとすれば蠶蛆は決して二化せぬものであるから、右の如く遲く發生した蠶蛆蠅の產卵したものが、寄生存して居て蠶兒の寄生したものであろう。

左の一編は在佛國里昂本會名譽通信員より寄贈せられたる千九百六年度に於ける世界重要產絲國の掃立數、蠶種數等の國別に揭げたる統計にて頗興味ある資料なるものと認めたが故に本誌より飜譯之を謹載して以て識者諸賢の參考の資料に供せむとす



千九百六年度世界重要產絲國產絲額統計

目次

佛蘭西、伊太利、西班牙、澳地牙利、亞細亞土耳其、獨逸、巴土耳其、「バルカン」諸國、希臘、「シレート」、「シープル」島、「ロード」島、甲加索、波斯、土耳古斯丹、支那（上海及廣東）、日本、東印度、各國產絲額對照表

附錄の一　千九百六年度佛國牧蠶額一覽表

附錄の二

佛蘭西

第一　掃立數量

佛國農務省の公表したる統計に依ると千九百六年度に佛國に於て掃立たる蠶種の量は、十七萬八千三百三「オンス」であるる、千九百五年度は十八萬九千二百七十九「オンス」千九百四年度は十八萬三千四百四十三「オンス」千九百三年は十八萬二千七百十二「オンス」千九百二年は十九萬八千四百二十七「オンス」、千九百一年は二十萬五千百七十四「オンス」であつた、千九百六年度に掃立てた十七萬八千三百三「オンス」の蠶種別と緬別とは左の如くである、緬別を詳細に出するは煩る冗長に渉るの嫌があるから、茲には唯蠶種種別のみを掲ぐる事としやう）

掃立數量

佛蘭蠶種	一七二、三一
日本蠶種	二二、二八
支那蠶種	四、〇〇二
其他の外國蠶種	一、三三
	三二九
合計	二、三八〇
	一七、八、三〇三

試みに最近十年間の掃立數を左に表示しやう、但し與れも「オンス」單位である。

年次	一九〇一	一九〇二	一九〇三	一九〇四	一九〇五	一九〇六
佛國蠶種	原蠶種	一、二二、二	一、二二、二	一、二二、二	一、二二、二	一、二二、二
	復蠶種	一、二二、二	一、二二、二	一、二二、二	一、二二、二	一、二二、二
日本蠶種	原蠶種	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二
	復蠶種	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二
支那蠶種	原蠶種	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二
	復蠶種	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二
其他の外國蠶種	原蠶種	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二
	復蠶種	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二
合計	原蠶種	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二
	復蠶種	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二	二、二二、二

一八九七	一〇、八三四	一、一七七	三、九三四	—	—	三、九八九	一九、八八五
一八九八	一五、九八八	六四九	五、〇〇三	—	—	三、三三一	一八、九八〇
一八九九	一七、三四四	七八八	四、三一〇	—	—	三、三二三	一八、八四五
一九〇〇	一九、〇四〇	九九九	四、八九七	—	—	三、四六八	二〇、七九四
一九〇一	一九、九三二	五〇五	六、三五六	—	—	二、七三九	二〇、五二四
一九〇二	一八、九〇四	三三三	六、七三三	—	—	三、五三一	一九、八四七
一九〇三	一七、四八八	三〇七	四、〇九八	—	—	三、四五九	一八、二七三
一九〇四	一七、〇七〇	四八〇	五、七七〇	—	—	三、一五六	一八、五四九
一九〇五	一七、一三五	四七九	六、四四八	—	—	三、三三九	一八、九二九
十年間の平均	一六、六六四	六七三	三、三六五	—	—	三、八八九	一九、六七七
一九〇六	一七、二三一	二三八	四、〇〇三	二三四	三三九	三、三八〇	一八、四〇三

是れに由て之を觀れば千九百六年度に掃立たる蠶種の數量は之を千九百五年度に比すると一萬〇九百七十六「オンス」の減額であり、十年間の平均に比すると、一萬七千〇十四「オンス」の減少となる。

農務省が公然支那蠶種の數量を公示したるは、千九百六年を以嚆矢とするのであるけれども、其數量は甚だ少量である、即ち僅に四百六十二「オンス」にして、其内百三十三「オンス」のみが、直接輸入せられた蠶種で、殘り三百二十九「オンス」は佛國に於て複製したるものである、此の四百六十二「オンス」の支那蠶種は、「ドローム」「ボークリユーズ」及「ヴアール」の三縣に分配されたのである。

第二　飼育の狀況

掃立は平年四月十日乃至二十日に始まるのであるが、千九百六年は五月の上旬まで引續きたる寒氣と雨天との爲めに概して云ふと四月二十五日頃より漸く始まりたのである、即ち平年に遲るゝこと約十日である。

桑樹も三月四月の寒氣の爲めに當初は頗る發育遲鈍であつたが、五月上旬より同月上半期間に懸けて天候順に復したる爲めに發育甚だ良好となつた。

概して五月中頃が第一眠時期であつたが「ヴアール」縣に於ては此時既に第三眠に垂んとしてあつたが、翻て「イゼール」縣を見ると未だ漸く掃立の最中で在つた。

五月下半期の天候は頗る不順で在つた、十五日より二十三日までは、每日の雨天で且つ寒氣も強かつたが、二十四五日から天候快復して溫度も余程加はつて來た、之れか爲め桑葉の發育も亦回復して來たが其の收葉額は甚だ少なかつた、或る縣の如き、就中「セヴエンヌ」の如きは桑葉皆無の悲境に陷つた之は三月の降霜の爲に桑樹を非常に痛めた結果である

五月末に至ては概して第三眠乃至第四眠の間に在て、至る處嘆聲を聞かざるのみならず、多くは望みを今年の飼育に屬して居つた。

六月初旬から北風をよと吹き始めたるが爲めに飼育最終期は實に申し分がなかつた、收繭も殆と意の如してあつた、雨はなく、溫度も非常に高からず。

六月中旬より當年の新繭はぼつ〳〵、市場に顯はれた、今各地の市場の初手合の日を擧げると「アヴヰニヨン」は六月十三日「セン、イポリート」は同十二日「アレー」は十五日「セン、タンブロワ」は十九日で在つた。

大體から云ふと此年の飼育は成功したのである、收繭額の前年に比して少いのは飼育上の不成功でなくて、前項にも述べた通り掃立數量の少なきに基因するのである。(佛國の項)

桑の成長に關する研究

通常會員
秋田縣立農業學校教諭　田村兼藏

凡そ農業の目的を以て植物を栽培せんには、其植物の種類用途に依りて異なるべきも、可成丈け成長極度に達し收量最も多き場合に之を收獲するを得策とす。

然らば蠶業にありても其の蠶兒の唯一飼料たる桑は、何月何日より成長を始めて何月中最も成長繁茂し何月何日に亙りて其の成長を休止するやを研究し、其の最も成長したる時期に收葉して蠶兒を飼育し得べくんば經濟上策の得たるものと云はざるを得ず。

之を以て余は去る明治三十九年五月より同年十月に至るの間、本校に於て植付後三年目の秋田式仕立の桑樹に就き之が研究に從事したりしに、其の發芽を始むるは春季五月初旬日平均溫度華氏五十五度内外に昇騰するの候にして、其れより順次氣溫の上昇するに從て成長し、五月中百分の一〇、一六月中同二三、五七月中同二七、一八月中同三二、〇、九月中同七、二合計一〇〇成長し、九月下旬日平均溫度五十五度内外に下降するに亙りて其の成長を全く休止す。

之に依りて之を考ふれば桑の生長は華氏五十五度位より以上の氣溫にあらざれば成長し得ざるものゝ如し。又最も成長するは八月中にして之に次ぐは七月六月の兩月にして、八月に收葉し蠶兒の飼料となすときは最も多くの收葉あるべき理なり、故に單に桑葉收量を基礎とし養蠶業を經營せんとせば、八月中飼育すべき秋蠶に及ぶものなしと信ず。

桑園と煙草園との關係

通常會員
靜岡縣濱名蠶業學校教諭　梅原好松

近來夏秋蠶の飼育隆盛となり、其利益を多く受ると同時に又一方に於ては春蠶の蛆害に犯さるゝが如く、夏秋蠶飼育は煙草の爲めに害を蒙ること尠からず、凡て物に一利一害は數の免がれざる所なれば、之を全滅するは困難なれども、尚は當業者は其被害の程度を調査して豫防の方法を講ぜざるべからざるは目下の急務なりとす。

元來煙草は喫煙者に害あるのみならず、蠶兒に撒布すれば蠶兒は忽ち中毒して斃死するに至ることは今更言を要せずして明なり、然るに尚野外に於て桑園と煙草園と接近すれば、其接近する桑園の桑葉を蠶兒に與ふれば、蠶兒は中毒し、甚だしきは斃死するに至るものあり、之等は全く煙草園よりは常に毒物を空氣中に揮發飛散せられ、風の爲めに周邊の桑園に輸送され、桑葉に附着する爲めならん、而して煙草園を距る何れの邊まで被害を及ぼすやは、天候の模樣によりて距離の遠近は一定せず、余は玆に於て煙草園と桑園との距離の如何は、被害程度を如何に呈するか、尚は天候は又之れに對し何等の關係なきやを試驗せり、其方法は秋蠶(多化性四化角又種)五齡中蠶兒百頭を取り、煙草園と桑園との距離を壹間(第一區)三間(第二區)五間(第三區)七間(第四區)十間(第五區)と區別し、給桑法は煙草園に接する桑園の即ち右の定めたる距離に於ける桑葉を、蠶兒五齡中每日四回給與を持續し、其他は普通の無害桑を給與せり。

凡て毒物被害の狀態は蠶兒毒物の桑葉を食すれば、近距離のものは胸部半透明となり叉節大し、偶被害多ければ胸部は遂に收縮し高く擡げ、益々被害甚だしければ口部より、胃液を分泌し、或は腹脚は力を失ひ横臥するに至る、其苦悶の狀實に悲慘なるものあり、然れども其被害輕微なるものは一時苦悶の狀を呈するも普通桑を給與すれば恢復し營繭するも、其被害甚だしきものにありては斃死するものありたり、其被害の程度は煙草園と桑園との距離の遠近に比例し、距離近ければ被害大にして距離遠ければ、被害小なり、去れど強風ある時は風の方向に從ひ其被害遠距離に及ぶと雖も、又風なくして降雨の際は、被害は甚だ少きが如し、之れ全く降雨の爲めに毒物を洗滌せられたる所以ならん。

其被害の程度は距離の遠近に比例するは次の收繭表に依て明なり。

	五齡中飼育蠶數	上繭	中繭	下繭	同巧繭	合計	不結繭蠶數
第一區	一〇〇頭	六九顆	五顆	一四顆	〇顆	八八顆	一二頭
第二區	一〇〇	七八	八	三	五	九四	一
第三區	一〇〇	六六	五	〇	五	七一	二四
第四區	一〇〇	八二	〇	二	四	八八	八
第五區	一〇〇	八五	〇	八	三	九九	一

備考第三區は上簇中鼠害を蒙りし爲め、上繭の收穫少く鼠害數は不結繭蠶數に混ず。

以上の表に依て被害の程度は明となりたれども未だ以て適當なる豫防法を知るに至らざれば、玆に簡單なる被害の成績を草して諸賢の教示を乞ふ。

米國重要農産物作柄豫想

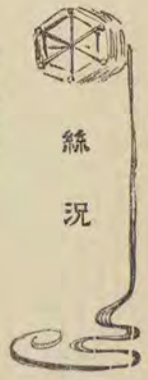
米國市加古帝國領事館より去九月廿七日附を以て外務省へ左の報告ありたり九月一日當合衆國農務省統計局より公表せし重要農産物の作柄豫想左の如し

	九月一日	八月一日	前年九月一日	十ヶ年平均	
王蜀黍	八〇・二	八二・八	八〇・三	八六・五	八二・〇
春蒔小麥	七七・一	七九・四	八三・四	八七・五	—
燕麥	六五・五	七五・六	八二・九	四〇・五	八二・六
大麥	七六・五	八四・五	八六・四	八二・八	八四・五
甜蔘	七七・四	九〇・九	九二・二	九〇・八	八〇・二
煙草	八〇・五	八二・六	八六・二	八五・一	八二・八
米	八七・〇	八八・〇	八七・〇	—	
綿花	七二・七	七五・〇	七七・五	七二・一	七四・五

右表に依りて見るときは孰も前月の豫想に比し減少を訛さゞるなく天候不定寒暑一定せざりしこと之が原因を爲せるものゝ如し右の内春蒔小麥、燕麥及大麥は收穫後の作柄を示せり本年秋季米國に於ける産米額は未だ之を知る能はずと雖も左に近頃公表せし前年收穫量を附記して參考に供す

州別	産來量	州別	産來量
テクサス	三,一七〇,二三〇袋	フロリダ	三〇,五六六
ルイジアナ	三〇〇,八六八	ミシシッピ	[illegible]
北カロライナ	四〇,三六	アラバマ	八,六六四
南カロライナ	一〇四,六六六	アーカンソウ	三三,八〇〇
ジョーヂア	三二,三四四	合計	[illegible]

(備考) 一袋は百六十二封入なり



絲況

横濱市場

本年に於ける我生絲貿易は、一月以降十月末迄の輸出累計一億圓以上に達し、之を昨年の同期間に比すれば優に好成蹟を收め得たる次第なりしも、銀銅價格の暴落に續て米國金融市場の恐慌となり、爲に横濱生絲市場は多大の影響を受け、十月中旬頃より稍不振の色を呈し、十一月に入りて一層甚しく、其上旬に於て一千百三十圓なりし上一番は下旬に於て一千十五圓に、千百八十五圓なりし細物は一千八十圓に、千百三十五圓なりし折返一顆馬は一千二十圓に暴落し更に十二月に入るも低落の趨勢は尙ほ依然として定期絲九十圓の關門を破らんとし、信州上一番九百四十五圓の安値に賣應せんとして商談兎角相進まず、市場頗る慘憺たる光景を呈したり、故を以て前年十一月中の手合高は一萬八千梱に達せしも、本年は漸く一萬二千梱を算するに過ぎずして、横濱埠頭遂に四萬梱の堆積を見るに至れり。

而して十一月中に最も高價に賣行きたるは靜岡縣城南社細一千三百〇五圓にして最も低價なりしは長野縣共信組太の九百

九拾圓なりとす例に依り今年一月以降の最高價と前年の夫れとを比較對照すれば左の如し。

生絲最高價月別前年對照表

	明治四十年			明治三十九年			價格之差
一月	山梨縣	矢島組金太	一,三一五圓	愛媛縣	河野製絲太	一,〇九〇圓	二二五圓
二月	山梨縣	矢島組金太	一,三〇〇	神奈川縣	兄弟社細	一,〇九〇	二一〇
三月	岐阜縣	金〔〕製絲細	一,四〇〇	山梨縣	風間製絲太	一,一二〇	二八〇
四月	東京府	羽村館	一,四五〇	山梨縣 埼玉縣	風間製絲太 埼玉製絲太	一,一二〇	三三〇
五月	群馬縣	交水社旭鶴座	一,四三〇	愛知縣	國寶社細	一,〇八〇	三五〇
六月	山梨縣	矢島組金新太	一,三一〇	愛知縣	國寶社新細	一,一〇〇	二一〇
七月	埼玉縣	森澤製絲細	一,四一五	愛知縣	國寶社細	一,〇八〇	三三五
八月	埼玉縣	森澤製絲細	一,四五〇	山梨縣	矢島組太	一,〇九七	三五三
九月	靜岡縣	城南社細	一,四七〇	靜岡縣	川津製絲 城南社細	一,一一五	三五五
十月	山梨縣 埼玉縣	甲南社細 森澤製絲細	一,四六五	山梨縣	矢島金太	一,一五〇	三一五
十一月	靜岡縣	城南社細	一,三〇五	靜岡縣	〔〕須賀社太	一,二三〇	七五

去十月中旬米國紐育の金融市場端なく恐慌を引起してより市場の動搖は其極に達し、米國政府は民間の有力者と合して之が救濟に盡瘁するも、容易に功を奏する能はず、信用の破壞は通貨缺乏の甚しきを致し、遂に米國をして金塊の供給を歐洲の市場に仰ぐを餘儀なくせしめ、歐洲より金の米國に入るもの一億弗の巨額に達せんとし、爲に歐洲の市場は非常の壓迫を受け、各國の中央銀行は相尋て其金利を極度に引上げ、殊に英蘭銀行の如きは數日の間に利率二分半を高めて、七分の高率と爲し、以て今日に到るも其警戒を解く能はざるの狀況に在り、世界の各市場は斯る異常の狀態に在て既に一月半を經過す、曷ぞ我生絲貿易の上に甚大の影響を受けずして止むべき、里昂、紐育、美蘭等世界の各生絲市場に於て續々破産の聲を耳にするも、蓋し止むを得ざるの結果ならんか 去れば一時千二三百圓の市價を維持したる我生絲が日に下落して、遂に九百圓臺となり、其賣行頗る澁滯して去十月の初め横濱の在荷二萬個内外に過ぎざりしもの、今や漸く積んで約四萬個に達せんとするも敢て怪むに足らざるなり、斯くて高貴の原料を買入れ生産費の著しく増加したる當業者に取りては容易ならざる打擊にして、横濱貿易商間に之れが救濟協議會の開かれたるも寔に所以あるとなり、と雖、紐育の市場は漸く恢復の徵候を現し來り、通貨に對する打步も下り金塊の輸入も亦一億弗の巨額に達せんとするものあり、一朝市場の形勢にして回復せんか、通貨の脹溢其效果を現はし來り市場の狀況平靜に復する或は意外に速かに、隨て生絲の市價前日の如きは望み難からんも、其賣行の澁滯今日の如く甚しきもの久しきに亘るが如き事無かるべしと信ずるなり、兎に角當業者此際愼重の態度を取り、以て昨今の難關を切り拔くるの策を講ずること緊要なれ。

尙左に本月中の生絲集散種別表を揭げて參考となさん。

明治四十年十一月(自一日至三十日)生絲集散表

	持越	入荷	賣了	地方横戻	繰越
器械	二三、〇五七	一八、八四三	九、五九三	二、一二二	三〇、一八五
座繰	六、八六〇	三、五九九半	一、六五四	二〇七	八、五九八半
折返	二、六四〇	三五	二七九	四〇七	一、九八九
雑	一三二	二	—	一七	一一七
合計	三二、六八九	二二、四七九半	一一、五二六	二、七五三半	四〇、八八九

備考

一、表中單位個は九貫目を指す

二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査繰越とは本月より翌月に繰越すべきものにして本月末日の調査に係る

三、前月分の繰越と本月分の持越と其數一致せざるは商談中のものありしに依る

四、繰越以外に商談中のものありと知るべし

五、賣了中米國に輸出せるものは四千九百五十一個にして歐洲に輸出せるものは二千六百三十三個なりとす

倘左に生絲集散日別表を掲げて參考となさん

明治四十年十一月自一日至三十日生絲集散日別表

器械太□ 同中△ 同細〇 座繰× 折返＋

日次	入荷	手合	賣了	引戻	輸出	地方横戻	國名	社名	種別	最高價	最低價	摘要
一日	四三六	一七七	二三二	—	—	二一	上總・信濃	南總社・⊖組	□・□	一、二〇五	一、一二〇	多少買氣ある向もありしも目星しき商談なく直段肩に變りなかりし
二日	一、一一七	五八七	二六七	二三	四七八	三四	信濃・岩代	岡谷製絲・共同二馬	□・＋	一、一二〇	一、一一〇	唯機上州撰部物に直段折合出來せし外は總て商談なかりし
三日	—	—	—	—	五〇二	—						大祭日
四日	一、四九五	三〇三	四四二半	—	—	一四八	上野・信濃	令組・岡谷鬼	□・□	一、一三〇	一、一一五	染たる買人なく折返し手合ありしに相場は休日前に比し一二十圓方安すかりし
五日	四四五	七二	四一三	一八	—	一一九	越後・武藏	高田社秩・改伸社	□・×	一、二〇五	一、一一〇	「デニール」稍々細目なる條件の下に歐洲向へ太一番品輕少ながら廿圓安を以て相光口へ出來せし外は染たる商談なかりし
六日	八四三	一三六	二〇二	—	—	八九半	伊豆・信濃	城南社・令組	○・□	一、三〇五	一、一〇〇	經育財界の恐慌を無視へて定期に大暴落を來し夥ひ現物品も亦染たる買人なく相場は前日に比し二三十圓安を告たりし
七日	九七六	四二〇	三七四	九〇	八五	九三	岩代・同	共同金壺・同二馬	×・＋	一、一七〇	一、〇七五	定期・休會にて人心少しく落付もの摸を見へ歐洲向・當用口へ弗々出來し相場は又昨日より二三十圓安く思はしからざる現況に變し
八日	一、一二六	四五九	四八七	四〇	—	四〇	飛騨・岩代	黑龍社・共同姫建擊	○・＋	一、一七五	一、一二〇	歐州向へ標へて二三館へ弗々手合出來相場は漸く保合の體なりし
九日	七一四	一八〇	七三六	五一	—	一五〇半	伊豆・信濃	城南社・東洋館	○・□	一、二五〇	一、〇四五	概して保合の有様にて徐り捗々しき商談なく兎角頭重の人氣なりし
十日	—	—	—	—	—	—						日曜日
十一日	一、六六四	二二六	六〇〇	三六	—	六一	信濃・同	後明社金・日本社	○・□	一、一七〇	一、〇五〇	休日前より更に一層不味にして信州上一番挽前直より五十圓方下落の氣配なりし
十二日	七八一	一六六	三八〇	九	一、三二〇	八三	信濃・同	横榮社・小口組	○・□	一、一五〇	一、〇五〇	一兩館へ當用口弗々商ひ出來したれど直段は又々十圓方安く何分面白からざる成行なりし
十三日	六二一	五九九	九六三半	九九	—	五二	信濃・同	東行社金・小杉組金	△・□	一、一四五	一、〇〇〇	直輸筋其他買望の向へ手合出來し人氣少しく鎮まり模樣にて市況保合へり
十四日	六九二	四一五	五三六半	八一	七〇〇	三二	信濃・同	東行社・小林製絲	○・□	一、一二〇	九九五	地道の品少しく買氣を示し各館の當用口へ二十圓高の手合を告け近來に於ける賑かなる市場なりし
十五日	八八六半	三四二	四五九	三八	—	一七三	駿河・信濃	大宮製絲・萩倉製絲	○・□	一、一一〇	一、〇〇〇	前日商談の分は直段變なく手合出來し午後は各館共急に氣乘り薄の體となり形勢面白からざりし
十六日	七九四	二八七	一七五	五四	一、三〇三	一一一	信濃・同	後明社金・常田館	○・□	一、一三〇	一、〇二〇	新規の注文として現はれざりしも纏筋に於て一二館弗々商談ありたり
十七日	—	—	—	—	—	—						日曜日
十八日	一、三三六	九一	七一二半	三二	—	二〇三	甲斐・岩代	矢島組金・共同二馬	□・＋	一、一六〇	一、〇〇〇	補充口へ少しく商談ありしのみにて絲況靜かなりし
十九日	七二六	三二四	七四三	一四	五〇	一〇六	駿河・信濃	厚信社・進眞社	○・□	一、二三〇	一、〇〇〇	大勢は依然變りなく保合居れり久し振りにて座繰商ひ出來し他は染たる手合なく面白からざる成行なりし
二十日	六七一	五四八	五九九半	一一七	六五〇	四三	三河・上野	岡實社・碓氷社二人類	○・×	一、二〇〇	一、〇一五	安直なから實應したる爲め幾分の手合出來し氣配は更に引立たず
廿一日	五八一	一八〇	五八五	八四	—	一七一	美濃・信濃	東美館・日木社	)・□	一、一三〇	一、〇一〇	三井及七十四番館へ前日引續の口へ同直に出來せしまでなりし
廿二日	六〇五	一〇七	三七一	一	—	一二四	岩代・信濃	共同姫鍵嘩・令組	＋・□	一、〇四〇	一、〇一〇	各館鋒々買氣なく新現手合殆んど皆無なりし
廿三日	—	—	—	—	七七〇	—						大祭日
廿四日	—	—	—	—	—	—						日曜日
廿五日	二、二二〇	二八二	三八五半	八〇	—	一七七	信濃・同	常田館・岡谷製絲	□・□	一、〇一〇	一、〇〇五	信州上一番格前直より十圓安に折合たるも跡不味の成行なりし
廿六日	一、一三二	五四	八四七	一八四	—	一九三	甲斐・信濃	白鳳社・東英館	□・□	一、〇九〇	九九五	補充談も頓と行はれずして相變らず不振なりし

里昂市場（十月十九日發）

甚許市場の景況は買入稀れとなりしより、之が影響して機屋の內狀も買人出揚渋らぎて一體に不況に終れり、加之亞細亞宛の爲替相場が低落せし爲に東洋の生絲は相場惡しき方に見へたり、然るに歐洲生絲の方は之に反し賣意大に强氣を含み賣人手堅き唱へにて保ち合へり。

概して歐洲及亞細亞生絲共今週は取引甚だ多數に行はれたり、而して直段は左の如し。

「セヴエーヌ」	太一等	十三—十五	六十八法
歐洲	二等	九—十一	六十六法
伊太利	上二等	十二—十四	六十四法
「ピエモン」	一等	十—十二	六十七法

紐育市場

備同地駐在山田領事よりの電報左の如し。

米國財界大恐慌に伴ふ人心不安の結果生絲商況は方向不定見透の變にして依然不況相場一般に弱氣從て荷主思惑の如何に依り區々なりと雖も歐羅巴生絹類は今日までの處差したる反響を蒙ることなく幾日の技支品製造に先つ好況を維持しつゝあるも他日徐々此影響を感ずる所あるへしと思ばる（十一月十六日發電）

生絲商況依然不況なるも今や我生絲相場の下落は停止し稍々順調に向ふの氣味なるか如し五十七法（十一月三日發電）

紐育生絲市況に就き同地駐在小池總領事よりの電報左の如し。

生絲市況依然引立たす相場漸に連れ下向（十一月十三日着電）

生絲市況變なし（十一月二十一日着電）

生絲市況變りなし（十一月二十七日着電）

生絲市況は依然不振當座用意の買増に止る（十一月四日着電）

上海市場

上海絲況に就き同地駐在永瀧總領事よりの業報左の如し。

輸出高　十月中の輸出高左の如し

黄絲	一、八〇六俵	向佛國	四五三	向香港及海峽殖民地	一四二
白絲	二、九八三	向伊太利及瑞西	七二九	外に濟氣様絲	
合計	四、七八九	向米國	六〇九	向歐洲	一、三七二
內　向倫敦	七六	向孟買	一、六八〇	向米國	二九七

本季初（六月一日）よりの輸出通計左の如し

白絲	二一、九五一俵	黄絲	六、九二五	濟氣様絲　向歐洲	五、二八三
		合計	二八、八七六	向米國	一、三一五

昨年同季間の輸出高左の如し

白絲	一四、二八四俵	黄絲	五、四一八	濟氣様絲　向歐洲	四、一二一
		合計	一九、七〇二	向米國	九一八

商況　本月中の手合高左の如し

歐洲へ　白絲	二、七五〇俵	米國へ　黄絲	一、八〇〇	白絲	八〇〇
				合計	五、三五〇

前記の如く本月中の手合高は合計五千三百五十俵にして、之を九月中の手合高三千八百五十俵に比すれば正に千五百俵の增加を示せり、此增加は九月中米國方面との手合皆無なりしに反して、十月中は爲替相場騰落のため買氣を喚起し、米國に八百俵の手合を見るに至りしに由るものなり、然れとも全月を通して之を考ふれば尙は一般不振の狀態たるを免れず、前記の如く爲替相場下落のため一時買氣を喚起せしも、忽にして荷主の値上に濟遇したるを以て、市場は再び沈睡に陷りたる折柄、紐育市場に於ける金融逼迫は、此方面との取引を澁滯せしめ、市場をして益々不況を呈せしめたり、今最近の相場を示せは左の如し。

Wangchow pong Ex. Tls 382⅗	Mienyang S. T. 1 〃 402½
Mienyang H.K.1 〃 390	Mienyang S. T. 2 〃 392½
Lienienyang 〃 345	

在荷高　現在荷高左の如し

白絲	六、〇〇〇	野蠶絲	二〇〇
黄絲	二、〇〇〇	合計	八、二〇〇

廿七日	八六二	二七	四四二	三六	二五三	一八七半
廿八日	七二五	一七	二六〇	一八	一、一七二	一二三
廿九日	四三八	—	一七七	九	—	一一六
三十日	五九三	—	一三三	七二	三〇一	一〇三
合計	二二、四七九半	五、九九九	一一、五二六	一、一八五	七、五八四	二、七五三半

上野	甘樂社操手	×	一、〇四〇	地遣向は可也手堅く味を有せしか糸は益々不味の現況なりし
信濃	光信館	□	九九〇	
信濃	天佑社	△	一、〇五〇	細節物附三館手合ありしのみ外は日に増面白からざる成行なりし
同	⊖組	□	一、〇〇〇	
信濃	信龍社	○	一、〇八五	各館染たる買氣なく氣配一層惡しく殆んと休業の姿なりし
同	日本社組	□	九九五	
甲斐	矢島組	□	一、一〇〇	前報同樣變りなかりし
	末定金			

猶左に本年一月以來の生絲集散の狀況を明かならしめん爲め月別表を示すべし

生絲集散前年對照表

年月次	持越	入荷	賣了	積戻	繰越	輸出數量	輸出價額
四十年一月	一三、九六二俵	一〇、一六七俵	一〇、四三四俵	一〇、〇二〇俵	一二、六七四俵	六三〇、一一五斤	七、七六三、八三一圓
四十年二月	一〇、七七一	五、〇六二	九、五三九半	一、一七五	五、一一八	六三九、四〇九	七、八九五、一二一
四十年三月	四、六〇七	七、一一〇	四、二四四半	七五〇半	六、七二二	四一〇、四五八	五、二五三、六五一
四十年四月	六、一二八	九、六一四	五、八九〇半	四三三半	九、四一八半	四九二、二四七	六、五八一、二〇七
四十年五月	八、二六九	四、五八八	三、三九四半	六〇七半	八、八八二	三四五、八七七	四、五七一、七四五
四十年六月	五、二九二	八、一一四	五、八一二半	四五〇	七、一四三	四二二、七五三	五、四九二、九三八
四十年七月	六、二七五	二五、六二九	一八、四八一半	四一〇	一三、〇一三	一、一二〇、一五四	一二、八四九、九三八
四十年八月	一二、九七六	二六、一六三	二六、五四九	四二二	一二、一六七半	一、五五〇、二六三	一九、五七五、〇二四
四十年九月	一〇、三九三	三一、九四六	一七、九六六	七一四半	二三、六五九半	一、〇三六、二八〇	一三、四三八、三七八
四十年十月	二二、五六九	三〇、五六〇	一八、六四八	六〇二	三三、八七八	一、二九五、七六六	一六、七四四、九九四
四十年十一月	三二、六八九	二二、四七九	一一、五二六	二、七五三半	四〇、八八九半	八〇九、八四三	九、六三五、五七四
計	—	六四、六七三半	七五、七八八	四九、七五四	—	八、六五三、八六五	一〇九、六〇五、九八七
三十九年同上		一四一、九六〇半	一五八、四四一	一〇七、〇二五半		九、三二六、五六六	九、六三四、四三六

之を昨年同時の表賞高二千百五十錢に比すれば殆と四倍の増加を來せり。

爲替相場　英吉利　一ポンド　九シリング　里昂四倍月後拂荷爲替　三ヒヤフ　四九ペンス
倫敦宛六箇月後拂荷爲替　一ポンド　六八　孟買一盾後十五月拂荷爲替　一〇四六

廣東市場

廣東に於ける生絲市況に付き同地駐在上野領事より本月十二日附を以て我外務省宛の如く報告ありたり。

本期間始ち十月二十八日より十一月十日までの二週間に於ける當地方生絲市況は商況始終ちすり西盤なり加之米國に於ける財政上の危機は益々商況をして不振ならしめたり。斯る狀態なるを以て米國筋よりの買手は皆無の姿と為り、且獨に歐洲筋のみ相紙從なりから小取引ありたり。今其取引相場を見るに左の如し。

純記	自 一一〇	至 一一〇	一〇二〇	米
細昌綸	自 一一〇	至 一一〇	九九五	Brandt
敕和	自 一一三	至 九八〇		
始貞綸	自 九九〇	至 九一五		
永盛	自 八〇五	至 八〇〇		
	自 二八	至 二八		

Thinnuss ものは多少の買手ありしもの如く、Three Moss ものは價格一樣なりざれども、大約一襯に付き六百四十弗乃至六百六十弗の相場なりき、而して此手もの、當省設に於ける當地方に於ける需要高は何程の數額なるや、算定し難きも、製絲業者は地向為なる Three Moss の四十番乃至五十番以上のものゝ製造せしめ以て實際米國の買手久しく買進まざるも拘らず、在庫は案外總多なりきりとき、當省相場を來し六箇月後拂荷賣二、片十六分の三傳賣二法六十六番二分の一方の低落にて本期間を終了したり。

會務錄事

支會職員の囑託

今回群馬支會長は會頭の推薦に依り、京都、三重の二支會副會長、京都支會幹事長は各支會長の推薦に依り總裁殿下より、委員部長、商議員は支會長の推薦に依り會頭より左の如く囑託せられたり。

群馬支會　支會長　南部光臣（前支會長有田義資氏退官の爲め補缺）
京都支會　副會長　島田剛太郎
同　幹事長　香川靜一
同　同商議員　鏡保之助　木村頁　柿沼平吉　荒木武雄　井上弘文　山中實　狩野時藏

新潟支會　北蒲原外十委員部長に交迭あり、左の通囑託せられたり

北蒲原　清水中四郎　中蒲原　金森琢央　東蒲原　山田千代藏
三島　小山龍作　北魚沼　北見東一郎　南魚沼　石川趙夫
中魚沼　高千野定之助　刈羽　細田直吉　東頸城　齋藤文吾
西頸城　四月條太郎　岩船　鳴小林石次郎

同商議員　稲見良蔵（前議員小林石次郎岩船委員部長を囑託せられたるに欠き補缺）

三重支會副會長　高橋要次郎（前副會長鶴見左吉雄氏轉任の爲補缺）

同　北平惠委員部長　谷野攀
同　商議員　八木富吉（前議員佐藤安兵衛死去に付補缺）

山形支會委員部長

山形　南村山　藤澤興作
新庄　南村山　長谷川與作
村山　南村山　小野寺榮七
西置賜　南置賜　吉田守信
東置賜　櫻庭芳春
米澤　二村忠誠
武石　遠藤
東川　鶴巣　獨里
鶴岡　海下　政恒
岩手支會委員部長　二戸　駒山　孝（上閉伊委員長加賀美保之助氏は死亡、二戸委員部長金長五郎氏は退官に欠き補缺）

地方委員部職員の囑託

今回高知地方委員の推薦に依り、委員副長は總裁殿下より、支部長、委員は會頭より夫々囑託せられたり。

高知地方委員部副長　和田世民
同　支部長
安藝　富田瓦太郎　香美　藤田喜金　長岡　東山清馬
土佐　山崎喜代太郎　吾川　尾崎登吉　高岡　佐野孫
幡多　姫松朝治　高知　小川直巳
同　委員
土佐　伊太郎　長木定毅　小笠原忠宣　三木貫太郎
吉良　鎮吉　井上正茂　横田直榮　望月平太郎
下元鹿之助　近森熊次郎　島村三郎之助

會頭北陸出張の概況（承前）

富山の講話

九月十日午前九時三十分倉頭一行八尾を發ち、相當列を正して一行を送る者都の如し、鉄道慰々として其誠篤附すに繰りあり、午前十一時富山に着し直知に到ち惜むが如き狀あり、其誠篤附すに繰りあり、午前十一時富山に着し午後二時より高等女學校の講堂に於て講話會を開く、來會者一千餘名にして松平會頭直接現事相次で講話を為し聞衆に多大の感を與へたるもの、如し午後六時より富山ゆかり階上に於て官民合同の一行に對する歓迎會を開く、來會者百數十名川上知事の挨拶に次で會頭の答辞あり、主客歓を盡して午後九時孤を散ぜり。

金澤の視察講話

十一日午前六時富山發汽車にて石川縣金澤に向ふ、川上富山縣知事以下縣高等官有志者十餘名停車場に送る、幾ばくか出迎ひとして來りたる石川縣技師芝山直清氏及見送りとして渡邊富山縣技師同行出發ぜり、午前八時金澤に着ぜば村上石川知事以下數十名停車場に迎へられ共に古々亭に入る、小憩の後芝山技師、大藤事務官等の案内にて林檎會會所、觀貿陶器製造、生絲檢査所、羽二重檢査所、石川製糸株式會社等を巡覽し、午後二時より縣會議事堂に開催する講話會に臨む、會頭及官地理事例の如し、此日政友會の長谷檢會議事堂に集と相對ぜり、縣會議員の選擧に熱中ぜる地方人は足を空ちに狂奔ぜる折柄とて、此の聴衆に依為の着席的講話に為めに來會者の少數ならんことを期せしが、豈緑業物例の氣炎實ぜる時今に於て實業に忠實なる有志者は續々として來會し、定刻に至りて已無虚五六百名に達し或は入場する者絶すして空しく憐弁に佇立するものあるを見たり。當日來會者の主なる者は石川縣、若林、力石、青木の各事務官、渡辺市長、山口羽咋、丹羽鹿島、植田瓜生百珠洲の各郡長等なり、閉會後古々亭の本店に於て村上知事以下の縣官及有志者の招待あり、長直又長谷場氏の招待茶と同時例なりしに六、結局なる當業者八十餘名の來會者あり、頗る盛なりし。

小松の講話

十二日午前八時より天下三公園の一として著名なる金澤城六公園なる丸、國内接樂前の建築に保る前田侯の別墅の舞鶴城として堅立し、室内

の裝飾當時閣主大名の盛時を偲ばしむるものあり、轉々懐舊の情に禁ぜざらしめたり次て工業學校、蠶絲試驗場等を巡覽し、午前十一時五十二分發の汽車にて小松に向ふ芝山技師、大塚事務官等同行く　富田能美郡長其他有志者來り迎へ富田郡長の午餐を受け午後二時より郡會議事堂に於て講話會を開く來會者約三百名、午後五時溫泉場粟津に至り紙屋に投宿す。

福井の視察及講話　十三日午前八時粟津發動橋に着し九時三十分の汽車にて福井に向ふ、芝山技師は送りて大聖寺に至り袂を分つ、而して山内福井縣技手來りて一行を迎ふ、十時福井に着すれば此地會頭の郷里なれば坂本福井縣知事其他百餘名停車場に充ちて歡迎せり會頭の親戚なる福井の巨刹信宗寺に投ず、此夜坂本知事は一行を五岳樓に招き清宴を催ふす。

十四日午後福井中學校の請に依り會頭は同校及師範、農業の各學校、工業試驗場等の生徒一千餘名を同校講堂に會し、約一時間の演說を爲せり、次て高等女學校に趣き教室を巡覽し將に辭せんとするに際し校長の懇請に依り時約一時間の演說をせらる、次て工業試驗場を巡覽し、午後二時より縣會議事堂に於ける講話會に臨む、來會者六七百名頗る盛會なり、會頭先づ講演を卒り信田事務官の案内にて藤島神社に參詣す、神社は南朝の忠臣新田義貞公を祭れるもの、市外高丘に在りて眺望最も佳なり、東郷元市長、石田商業會議所長、黒田生絲同業組合長大久保絹織物組合長の發起にて官民連合の歡迎會を五岳樓に開く、來會者百三四十名甚だ盛會なり、此日會頭は一日にして一時間以上の演說を爲すこと三回皆聲零も疲勞を見ずして亦疲勞の狀あるを見ざりき。

敦賀を經て歸京　十五日午後二時二十分發汽車にて敦賀に向ふ、送る人亦迎へる時の如し、敦賀に着すれば蠶商大和田莊七、敦賀郡長、商業會議所長等來り迎へ、相伴て時賀港を觀察し、大和田氏の邸に着し晩餐の饗を受け、午後七時三十分發の氣車にて十六日午前九時新橋に着せり。(完)

福島支會第五回總集會　（承前）

十月九日大日本蠶絲會福島支會第五回總集會を福島縣相馬郡中村町に開設するを以て、本會より松平會頭並に學藝委員なる農商務省蠶絲課長加賀山辰四郎、蠶業講習所技師辻橘太郎　同林獅作の三氏及小池事務員は臨場の爲め、十月八日午前十一時四十五分上野發の汽車にて出發せり、進んで富岡驛に至れば福島縣技師毛利正雄氏來り迎へ同乘す、午後七時三十二分中村に着すれば轟然たる數發の煙花は一行の到着を報じたり、停車場には平岡福島縣知事及金指相馬、馬場伊達、遠藤雙葉、熊川河沼の各郡長其他有志者來り迎へられ、新開樓なる旅館に投ず。

十月九日總集會開催の前に於て、一行は金指郡長の案内にて平岡知事等と共に實業界の偉人二宮尊德翁の墓に詣でたり、翁の遺物なる各地諸侯より藩の仕法依賴書及翁の仕法に關する上書類、翁の平素着用して郡村を巡廻し或は視察し實踐せられたる折の衣服大小等を特に陳列して會頭の一覽に供へ、二宮翁の嫡孫なる二宮某氏之が說明を爲せり、次て相馬神社に參詣し同神社の寶物及町内有志者の珍藏に係る古書畫刀劍等の陳列品を觀覽し、午前十時三十分に至り會場なる中學校に至る、十一時煙火三發を以て開會を報じ、第一鈴にて會員着席、第二鈴來賓着席、第三鈴會頭一行幷支會長臨場(此間奏樂)第四鈴にて平岡支會長開會の辭あり、次て毛利幹事長は會務の報告を爲し、次に會頭は告辭的演說あり後ち、左の三氏は本會の旨趣を贊成し會務に貢獻し其功勞顯著なるを以て特に總裁殿下より、五等有功章を授與せられたり、洵に三氏の一大名譽ありと云ふべし。

犬塚盛太郎　西戸乙止郎　島　忠顯

次て金指郡長其他來賓の祝辭あり、支會長閉會の辭を述べて一同退場し、別室に於て來賓及會員に午餐を饗せり。

午後一時煙火二發を以て蠶絲業講話會の開會を報じ右の會場に於て講話を開催せり、演題及講話人名左の如し。

蠶絲業の經濟組織に就て　學藝委員農學士　加賀山　辰四郎
蠶病の話　同　林　獅作
桑樹栽培に就て　同　辻　橘太郎

此日朝來微雨降りに降りたるを以て會員の集合如何やと氣遣ひたるに、式場及講話會場共に一千五百名以上に達し、意外なる盛會なりしは當地方に於ける蠶絲業の氣運の如何に盛なるかを察するに足る、殊に中村町の有志者は總集會の開催を贊襄し午後園遊會を舊城内の廣場に開き、餘興として當地の名物なる騎武者の馬上擊劍、競馬等の催しある筈なりしが降雨の爲折角の準備も水泡に歸したるは遺憾の至りなりし、依て園遊會を變じ四山館に於て一行歡迎の宴會を催ふしたるが來會者百五十餘名、平岡知事開會の挨拶に次て會頭の答辭あり、頗る盛會にて一

行はれ午後八時退場、更に知事及金指郡長等の催しに係る一行慰勞の宴に臨み、翌十日は宮城縣仙臺市に於ける東北實業大會に臨場の爲め出發す、同行者中の加賀山、林の兩技師は分れて歸京の途に就けり。

埼玉支會品評會受賞者氏名

埼玉支會第一回品評會の概況は前號に所載の如くにして、審査褒賞に就ては前項記載の如く林學藝委員は有益なる意見を發表せられたるが、總出品點數二千九百五十二點中、褒賞せられたる者一等十三點、二等五十三點、三等百六十五點、四等五百七十五點にして、一二等の受賞者は左の如し。

壹等賞

蠶種之部

埼玉縣　吉田勢以　　同　山口藤平
同　福島角次郎　　同　橋本秀作

生絲之部

埼玉縣　小林善之助　　同　碓氷社　木泉組

繭之部

福島縣　石幡吉四郎　　同　石幡　青左衛門
埼玉縣　古谷蠶業傳習所　　同　野村要藏
福島縣　菅野宇兵衛　　埼玉縣　飯島勉松
山形縣　多田庄四郎

貳等賞

蠶種之部

埼玉縣　田嶋勘九郎　　同　金井松五郎
同　新井定三郎　　同　木村芳五郎
同　淺見平三郎　　同　櫻木昇藏
同　平塚貞太郎　　同　櫻木根之吉
同　篠越仲三郎　　山梨縣　代永正平
埼玉縣　鈴木武兵衛　　長野縣　矢島清吉
埼玉縣　村田佐七　　埼玉縣　倉林類藏
同　木村吉三郎

生絲之部

埼玉縣　坂本德三郎　　同　碓氷社　要部組
同　綱野豊次郎　　同　碓氷社　荒川組
同　加藤雅助　　同　林　國藏
同　中野馬太郎　　同　飯田千代吉

繭之部

埼玉縣　野原次慶　　同　新井龜三郎
同　武野清松　　同　田端勘九郎
同　増田龜太郎　　同　柴崎政五郎
同　清水幸作　　同　櫻澤柳太郎
同　櫻井熊太郎　　同　清水又五郎
埼玉縣　中条盛太郎　　福島縣　加藤善助
福島縣　朽木久次郎　　埼玉縣　阪本昇作
同　峰岸勝作　　群馬縣　佐藤太三郎
埼玉縣　坂庭吉太郎　　同　倉林元次郎
福島縣　安田甲子太郎　　埼玉縣　飯島安兵衛
埼玉縣　橋本秀作　　同　茂木福松
同　淺見新助　　同　齋藤忠七
同　逸見喜三郎

下野支會第八回品評會

大日本蠶絲會下野支會第八回品評會は去十月廿五日より二十九日まで同縣會議事堂に於て開催し、同月二十七日午前十一時之れが褒賞授與式を同所樓上に擧行したり、本會よりは松平會頭信田書記を隨へ臨場せらる、總て定刻となるや第一鈴出品人並に會員着席、第二鈴來賓着席、支會長擧式の申請を

爲し、次に井上審査委員長の審査申告褒賞授與の申請あり、松平會頭親く賞を授與し、支會長より賞品を渡され、終りて會頭の告辭並に支會長の、式辭來賓總代碓井氏の祝詞受賞者總代宇賀埼氏の答辭ありて、午後一時式を了り式後來會者に折詰及瓶詰酒を頒ちて午餐の饗應を爲し、暫時休憩後松平會頭は一場の講話をせられたり、而して一二等の受賞者は左の如し。

一等賞

蠶種	玉白	東京府	田村金十郎
繭	伊達錦	福島縣	石幡吉左衛門
同	飛白	山形縣	島津益次
生絲		栃木縣	鈴木製絲所

二等賞

蠶種	白玉	兵庫縣	松田淳治
同	小石丸	新潟縣	鹽谷喜太郎
同	青熟	栃木縣	武井國太郎
繭	伊達錦	福島縣	安田甲子太郎
同	白龍	栃木縣	野澤一郎
同	伊達錦	同	野澤與三郎
同	角又	同	野澤龜吉
同	青熟	同	星擢
同	赤熟	熊本縣	品山芳太郎
同	白龍	同	深迫貢
同	赤昔	群馬縣	早田藤太夫
生絲		栃木縣	須藤儀次郎
同		同	渡邊カネ

製絲工男女功績の調査

本會は蠶絲業の改良發達に資するの目的を以て、曩に功績表彰規程を制定し、製絲業の要素たる繰絲工女の實績を調査し、他の模範となるべき者を選抜し、去三十六年以來六回の功績表彰を行ひしが、引續き明春開催すべき本會總會に於て其第七回の表彰を執行し、同期よりは模範工男に對しても同樣表彰せらるべき旨にて、今回滿二十箇年以上(明治二十一年三月以前より)同一工場に勤續し品行方正、技術優等にして業務に忠實なる者の取調方を各支會、地方委員部へ照會したり。

蠶桑雜觀

▲**直轄蠶絲學校** 文部省にては來年度に於て高等專門の實業學校を設置する計畫にて、豫算中に計上せられたる由なるが、該實業學校は工業學校の特種たる蠶絲學校を創設して、養蠶科、製絲科、機織科、染色科等を置き、養蠶製絲等に必要なる專門の智識を有する人物を養成せんとのことにて、其新敷地としては目下略ぼ長野縣下に決定し、同縣よりも建設費及敷地等約三十餘萬圓を、三箇年繼續として寄附する旨を申出で居れりと云ふ。

▲**桑園獎勵費の交付** 農商務省に於ては全國桑園增殖の目的を以て、四十一年度に於て獎勵費國庫補助合計八萬圓は各府縣よりの申請二三倍の額に達したるに付、同省蠶絲課に於て調査の結果、左の如き割合にて全國道廳府縣へ向け交付の指令を發せられたりと云ふ。

北海道一千二百二十九圓△京都四千九百九十九圓△神奈川二千六百八十七圓△長崎四千四百十九圓△新潟千六百四十九圓△埼玉七千四百五十二圓△群馬四千四百八十二圓△茨城五百九十八圓△栃木千六百八十二圓△奈良八百七圓△三重二百六十一圓△靜岡千四百八十六圓△山梨二百六十九圓△滋賀二千六百八十九圓△岐阜千六百九十一圓△長野四千百四十三圓△宮城七千五十九圓△岩手二百九圓△青森千百四十四圓△山形二千六百八十九圓△秋田八百九十六圓△石川千二百五十五圓△富山四百四十圓△鳥取三千百九十一圓△島根三千圓△岡山千三百四十四圓△廣島二千六百八十七圓△徳島八百九十六圓△香川八百五十五圓△愛媛千三十五圓△高知四千四百八十二圓△福岡二千二百四十一圓△大分二千二百四十一圓△佐賀四百一圓△宮崎二千五百九十一圓△鹿兒島五百十圓

▲**北海道蠶絲會大會** 同大會は去月十六日札幌區中島俱樂部に於て開かれ、本會學藝委員農商務省蠶絲課長加賀山辰四郎同東京蠶業講習所技師辻幡太郎の二氏臨席せられたるが、滿場一致を以て左の件を議決したりと云ふ。

一、原蠶種製造所を地方費を以て設置せんことを道廳長官に建議する件
二、桑園用地として國有未開地を特別拂下割成の件
三、原種改良組合設立の件

▲**聯合共進會の蠶絲館** 前號記載の如く長野市に於て明四十一年に開かるべき聯合共進會には、愈蠶絲館を建設せらるゝこととなりたるが、同館經營協議會にて種々調査の結果、長野市城山縣社東方に建設のことに確定し、既に同館の承認をも經て該敷地の地均しは疾に濟みたりと云ふ。

▲**工女獎勵品評會** 宮城縣器械製絲同業組合にては、去月十六日より二十日迄同縣物產陳列場內に工女獎勵製絲品評會を開き、同十九日之が褒賞授與式を舉行したる由なるが、丹羽審査長の審査報告は有益なりと認むるを以て左に揭ぐ。

機械製絲組合に於て工女獎勵會を開かれたるは今回を以て第二回とす本會の成績を前會に比すれば其技術の進步著しきを見る即ち繰絲時間に於て前會の最長五時五十分に比し本會の三時四十六分なるは二時四分を短縮し繰量に於て前會の二十匁七分に比し本會の二十二匁八分を得たるは二匁一分を增收し伸長最長二割七分なるに比し二割八分を得たるは一分の延伸を增し強力の五十三「グラム」に比し六十九「グラム」を得たるは十六「グラム」の耐重力を增したる如き實に顯著なる成功と言はざるべからず只其節顆の稍多きと目的纎度及最大の差稍多きは功之一簣を欠くの憾あり希くは御努進んで完璧の美を收めんことを殊に本會の如きは全縣組合の顧て之を行ひたるものにして本年靜岡縣下に於て漸く是を做ふたるに過ぎず農商務當局者の如き大に本會の擧を賛し全國をして力めて是に倣はしめんとするの意あり故に本會に於ても能く全國の模範を以て自ら任じ一は以て工女技術進步の獎勵と其慰安とに供せられんことを

▲**岐阜縣製絲業研究會** 去月二十四日同縣製絲業研究會は其總會を開きて、左の決議を爲したり。

一、製絲同業組合を速かに設立する事、二、工女募集取締法發布を其の筋へ請願する事、三、製絲工女職工校廢止の件、四、製絲技術者養成所に併せて製絲試驗場設置の件、五、製絲教婦養成所增數の件、六、模範製絲工女養成所增設の件、七、製絲技師巡回日數增加の件

▲**亘理蠶業學校生徒募集** 宮城縣亘理蠶業學校は明治三十年の創立にして、蠶業に必須なる智識技能を授くるを目的とし、本科別科の二科を置き[illegible]からざることなるが、今期別科生若干名を募集せらるる由因に別科修業期間は、明年一月十五日より同三月十五日迄都合二ヶ月間の由にて、志願者は入學願書に履歴書を添へ同校長金森安之助氏に宛差出すべしと云ふ。

▲**高山社蠶業學校開校式並第二回共進會褒賞授與式** 同會は前號所報の如く、去月十七日群馬縣多野郡藤岡町諏訪社境內故高山長五郎翁功德碑前に於て舉行せられたるが、當日は牧野文部大臣本會々頭其他朝野の貴賓數百名同社員學校職員生徒數千名參列し、町田校長の開校式舉行の辭に次て日下部敎頭の勅語捧讀、文相及群馬縣知事の告辭、町田校長の答辭ありて、更に共進會褒賞授與式に移り、町田會長の式辭、齋藤審査長の申告に次て南部知事には夫々賞狀及賞品を授與せられ、來賓の祝辭受賞者總代の答辭ありて式全く終りを告げ、來賓并に參列者一同同郡會議事堂高等小學校の兩所の宴會場に招かれ、祝杯を舉げたり、當日文部大臣の朗讀せられたる告辭及町田校長の答辭は左の如し。

高山社蠶業學校本日開校の式典を舉行するに際し親しく臨みて祝意を表するは本大臣の欣ぶ所なり。

熟ら列國々際間の關係を觀るに世の政治家特經世家と稱するもの專ら平和を維持し民福を圖るに努むると共に殖產興業の上に於て各々其進步を讓むるに汲々たるものあり而して殖產興業の操作は主として精緻なる學理の應用に俟つ所なきを以て單に一の經驗秘訣のみに委す可からざるものあり卽ち二十世紀の生存競爭は其基礎を學術に置き更に應用普及の程度に依りて勝敗を決するは識者の夙に認むる所にして富強を以て任ずる列國諸般の設備も亦此の原則に由らざるなり

惟ふに本校の如き其起因深く高山社組合創立の當時に胚胎せるものにして爾來數十年關係諸氏協心戮力以て故高山氏の遺志を繼ぐと共に更に工夫を凝らし其成績夙に見る可く現に社員十一萬餘一ヶ年の成繭產額二十萬石以上を算するに至る其國力の增進に裨補すること大なるや知るべきなり

冀むらくは本校の如き長き歷史を有し且我邦特產物の一たる養蠶の振作を以て自ら任ずるものに在りては將來益々斯業の改良發展に努め健實なる實業界の信用と德義とを進むると共に學識と技術とを具へたる有爲堅實の人物を養成せられんことを

文部大臣　牧野伸顯

樂園

花の本花翁宗匠選

（三才発）

秀逸

人

寒さうな姿も見えず海鼠哉　陸中　蕉翠

水少し入れて敷見る海鼠哉　上毛　愛華

初冬や歩行けば花も目に雷る　甲府　梢雨

花ほしき上野谷中や初時雨　遷者　花翁

紙に私立中種高山社蠶業學校開校式を挙ぐるに當り文部省大臣閣下及在職知事閣下並に朝野紳士各位の來臨を乞ひて盛黙なる告辭を以て謹啓へつ明に明治三年四月廿日の政府の扶助と共に本校の設立なる見るに至りし所今や其経營時成りてこゝに光榮の式を擧げ

不肖管菊次郎多年の微志を述べて加ふるに之が記念の共護曾各位の盛意を感謝し男力及て現在の事業に保持せて世界へ向て進到の第一に資する為得て幸

明治六年一名の生徒を信州より招致し爾来三十有餘年事業に盛衰なきを信ずりしも蠶業の進歩は国力の基礎なる事は今日の世界に於ては明治三十四年の政府の扶助と社員の協力とを以て本校の設立なる見るに至りし所今や其経營時成りてこゝに光榮の式を擧げ

爲に私立中種高山社蠶業學校長　町田菊次郎

讀者文藝懸賞募集

俳句

▲選者　花の木花翁宗匠

▲課題　寒梅〻雪〻初日〻新年〻屠蘇〻

▲懸賞　天〻(一人)會報一ヶ年分◎地〻(一人)會報半ヶ年分◎人〻(一人)會報三ヶ月分

▲規則　一題一句のこと一人に付五句限り◎天〻地〻人〻は夫々句の頭に置くこと◎優賞上東京市麻布区六本木町三十番地松林宛送附のこと◎投稿は必ず郵便葉書に住所姓名を明記し会員外と雖も住所姓名を明記せざるべし

狂句（柳樽）

▲選者　萬朝報記者　高橋鬼川先生

▲課題　蠶絲業に関係あるものならば何にてもよし

▲懸賞　天〻(一人)會報一ヶ年分◎地〻(一人)會報半ヶ年分◎人〻(一人)會報三ヶ月分

（原稿メ切毎月三十日限り）

俗謠（都々逸）

▲選者　萬朝報記者　高橋鬼川先生

▲課題　蠶絲業に関係あるものの以外にて女女などに風して成るべく卑猥なるものは消者とす

▲懸賞　天〻(一人)會報一ヶ年分◎地〻(一人)會報半ヶ年分◎人〻(一人)會報三ヶ月分

（原稿メ切毎月三十日限り）

一と口噺

▲選者　萬朝報記者　高橋鬼川先生

▲課題　何にでもよし（但し卑猥なるものは消者とす）

▲懸賞　天〻(一人)會報一ヶ年分◎地〻(一人)會報半ヶ年分◎人〻(一人)會報三ヶ月分

（原稿メ切毎月三十日限り）

注意

〔狂句俗謠一人に付き五句限り一人に付き一と口噺は一題一句のこと　原稿は必ず郵便葉書に住所姓名を明記し大日本蠶絲會文藝係宛にて送ること

蠶海涓滴

▲明治日本、より養蠶技師八名を招聘し各蠶製絲染織等の改良を為せるは慶應工部の方針とする所なり贈員宋義相の談なりと新紙は報ぜり果して然らば。

▲前々號所載の韓國農商工部が全国三百四十五郡に蠶業奨励費拾萬圓宛を分配の談なりとのこと此事に此間に於ける沈むの為に吾人其實現を望むの切なり。

▲床屋の一小僧より聞き上げたる小島倉吉氏経営の小島商会の蠶業界に一大新勢力を捲へて去月十七日民を迎えより到徒の盛況を受く名物なる説。

▲柞蠶製絲界に大然慨を興へたる阿部氏對崎三郎社が蠶業奨励費の餘剰を決ありたりと特計局亦宜しく公平の賜ひたなせ。

▲山形縣下本年の秋蠶育戸数三割減却立秋数四割減少増加し其政國高五割八分の増加にて前年より七割方増産すと同盟者蠶業の盛ならん。

▲岐阜縣の勤産百十七人蠶業中四萬五千圓に對し蠶同業協會に蠶同業者其財源に苦んで蠶種に識案を立て開業者の大反對を受けつゝありと云もなり。

▲但馬蠶業中興の祖上垣守國翁の百年祭去月十日其の郷土養父郡四谷村に挙行せられ盛況の人々群集引きも切らずしと高徳千載に不朽なりと言へ知さか。

▲九月末調べ各國産蠶組合總数三百十九外長野縣の組合三百四十二にして其内蠶業奨励の組合百七十六外ゝ石と云ふ同縣蠶業者の悲少前の思想可歎哀。

▲信州諏訪　生絲同盟組合は諏日其懇會を開き蠶況視定期取引上の懸案を熟正する為取引方法改正の骨を講決したりと云ふ總況其目前の賣買の急。

▲横濱市場　生絲の体勢四萬機其價格約三千萬圓時と融通力を失ひて金融界に大打撃を與ふ蠶家の困難既すると除りより之が救濟策を講ずるは急務の急。

▲正金銀行　當局者此際生絲資金の融通能力を失ひつゝあるは他産貿易に障害を與ふる大なりとし目銀と受渡資金の融通能力を失ひつゝあるは他産貿易に障害を與ふる大なりとし目銀と受渡資金の融通能力を失ひつゝあるは他産貿易に障害

▲蠶絲と縣　為とし向十五年間に桑園二萬町歩在園二十万石と為すの計畫なりとは同国蠶業奨励組合技師の談なりとて河北新報に見り完成の暁縣富財すべき歟。

新刊紹介

簡易松下式全蠶育法　全　松下兵太郎述

（附機松下式全蠶育法に関する講話を単記して上梓したものである。其説く本書は松下式の全蠶育法に関する簡易明瞭なるものにして、其説く處は、一説の下書易に其の奥義を明らく得んか、獨法の研究に志す者一冊を左右に備ふるも可なりん（定価金五拾銭封税共）

高橋伊勢吉郎　共著
永井　環

實用蠶桑問答　全

本書は蠶絲業者が所業を修營する上に於ての參考と為さしむべく、蠶業に関する質疑二百八十余を集めて一々之に解答を附したるものである。蓋汎なる蠶絲業に對する質疑に、之に依て其悉くを氷解し得ざるものなし。聞くに其御なく錦ゆに互なるも一冊本書を繙かば必ず多くの協合に於て好個の指針となり其御なたるべきは敢て疑するの必要はあるまじ（定價八十銭高橋氏南伯馬町二丁目有朋堂）

蠶事報告　第三十號

前號は蠶絲業狀況調査、桑の介殻蟲蠶の冬期死亡原因調査、桑の介殻蟲蠶試驗、桑の害する蛹蛾幼虫蟲の調査等の事項を記載し、後號には蠶桑病の流行期保護法、及蠶の起源病菌に關する調査を載せ、蠶業者の思に特益なる試驗調査であるから、斯業熱心の士は是非一讀せられんことを推奨するのである。

東京蠶業講習所刊行

寄贈書目

蠶絲業防蚕修成組報告書
蠶絲業防蚕修成錄
山形縣蠶絲業防蚕修成錄
農事伝習第二登第十二號

群馬
山口縣蠶絲業防蚕事務所
山梨縣蠶絲業防蚕事務所
博文館

蠶業國　第二號
農業國　第九號
扶桑館　第六二號
實業報社　第二第一〇號
蠶業報社　第七三號
長野縣小諸郡蠶組合三十九年度蠶絲業成績報告
産業組合主任官會議蠶業録
山梨縣生絲同盟組合事務報告
蠶絲業改良同盟會總録
蠶絲業防蚕産業成績三九年度
實用蠶桑問答　全
蠶事報告　第三十號第三十一號
韓國中央農會報總會録
上毛新聞　第一號第五號
蠶業講義録　第六〇號
京須實業新報　第六一號
東京正論　第六二號
山口縣農會報　第九號
福岡縣農會報　第一〇三號
蠶桑農友會報　第一三號
日本之家禽　第七號
第三號
鈴田新報　第一卷第五號
新農業　第一卷第六號
農業時報　第一卷第九號
實業之埼玉　第二卷第一〇號
岩手縣農會報　第五七號
城戸蠶絲時報　第二三三號

丹後通社
大日本農業協會
扶桑館
實業報社
蠶業講習所
農業時報
蠶業時報
農業之埼玉
岩手縣農會
城戸蠶絲時報

大日本山林會報	第三〇〇號	大日本山林會
圖書月報	第六ノ二	東京書籍商組合事務所
日本農業雜誌	第三ノ三號	設實新聞會
新民	第二八號	報德社
工業化學雜誌	第二七號	工業化學會
學士會月報	第二三七號	學士會
大日本農會報	第三一七號	大日本農會
大日本私立衛生會雜誌	第二九四號	大日本私立衛生會
農業世界	第二ノ一三號	博文館
農事雜報	第二五號	農事雜報社
氣象集誌	二十六年第一一號	大日本氣象學會
北越の蠶業	第九ノ一〇號	新潟縣蠶絲會
大農國	第二一八號	帝國農家一致協會
京都府農會報	第一八四號	京都府農會
廣島縣農會報	第一四九號	廣島縣農會
埼玉農報	第三二號	埼玉農報社
新潟縣農會報	第四七號	新潟縣農會
蠶業新報	第一七六號	蠶業新報社
岐阜縣農會報	第一七六號	岐阜縣農會
島根縣農會報	第二五號	島根縣農會
中央農事報	第九二號	全國農事會
會報	第一號	帝國農家一致協會
動物學雜誌	第二二九號	東京動物學會
染織時報	第二五三號	大日本織物協會
會報	第二四號	長野蠶種同業組合聯合會
何鹿實業月報	第一〇六號	何鹿郡蠶業會
兵庫縣蠶業會報	第八一號	兵庫縣蠶業會
生絲日報	十一月分	原合名會社
中外商業新報	十一月分	商況社
横濱貿易月報	十一月	横濱稅關
統計集誌	第三二〇號	東京統計協會
埴科蠶業	第三五號	埴科蠶業同業組合
山梨縣蠶業時報	第三〇號	山梨蠶友會
愛國婦人	第一三九號第一四〇號	愛國婦人會
植物學雜誌	第二五〇號	東京植物學會
武德誌	第二ノ一〇號	武德會
昆虫學雜誌	第一ノ二號	昆虫學會
農業新聞	第二六號	農業新聞社
北海道蠶絲會報	第四八號	北海道蠶絲會
土佐蠶絲時報	第六一號	土佐蠶絲同志會
通商彙纂	自六二號至六七號	外務省通商局
月報	第一三三號	横濱商業會議所
三田商業界	第三ノ十一號	三田商業研究會
興農雜誌	第一ノ七號	興農園
Bulletin des soies et des soieries No. 1583—1587		Revue hebdomadaire lyonnaise l'Indépendante.
Bollettino di Sericoltura. No. —35.—39		pubblicata a cura dell' Associazione dell' industria del Commercio delle Sete in Italia.
Statistique de la Production de la Soie en France et à l'Étranger.		Syndicat de l'Union des marchands de soie de Lyon
Empire du Japon relevé des plantations de la condition des soies.		Empire du Japon condition des soies yokohama.

人事彙報

▲紫藤章氏　本會理事にして生絲檢查所長なる同氏には正五位に敍せられたり。

▲大林雄也氏　本會特別會員なる同氏には從五位に敍せられたり。

▲小山已熊氏　本會秋田支會副會長にして秋田縣事務官なる同氏には高等官三等に陞敍せられたり。

▲今野東吾氏　本會埼玉支會副會長にして埼玉縣事務官なる同氏には高等官四等に陞敍せられたり。

▲添田敬一郎氏　本會山梨支會副會長にして山梨縣事務官なる同氏には高等官三等に陞敍せられたり。

▲折原已一郎氏　本會滋賀支會副會長にして滋賀縣事務官なる同氏には高等官三等に陞敍せられたり。

▲岡田宇之助氏　本會長野支會副會長にして長野縣事務官なる同氏には高等官三等に陞敍せられたり。

▲帆足準三氏　本會岩手支會副會長にして岩手縣事務官なる同氏には高等官三等に陞敍せられたり。

▲永井金次郎氏　本會富山支會副會長にして富山縣事務官なる同氏には高等官四等に陞敍せられたり。

▲三宅源之助氏　本會鹿兒島支會副會長にして鹿兒島縣事務官なる同氏には高等官四等に陞敍せられたり。

▲東一左氏　鹿兒島縣肝屬郡高隈村長たりし同氏には公同事務に勤勉せし廉を以て賞勳局より藍綬褒章を下賜せられたり其賞記左の如し。

資性温良德望一郷に遍し夙に村政に從ひ町村制施行以來再三選されて村長と爲り克く地方自治の發達を圖り最も心を女子教育に用ゐ婦人協風會を起し或は婦子を慕募し地方啓誘懇學の風習を養ひ學校の設備を完整して學齡兒童の就學を督勵し殊に私費を投して養蠶業の振作に努め農耕の改良を誘掖して秋收を增し堤防及隧道を改修して水害を除き其他惡疫の豫防に基本財産の增殖に盡力する等公同の事務に勤勉し勞效顯著なりとす依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を褒彰せらる

▲木村小左衛門氏　島根縣大原郡大原町なる同氏には公同の事業に貢獻せし功勞尠からざるを以て賞勳局より藍綬褒章を下賜せられたり其賞記左の如し。

資性温厚曾て郡寄役庄屋戸長郡會議員等の職を奉し常に志を殖産公益に勵まし私費を投して製茶傳習場を設け生徒を養成し模範桑園を栽培して有志に頒與し以て製茶蠶業の發達を誘掖し木村農會を組織して農事の振作に努め殊に畜牛改良の必要を說示し郡内種牛組合等に資金を貸供して種牛の購入を助け以て斯業を發揚するに至らしめ其他紛爭を調停し弊風を矯正し教育及衛生機務に力を竭す等爲めに費す所尠からず洵に公衆の利益を興し成績著明なりとす依て明治十四年十二月七日の勅定藍綬褒章を賜ひ其善行を褒彰せらる

交詢餘錄

●外國種要望　伊、佛、清國種等の原種一種に付二三蛾宛試驗用として分與せられ度し御持合せの方は至急下名迄て代價御一報を乞ふ。
茨城縣筑波郡久賀村　坂入勇

●春蠶種要望　確實なる者千枚程買入れたし出殼繭を添へ至急照會ありたし但採否即答を要する者は返信料添付あれ
愛知縣八名郡三上村　山口莊司

●風穴蠶種貯藏規定要望　天城風穴葛木風穴吐山風穴所有者は何卒下名へ蠶種貯藏規定御送付を乞ふ
高知縣吾川郡横畠村　山崎正猶

大日本蠶絲會埼玉支會指定寄附金人名

金壹百五拾圓	本庄町民	金百圓	競進社養蠶傳習所
金百圓	兒玉郡蠶種同業組合	金百圓	片倉吉五郎
金百圓	小野光景	金百圓	荒井清五郎
金百圓	若尾文太郎	金九拾圓	石川幾太郎
金八拾五圓	加藤金三郎	金七拾五圓	木村九藏
金七拾圓	小高生作	金七拾圓	野本治兵衛
金七拾圓	篠塚入太郎	金五拾圓	小口橘太
金五拾圓	林勇藏	金五拾圓	岡角市四郎
金五拾圓	片倉俊太郎	金五拾圓	原製絲所

AVI.

1°. Le bulletin de l'Association s ricicole du Japon est l'organe des membres de cette societé qui compte actuellement plus de 20.287 membres.

2°. Cette Association a pour but de développer toutes les industries de la soie en publiant un rapport mensuel, dans lequel il sera mentionné tous les faits et études sur la soie émanant de savants et intéressés.

3°. Dans ce rapport sera inscrit dans les langues européennes le mouvement mensuel de la Condition des soies de Yokohama, lequel sera distribué aux intéressés étrangers.

4°. L'Association recueillera et publiera les essais et études faits par les interessés étrangers en matière des soies.

La Direction de l'Association Séricicole du Japon.

NOTICE.

1) The report of the sericultural Association of Japan are intended to serve the interest of the members of the association, whose number is over 20.287

2) This association has for its object the development of all silk industries by publishing a monthly report containing the facts and studies on silk by specialists and persons interested in silk.

3) In this report the monthly statement of the Yokohama Silk Conditioning House will be published in a European language for distribution among foreigners interested in silk.

4) The association will collect and publish articles and studies foreigner of topics concerning silk.

The Direction of the Sericultural Association of Japan.

金五拾錢　木庄町蠶絲織物信用組合長　柳澤勘次郎
金五拾圓　吉田清英
金四拾圓　林清吉
金參拾圓　越壽三郎
金參拾圓　加藤幸太郎
金參拾圓　五嶋直衛
金參拾圓　森澤吉五郎
金參拾圓　內田勝太郎
金拾五圓　小島甲子次郎
金拾四圓　石倉森藏
金拾圓　田邑實次郎
金拾圓　福島庄太郎
金拾圓　向井勝吉
金拾圓　關根拔通
金拾圓　神田佐吉
金七圓　福島桂三郎
金五圓　長谷部謙藏
金五圓　吉田喜助
金五圓　箕輪萬五郎
金五圓　清水勝重
金參圓　祺野豊次郎
金五拾圓　林清吉
金四拾圓　片倉佐一
金參拾圓　大木金左衛門
金參拾圓　甘蔗社本庄分工場
金貳拾圓　石倉又左衛門
金拾五圓　清水隆次郎
金拾五圓　森田庄吉
金拾圓　內藤宗七
金拾圓　金井藤次郎
金拾圓　內田文平
金拾圓　秋山金四郎
金拾圓　森田周藏
金拾圓　山崎茂十郎
金七圓　米倉定三
金五圓　高野愛次郎
金五圓　山岸勇
金五圓　太田佐治摩
金五圓　杉浦清助
金參圓　清水鄙重郎

大日本蠶絲會埼玉支會入間郡委員部指定寄附金人名

金壹圓　長島鶴太郎
金壹圓　中村長藏
金壹圓　宮井大三郎

大日本蠶絲會千葉支部寄附金品

金四拾八圓九拾壹錢六厘
小長持壹棹　書箱壹個　印籠壹個　煙草盆六個　小土鍋五個　カルトン壹個
土瓶八個　茶碗八十個　五合例壹個

元千葉縣蠶友會

大日本蠶絲會報廣告料

	特等	並等
	一頁半頁	一頁半頁一四分ノ一頁
一回乃至二回ニ付	十五圓	十二圓
三回乃至六回ニ付	八圓五十錢	七圓
七回以上一回ニ付	五圓	四圓
十圓	十二圓	十圓
六圓	七圓	六圓
三圓五十錢	四圓	三圓十錢
八圓	十圓	三圓五十錢
五圓	六圓	
三圓	三圓十錢	

四分ノ一頁以下ハ一行ニ付金參十錢ヲ申受ク

會員ハ右料金ノ二割引トス
特等料金ハ四分ノ一頁未滿ハ謝絕ス
一頁ハ前金ニアラサレハ掲載セス
一行二十七字詰七十二行トス

◉本報定價　一冊金拾五錢　一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十年十二月二十日印刷發行

東京市神田區美土代町三丁目二番地
編輯兼發行人　小池松市

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍活版所

東京市神田區美土代町三丁目二番地
發行所　大日本蠶絲會
（電話本局一四七三番）

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filatures.	Prix. Prices.
	Soie. Silk.					Maximum du prix. Highest prices.
	Piculs.	*Piculs.*	*Piculs.*	*Piculs.*		*Yen*
1	245	131	12	—	Nansôsha.	1.295
2	688	150	1	478	Okanoyaseishijô.	——
3	—	—	—	502	——	1.120
4	841	249	83	—	Yamajûgumi.	1.130
5	250	232	609	—	Takatasha.	1.205
6	474	114	50	—	Jônansha.	1.305
7	557	210	52	85	Kiodôsôgekaeshijô.	1.170
8	633	274	28	—	Bokujôsha.	1.175
9	402	414	—	84	Jônansha.	1.250
10	—	—	—	—	——	——
11	936	338	34	—	Shummeisha.	1.170
12	439	210	47	1.320	Kôeisha.	1.150
13	349	542	29	—	Tôkôsha.	1.120
14	389	312	18	700	Tôkôsha.	1.120
15	498	258	97	—	Miyaseishijô.	1.110
16	447	98	624	1.303	Shummeisha.	1.130
17	—	—	—	—		——
18	75	401	114	—	Yajimagumi.	1.160
19	408	418	60	50	Kôshinsha.	1.230
20	377	337	24	650	Kokuhôsha.	1.130
21	327	329	110	—	Tôbikwan.	1.130
22	340	209	70	—	Kiôdôsôgekaeshijô.	1.040
23	—	—	—	—	——	——
24	—	—	—	—		——
25	1.249	213	996	—	Tokitakwan.	1.010
26	687	476	109	—	Hakuhôsha.	1. 090
27	485	249	105	253	Kanrasha.	1.050
28	408	150	69	1.172	Tenyûsha.	1.050
29	246	996	65	—	Shinrinsha.	1.085
30	334	75	58	301	Yajimagumi.	1.100
—	—	—	—	—	——	——
Total	12.861	7.385	3.524	6.898	——	——

1 yen vaut environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg. environ.

TABLE DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Novembre 1907.)

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(November 1907.)

	Report.	Brought over.	Arrivé. Arrived.	Vendu. Sold.	Exporté. Export.	Renvoyé. Sent back	Aspectes.	Brought forward.
Filature.	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*
Filature.	12.969	10.582	5.396	—	—	1.193	16.979	
Zegurî.	5.859	2.627	923	—	—	116	4.836	
Bersei.	1.483	20	156	—	—	229	1.113	
Kakoba.	73	1	—	—	—	10	66	
Orikayaki.	18.393	12.644	6.483	7.584	1.542		23.055	
Autres.	8.813	14.961	12.679	12.834	663		9.737	
Other.								
Total.								
1906.								

TABLEAU COMPARATIF DES FILATURES PENDANT LES DERNIÈRES ANNÉES.

NOMBRE D'USINES

Années	Usines ayant plus de 500 bassines		Total	Usines ayant plus de 200 bassines		Total	Usines ayant plus de 100 bassines		Total	Usines ayant plus de 50 bassines		Total	Usines ayant plus de 10 bassines		Total	Totaux		
	Filatures	Zaguris		Filatures	Zaguris		Filatures	Zaguris		Filatures	Zaguris		Filatures	Zaguris		Filatures	Zaguris	
1905	7	30	37	75	106	181	229	142	371	586	124	728	1423	654	2077	2320	1074	3394
1900	18	11	32	....			262	136	398	521	43	566	1269	404	1673	2072	597	2669
1896	21	15	36	....			273	87	360	509	41	550	1480	474	1954	2283	617	2900
1893	3	3	6	....			121	17	138	349	39	383	2129	542	2671	2602	601	3026

NOMBRE DES BASSINES

Années	Filatures	Zaguris	Total
1905	128.151	104.151	232.303
1900	122.166	55.022	177.188
1896	130.753	47.514	178.267
1893	85.988	19.169	105.157

NOMBRE D' OUVRIÈRES

Années	Filatures	Zaguris	Total
1905	126.077	103.725	229.802
1900	117.861	58.045	175.906
1896	124.441	48.460	127.901

Note: Le mot Ashibumi signifie Fileture où l'asple est mu à pied, au moyen d'unarbre portant une roue et un lerier.

MARCHÉ DES SOIES.

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

L'exportation de la soie Japonaise, depuis le premier Janvier de cette année jusqu'à la fin d'Octobre, dépassait cent million de *yen*, de sorte que le résultat de cette année semblât meilleur que celui de la même période de l'année passée. Mais, bientôt, le marché de Yokohama s'est laissé influencé extrêmement par la grande baisse d'argent et de cuivre, d'une part, et par la crise financière de l'autre côté du Pacifique, d'autre part. Dès le milieu d'Octobre, notre marché commença à perdre peu à peu de son activité. Entrant dans le mois de Novembre, l'activité faisait de plus en plus défaut. Extra No 1, titre fin, et *Orikayeshi Itto-umo*, qui étaient respectivement, pendant les dix premiers jours, de *yen* 1.130, de *yen* 1.185 et de *yen* 1.135 accusèrent respectivement les bas prix de *yen* 1.015, de *yen* 1.080 et de *yen* 1.020 dans les dix derniers jours. Cette situation défavorable n'a pas changé au mois de Décembre. La soie à terme semble baisser au-dessous de 90 *yen*. *Shinshu* extra No. 1, qu'on a consenti à vendre aux bas prix de 945 *yen*, ne s'est pas vendu même à ces prix. Aussi, le nombre des balles vendues pendant le mois de Novembre de cette année se chiffre-t-il à peine par 12.000, tandis que celui des balles vendues pendant la même période de l'an dernier dépassa 18.000 balles. Notre marché a des stocks énormes de 40. 000 balles.

Voici d'ailleurs les tableaux indiquant le mouvement de la soie durant la même période.

RAWSILK MARKET.

THE YOKOHAMA RAW-SILK MARKET.

The entire value of the silk exported from this country during the period from January to December this year, amounts to more than a hundred million *yen*. This figure, when compared with that for the corresponding period last year, shows a decided success.

However, the great fall in the value of silver and copper followed by the disastrous panics in the American money market, affected our Yokohama market to a remarkable extent. The effect first began to be felt in the middle ten days of October; and the dull condition incidental thereto was further accelerated in November. The Extra No. 1 which had commanded the price of Y. 1,130 in the beginning of the month fell to Y. 1,015 in the end of the month, while *hosomono* (fine size) and *Origaeshi Ittouma* which were quoted each at Y. 1,185 and Y. 1,135 fell to Y. 1,080 and Y. 1,020 respectively. This downward tendency did not cease even in December: the term silk threatened to fall even below Y. 90, the extra No. 1 of *Shinshu* showed a sign to change hands at the low price of Y. 945. And even at those low prices no brisk transaction was conducted; and the market in general presented a sadly stagnant condition. In consequence, while during November last year 18,000 bales did really chang hands, this year has so far only 12,000 bales to show against that figure. And still 40,000 bals are now idly awaiting the disposal on the market of Yokohama.

We give below the tables indicating the movement of the silk during the same period.

STATISTIQUE DES FILATURES
AU JAPON
PUBLIÉE PAR LE MINISTÈRE DE L' AGRICULTURE
ET DU COMMERCE.
EN 1097

Départements	Nombres d' usines					Nombres des bassines				
	Filatures	Zaguris	Ashibunis	Doupplons	Total	Filatures	Zaguris	Ashibunis	Doupplons	Total
Hokkaido	3	"	"	"	3	150	"	"	"	150
Tokio	26	"	40	"	66	2.574	"	3.751	"	6.325
Kioto	110	1	"	2	113	2.708	30	"	33	2.771
Osaka	3	"	"	"	3	72	"	"	"	72
Kanagawa	55	10	18		84	2.821	608	1.837	26	5.292
Hiogo	71	7	1	4	83	2.829	115	10	126	3.077
Nagasaki	2	1	"	"	3	70	14	"	"	84
Niigata	71	4	2	"	77	2.983	46	22	"	3.051
Saitama	34	12	131	"	177	4.315	3.924	10.065	"	18.304
Gumma	63	231	"	"	294	2.847	51.347	"	"	54.194
Chiba	21	20	"	"	41	1.149	304	"	"	1.453
Ibaraki	36	18	3	"	57	2.759	200	57	"	3.016
Tochigi	10	7	"	"	17	680	90	"	"	770
Nara	5	"	2	"	7	196	"	50	"	246
Mie	110	8	8	5	131	4.481	122	108	96	4.808
Aichi	185	7	16	77	285	8.097	119	244	2.656	11.116
Shizuoka	95	11	"	5	111	5.923	268	"	220	6.411
Yamanashi	115	12	"	2	129	9.446	238	"	82	9.766
Shiga	16	"	1	"	17	1.194	"	10	"	1.204
Gifu	267	8	3	2	308	9.367	113	503	20	10.003
Nagano	483	56	6	7	552	36.447	2.104	1.550	134	40.235
Miyagi	39	"	"	"	39	3.133	"	"	"	3.133
Fukushima	35	28	1	"	64	2.051	16.718	15	"	18.784
Iwate	52	5	"	"	57	2.507	930	"	"	3.437
Aomori	2	"	"	"	2	40	"	"	"	40
Yamagata	76	"		"	77	4.094	"	31	"	4.125
Akita	9	"	"	"	9	590	"	"	"	590
Fukui	29	4	4	"	37	1.273	95	71	"	1.439
Ishikawa	32	"	3	"	35	540	"	58	"	558
Toyama	64	"	5	"	69	1.486	"	395	"	1.881
Tottori	37	19	7	1	64	1.497	303	135	15	1.950
Shimane	28	22	6	"	56	1.822	450	105	"	2.377
Okayama	15	2	2	"	19	952	20	20	"	992
Hiroshima	6	11		"	20	285	118	30	"	433
Yamaguchi	10	2	10	"	22	558	35	151	"	704
Wakayama	8	"	"	"	8	522	"	"	"	522
Tokushima	2	"	2	"	4	140	"	50	"	190
Kagawa	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
Ehime	28	"	16	"	44	1.595	"	220	"	1.815
Kôchi	11	55	12	1	79	749	1.040	180	31	1.982
Fukuoka	7	1	2	"	10	342	10	22	"	374
Oita	19	1	3	"	23	870	16	30	"	916
Saga	1	"	"	"	1	20	"	"	"	20
Kumamoto	10	14	20	1	45	576	443	558	10	1.588
Miyazaki	14	17	5	"	36	841	217	82	"	1.140
Kagoshima	15	10	1	"	26	661	251	10	"	922
Totaux	2.320	604	362	108	3.394	128.152	80.349	20.371	3.431	232.303